

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 平成元年十二月十五日 印刷
 平成元年十二月一日発行 (毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通卷七五一号



日川協加盟

No. 751

十二月号

平成二年

新春おめでとう会

日時 1月15日(祝) 午後1時開会
会場 大成閣(和室)

大阪市南区大宝寺町中之町二六
(心斎橋大丸とそここの間を東へ約百米)
電話 06(271)5230

挨拶
句会

西尾 栞

兼題

「ポーズ」

河内 月子選

「馬」

阿萬 萬的選

懇親宴

会費 六千円

川柳塔恒例の新春行事です。同人・誌友を問わず、
多数ご参加下さいますようお願いしています。

川柳塔社

川柳塔建立について

初代川柳二百年忌と麻生路郎二十五回忌を記念して、
このたび、高野山大霊園に川柳塔社同人と川柳愛好家
供養のため、川柳塔を建立するにあたり、多数の方々
から基金が寄せられて目標を達成し、十一月十二日、
除幕式ならびに開眼法要を挙行いたしました。ここに
厚くお礼申し上げます。

川柳塔社

年賀広告募集

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円 ③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼第二次原稿締切 12月7日(必着)

〒581 八尾市中田二一三〇一 高杉鬼遊方

川柳塔社 会計室

脳と心

西尾 葉

私は常々、川柳は脳で作るものか、心で作るものかと迷っていたが、ある日、前大阪大学学長の山村先生の「私の履歴書」を読んでいると、司馬遼太郎さんとの対話がかかっていた。

「一流の絵かきさんは心で描いてゆく。そのため、本当のリングよりも絵の方にひかれますね」と司馬さん。

「カラー写真より絵の方をとるのが、人間の心だと思ふ。もしカラー写真をとれば、それは大脳を主として働いたものである」と山村さん。

人間の心は脳にあるのか、あるいは心と脳とは別のものかということについて、文学者と医学者との見地から論じ合っ

ている。

「私は、脳と心とは別だと考えたい。脳の働き如何にかかわらず、心の温かい人があるではないか」と山村さん。

司馬さんは人間を書く、歴史、地理の中に登場する人間を生き生きと書く。

山村さんは医者だから病気をみる。ただの人間でなく、病を抱えた人間をみる。

人間をみるという点では、二人の考えには違いはない。

川柳家も人間をみることに、両先生には決して劣らない、と私は考える。

ただ私が迷っていた脳で作るか、心で詠むかということである。

そくそくと、いついつまでも残る川柳は、心で詠んだ句であろう。

脳で作った句は理屈があり、人にせまるものがない。難解句と言われる句は、

脳で作って競いあった句である。だから彼等は川柳とは言わないで、作品といっている。

我々は川柳作法の一つとして、ゆたかな心で温かい句を詠まなければならない。

××××××××××

今日の読売新聞に『女性だけの納骨堂完成』という見出しで、嵯峨野の常寂光寺に、十一月十五日に落慶法要の行われるという予告があった。

ここには、十年前に「女ひとり生き、ここに平和を希う」という碑が建っている。

これは当初（一九八九年十二月除幕）、九十六人でスタートした会員が現在、三百五十六人になっている。主旨は、第二次世界大戦で多くの若者が戦死したため独身を余儀なくされた女性たちが平和の願いと自分たちの永遠の世にしたいという思いを込めて建てたという。

十一月十二日に開眼式を挙行し、永遠に川柳を語り合う「川柳塔」の碑も、またユニークな碑となることであろう。

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(葉)

私の句

泪などみせない空が碧いから

小 谷 美 っ 千

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

脳と心

西 尾 葉 … (1)

なくしたものの得たもの

八 木 千 代 … (2)

川柳塔 (同人吟)

西 尾 葉 選 … (4)

自選集

東 野 大 八 … (31)

■川柳太平記 (139)

川柳の群像 安川久留美

東 野 大 八 … (36)

■連載 柳籠裏三編研究 (二丁―二丁)

東 野 大 八 … (38)

水煙抄

黒川紫香選 … (40)

秀句鑑賞

「同人吟」

久 家 代 仕 男 … (35)

愛染帖

「水煙抄」

川 島 諷 云 児 … (63)

■女性コーナー 茴香の花

橘高薫風選 … (60)
小出智子選 … (64)

なくしたものの得たもの

八 木 千 代

寒氣団が下りているので、今夜は冬のよう
に寒々とした部屋にいます。縁の戸を開けて
も虫の音もなく、虫たちも残りの日々を知っ
て昼のうちから枯葉の下や柔らかい土をさが
して眠りの支度にとりかかっているのによ
うか。過ぎてきた夏や春をなつかしむように
こんな夜は来し方が偲ばれてくる、そんな秋
の灯といえます。

ずいぶんとなくしたのも多かったような
気がします。四十代くらいまでは足し算ばか
りとも思い上っていた季節でした。五十を越
えた頃から、一人ふたりと身内を失い、引き
算の峠にさしかかった別れ道ばかり。訣れば
かりでなく、体力その他すべての私の外装は
剥がされて、骨ひとつ残されることもないと
思いつめたのもその頃でした。

そして今、こうして書きならべていても、
じっくり考えてみたら、失うべくして消えた
ものばかり。ただ認識が足りなかったのと、
見つめるものをみつめていなかったただだと
思い知っているのです。

「べル」……………	千原理瑛選 ……	(66)
一路集「終わる」……………	金井文秋選 ……	(66)
「幹事」……………	小砂白汀選 ……	(67)
初歩教室「湯豆腐」……………	辻白溪子 ……	(68)
佐渡の句碑……………	西尾 栞 ……	(74)
■ずいそう 宝石アラカルト……………	吐田 公一 ……	(75)
本社十一月句会……………	田中正坊 ……	(88)
川柳塔碑開眼式に参列して……………	各地柳壇(佳句地10選/政岡日枝子)……………	(76)
柳界展望……………	十二月各地句会案内……………	(90)
■編集後記……………		(93)

座右の句

明日あるを誓い太陽沈みます

私の句

ふる里の空でほんとの背伸びする

(操子)

岩佐 ダン吉

年齢的には、晩秋ともいえる今の私の季節。つらいと泣き明かしたあの頃の重荷の数は、その荷に耐えて負いつづけてきたことで、却って若いときにはなかった力を感得させてもらい、心の贅を深めることになったようです。一步、一步、衰えてきた足を曳きすりながら旅をつづけているうちに、四十より五十の坂で、実りのある風景がひらけてきたような実感をつかまえることができました。ありがたいものです。神さまは老いというきびしい冬の視野のかわりに、大切なものを大切に見ることができるといふ素晴らしい眼を下さいました。かたちあるものはみんな減びてしまふのでしょうが、時間をかけていっしょけんめい旅を続けているというだけの毎日なのに、一夜を眠り、何ごともなくふつうの朝を迎えるたびに、いのちの深まってゆくのがわかります。心がやわらかくなつてゆく途中だという事も感じられます。この感觸を六十を過ぎてはじめて握ったのですから、この先、七十になつても心を耕してさえいけば、掌から放すことはいないだろうと思われまふ。それに付けても、私のような我儘な者に辛抱強くこたわつて、行先の明りまでくださろうとつき合つて頂ける「川柳さん」。その愛に応えて、残りも明るく生きてみるつもりです。



西尾 栗 選

奈良市 宮口 笛生

トンボの目澄みきつた秋写して

朝夕はめっきり冷えたカマキリよ

蜘蛛の巣に何もかからず秋深む

彼岸花明日香の里の日曜日

コンバイン邪魔が入ったきつね

負け戦承知の闘いだつてある

高石市 浅野 房子

愛されていると錯覚したむかし

人の好きすぐ見抜かれてなめられる

すっぱんの活血を試す中だるみ

献血の生ぐさい血が騒ぎ出す

皿数が増えて任地の父帰る

御座候の列に並んで御座候

松江市 恒松 叮紅

几帳面な世話役がいて元大尉

秋の雲子に背かれた仏間の灯

晴耕の鍬の先から秋深む

無位無冠器用貧乏して達者

何となく無職も忙し十二月

恍惚の人に出逢った十二月

桜井市 岩本 雀踊子

落ち椿女きれいな死をみつめ

野の菊で飾る心の駅がある

手品師の帽子で鳩がみごもりぬ

無口なる女が包丁研いでいる

指眼鏡オトギの国が見えました

細い雨出逢う小さな野辺送り

八尾市 宮西 弥生

嫌なタイプの男と向き合う満員車

独り出て独りで帰る鍵の音

仕事仕事誰のため誰のため

六甲を見て十年の勤めかな

動かざる一人の影をいとおしむ

姉妹他人めきたる七回忌

島根県

堀江芳子

孫よりも頑はないのは正朗さん

とうさんにだけは飲ませぬ苦い酒

真夜中に突然うたいだす点字

逢いに行く足袋の白さに胸はずむ

一合でしんみり昔話など

肝心なところをばかしておく返事

島根県

小砂白汀

幽玄の境で睡蓮花をつけ

谷ひとつづめて霧が詩を描く

萩桔梗尾花かるかや月欲しや

耳学問たちに任せた結果です

永遠に生きておつたら苦しかろ

消費税払ったいわし売れのこり

京都市

松川杜的

金木屋小さな路地を秋にする

台所に妻の句帳が掛けてある

お経より「戦友」歌ってやる亡父の墓

妻と飲むコーヒは少し苦い目に

一合の酒では言えぬ事もある

夢の一つに小京都の赤とんぼ

八尾市

高杉鬼遊

葬式の空がこんなに晴れている

風船がひとつ都会を遁げてゆく

募金箱ならぶそんなに貧しいか

ゴルフよりすることがないいい恰好

ごみの日のごみよりさほど遠くない

とりは鳥さかなは魚らしく生き

あの頃も今も私はよう笑う

ゆつくりと会う約束で受話器おく

深い意味ない一言で痴話げんか

母ちゃんに少し気儘を言わせとこ

単純な発想だから信じとく

真剣な顔で娘とケンカする

肩バット肩の力は抜けますか

他人と割り切れば夫の親切な

オバタリアン自認それから気が軽し

自販機よちよつと働き過ぎないか

知り合いのまた知り合いで気を許す

眉つばの話にきつとオチがある

和歌山市

若宮武雄

問い詰めてならない事もある夫婦

幸福駅ばくの旅路に遠すぎる

威張らねば崩れてしまう仁王像

お茶だけの枯淡を希うお付き合い

でたらめの中へ紛れて出た本音

決心を挫くみくじの捨てどころ

大阪市

西出楓楽

堺市

河内月子

和歌山市 松原寿子

肩に掌をどつと泣かせる語のぬくみ

君へ向く磁石が狂う交差点

消費税裁き切れずに深い秋

裸木も不向きな愛と知っている

蒼い手帳にあなたを記す日の鼓動

チャーミングな笑窪だなんてくすぐられ

米子市 林 荒介

街は秋触れば塾れる他所の柿

火を焚けばパフォーマンズの父が出る

幻聴に討たれて川を跳び損ず

わたしを越えたのは影のようなもの

横顔は古い戦を語り継ぐ

落葉して柿の色付くおもいやり

藤井寺市 吉岡美房

大臣になって一寸先は闇

あんなのが政治している阿呆らしさ

ちぐはぐな話も聞こう老父じやもの

松茸の噂も聞いて病んでい

悪友が一緒に煙草やめてくれ

さりながら頑固な秋を生きている

米子市 林 瑞枝

ログハウスの珈琲美味し森の匂い

竹箒で生家の秋を掃き寄せる

魅力ある家でどの子も出たがらぬ

大船に乗った気で行く義姉の家

茶粥など用意してある法話聞く
ストレス解消に鯉の泳ぐ町

和歌山市 西山 幸

何だなんだ何だ渋柿だったのか

湯豆腐を掬うしみじみ孤を掬う

暦から足早に日が逃げてゆく

白だ白だと言ひ過ぎるから瞬に落ちぬ

S席をかうて不安になっている

ハッピーエンドだからあしたは恐くなる

西宮市 門谷 たず子

ひたむきに走れば稜線見えてくる

牛連れて来た山坂をふり返る

ふる里の祭に帰る橋のかず

母逝って祭ばやしも遠くなり

光悦垣をぬって師の墓川柳忌

伴せは心飾らぬ友といふ

鳥取県 江原 とみお

花茨に触れた痛みが消えませぬ

秋ですよ窓は汚れていませんか

催促があるまでうっかりしていよう

芒野のデートとりとめなく終る

晴朗の秋からもらう鎮静剤

お茶の好きな保険やさんがやってきた

竹原市 小島 蘭 幸

少ししやがむと羅漢と同じ目の位置に

鈴虫の秋深まりぬ雌の触角

秋が来て棧橋の雨降り止まぬ
冗談へ秋のおんなは振り向かぬ
採点の辛いおんなになつて秋

堺市 中川 滋 雀

煩惱と軽い約束してしまふ

思い出はほのかな温みゆで玉子
日日好日わたしを騙している日記

失恋した男も信号待ちに立つ
半分はもののはずみできた夫婦

下関市 石川 侃 流 洞

松茸が出るのに地価が騰らない

笛の音へ踊り疲れた蛇となる
男ならどうする妻へ愚問だな

自信喪失大安ばかり選っている
裸木が月に刺さっている寒さ

岡山市 嘉 数 兆 代 賀

金回りがよくなり父は弱くなる

時代錯誤の波に溺れている小舟
千の想いを語る故郷の墓参径

高齢化神も仏も老い給う
風向きに合して姑の帆はたしか

倉敷市 小 野 克 枝

神に会う一本道はまだ遠い

母が居ていつか目高のくる小川
ニアミスを避けそなたの赤トンボ

一期一会の哀しみ知るや雪椿

うしろから扶養家族の笑い声

堺市 高 橋 千 万 子

候補者と握手片手があざ笑う

八十のメガネ曇ったままで見え
釣書には書けない子供一人いる

退職金でスカッと別れて来た浮気
赤信号一息入れるゆとりくれ

豊中市 安 藤 寿 美 子

健康診断機械ツベコベ言うでない

受付で署名小さくかしこまる
機嫌よくはた迷惑も知らず生き

日々好日郵便も来ず人も来ず
鰯雲ギョーザが食べたくなってくる

柳井市 弘 津 柳 慶

温かい心に触れて罪を悔い

オバタリアンの集合雑音多過ぎる
本音秘めて多数決へ手を挙げる

さまざま顔がそろった通夜の席
僕の半生巻脚絆とリュックサック

尼崎市 春 城 武 庫 坊

百舌鳥鳴いて酒がだんだん美味くなる

日めくりを大事にめくる秋日和
毒舌が過ぎたか前歯ゆるみだし

枯葉舞う此の世の生命軽くなり

臥薪嘗胆赤い戎衣が空に舞う

近鉄九年振り優勝

伊丹市 榎谷 寿馬

統計の中の一人となつて老い
無事故という怖い記録へ乗る線路
ポリシーを持つと世間が狭くなる
松茸の隣へ挑戦するサンマ
入場の先頭を切る車椅子

倉吉市 奥谷 弘朗

慕う氣が妻にあるから丸くゆく
弱点を知つて上手に舵をとり
大砂丘二人の跡がもつれ合う
四季の花咲かせる妻に明日がある
海の子はブルで泳ぐのは嫌い

笠岡市 松本 忠三

むきになるあなたなんだかおかしいわ
責任はわたし一人のものですか
小休止小さくなつて煙草吸い
おばあさん明治の義理を忘れない
暗黙の了解くすくす笑つて

大阪市 津守 柳伸

冷凍の巨峰に午後が姦しい
台湾で焼いた鰻の上まむし
隣国のパートが剥いた栗御飯
外国の石榴も旬に顔を出す
分を知る女で居たいつけ焼刃

倉敷市 稲田 豊作

忘れましようよ昨日は過去のことにして

下らない駄洒落を笑うお付き合ひ

政治には疎く老農田を守る

学のない次男が親を預けられ

消火器で消えない恋が炎えている

奈良市 天正 千梢

暗中模索ブレッシャーかかりすぎ

場末に住んで確固たる意見持つている

しあわせの半分手に入れている器量よし

「敵もさるもの」みけんに縦しわ寄せている

正比例のグラフの描けないところへつき込んで

美禰市 安平次 弘道

砂時計 時の流れに逆らわず

刃物屋をこわごわ覗くある殺意

狂い咲き神にシナリオ確かめる

ユーモアが欲しい動物園に行く

方舟に乗つて仮面が外せない

宇部市 平田 実男

邪心ない孫がいよいよしたシヨツク

塾のない日は少年の顔でいる

外孫と内孫の輪が重ならず

退職金やはり捨て石だったんだ

ベットではないと嫁の目言いたそう

岡山市 川端 柳子

思い出の花を咲かせてたのしまん

好奇心急げ急げの鐘太鼓

火の鳥をまだ放せない老夫婦

人前に出てはにかんだ赤まんま
妻の名を捨ててはならぬ夫看取り

今治市 矢野佳雲

椅子取りゲームたった一人のためにある

切札につかう涙がためてある

桜もいいがなどと言わせる菊の頃

両拳握る子叱り甲斐があり

叱られて恐縮の手の置きどころ

廿日市 林野甦光

なんとなく不揃いの間に住む安堵

足の短い分だけ人さまに遅れ

通り魔にあしたの用事頼まれる

黙々と世を考える暇がある

本物にされた喘ぎがまだ続き

名古屋 越村枯梢

遮断機降りて束の間のプロポーズ

一円玉の喉につかえる夕餉

あははオホホと笑って逝きたい老人ホーム

生来の馬鹿に磨きをかけている

男にも駆込寺が要るそう

豊中市 田中正坊

乱気流 政治マンガがおもしろい

俱会一処 川柳塔に眠らんか

漱石忌 人生わずか五十年

弓削吟行

秋もはや蕎麦の花咲く弓削の里

柳友の句碑たずねれば柿が熟れ

兵庫 辻文平

柱とも杖ともなった妻の汗

父似だと言われて淋し父知らず

暇少し見つけて軍手に握る汗

酔いざめの一滴光る男の絵

甘い汁吸うてしまった針の山

松江市 舟木与根一

与作一揆淡紅色の旗を振る

グイエット中なら秋茄子遠慮させ

わが子には保母の資格を失くして

他人さまがボケた話は止めておく

とじ蓋のお蔭よそ目はコント風

西条市 片上明水

日本を愛すわたしは日本人

ネオン街時計の針を狂わせる

筋書を女性上位に書きかえる

眼鏡また掛け替え相場欄を読む

ハンケチの幅であくびは吐き出され

唐津市 筒井朴竜

妻の交通事故に寄せて

電話ベル救急病棟の夜も忙し

無心なる妻脳挫傷を診るネガ

交替で母看取る子等の眼も赫い

付添いが小用を終える夜明け前

一ヶ月終われどIC妻出れず

大田市 藤田 軒太楼

借り増えて疎遠に過ぎる嫁の里
信じ合う友情今尚守り続け
引き際を飾る自由が欲しいだけ
頑老の片意地入れ歯がくがくと
秋晴れの上気墓参を思いたち

京都市 都倉 求芽

かくし味みたいな女が社にひとり
出る杭が満場一致でかつがれる
穴あいていたのを気づかぬ知恵袋
鈍足を賞められてるとは知らぬ亀
煮こごりの底にふるさとの味沈む

米子市 小西 雄々

お隣へ負けない背伸びごっこする
天国へ着いて道化の服を脱ぐ
農家でもどうにもならぬ米離れ
折り返し地点でもらう思いやり
内祝い紙ヒコークでも飛ばそうか

米子市 石垣 花子

金木犀がここよここよと秋彼岸
北風に向うと本気になる男
子の熱を母の唇だけが知り
青写真まだ書けぬまま老い進む
昔にはふれず看護の手が温い

米子市 野坂 なみ

どの部屋にも灰皿置いたあの頃よ

そして亡夫ヘリモージュ焼の灰皿を
ほとけの皿 私の皿と一緒にです
逃げるから貴女を追ってみたくなる
蒔いた身もいつか噂に耐えている

米子市 菅井 とも子

門出にはやさしい声で励まそう
老父もう最期のように握手する
国を出て文化の違い納得し
遊べる時に遊んでおこう日が暮れる
孫の手を借りて高つくバイト料

米子市 田中 亜弥

へんじようこんごう大師の杖にすがりつく
旅仲間みんなへ飴を二つずつ
自己批判してわたくしを困らせる
火の種をゆずり気楽な旅の空
ひび割れの皿に煮汁がしみて冬

米子市 政岡 日枝子

水溜れて寝ていることが多くなる
ほっという下さい父の帽子です
千の鈴つけて俵せ呼ぶつもり
御飯の刻にごはんを食べているだろか
ピアノ乱打 医者の言葉が気にかかる

米子市 青戸 田鶴

甘くなった大根冬も近くなる
雪月花ころ通わす皿がある
堪忍袋繕いながらもっている

もの忘れ私一人でない安堵
芸術の秋で私も忙しい

米子市 寺 沢 みどり

思い出が有つてしまえぬ飾り皿
呼び出してくれる友ありペダル踏む
虫の音も細り引出し入れかえる
初恋に揺れるおさげを梳いてやる
ふる里に着くと遊びの貌になる

米子市 澤 田 千 春

輪の中に寄せてほしいと鬼もくる
雑踏にあかるい話ききにゆく
越えられぬ川の向うは花畠
魔女になり時に天使で生きている
シナリオに好きなハミング入れて秋

米子市 茂 理 高 代

日に日にと薄くなります私の絵
病む間なく女傑と言われ母がわり
もう少し歩けば私許される
悪女にはなれず枕に笑われる
雨が好きなんで私はへそ曲り

島根県 西 村 早 苗

夢はるか無心で描く冬の海
釣り糸へ声を殺した話好き
B面のくらしにあえて甘んじる
見違いでしたと師走の街角で
たいくつな風が師走のたまり場に

島根県 堀 江 正 朗
想い出を手繰れば妻を泣かすだけ
耐えるとき耳に残っている軍歌

文明に負けるな白い杖が言う
寒いから音みな寒く耳を裂く
雨しきり僕も地球も呼吸して

島根県 柳 原 秀 子

慈悲の顔観音像へ去りがたし
手鏡が弥陀のお顔に似よという
水子地藏水をかけてはぬらす類
札所寺天へ届けの大銀杏(当寺の名木)
一ヶ月早く炬燵を出して無事

島根県 錦 織 文 子

一徹へ回り過ぎさへ知らぬ独楽
ひいきでも満点やれぬカタツムリ
掃除器へ愚痴を吸わせて独りの日
秋風が早いと思う雲の彩
仲のいい夫婦見送る庭の秋

島根県 石 田 清 泉

稲架の気も知らないで今日も雨
催眠商法タタ程高いものはない
コスモスに案内されて門に入る
老人も国民ですぞ消費税
秋の空人間不信の日がつづき

島根県 北 川 民 子

お念仏唱えて亡母の顔になる

これだつて辛抱強さは亡母ゆずり

エヘン橋殿様渡つた里の橋(昔からの橋名)

輪廻かもわが病弱をゆるされよ

ストレスかさつき一輪返り咲き

唐津市 田口虹汀

全身の捻子を緩める仕舞風呂

マイナスもプラスも連れて捻子回し

卵から生れて親になりました

不自由な次女の手を引く手話の道

恋という風に出遭つた日の誤算

唐津市 久保正敏

心にくい言葉を知らぬ筈はない

薪能炎の愛を舞い狂う

自責点ゼロの女に用はない

壁一重近くて遠い胸の距離

市民課の紐付きペンも公務員

唐津市 仁部四郎

いつの世も飽食なぜか罪であり

葬式もなく連休をもてあまし

教員はポケットベルを拒否したい

平成や軍馬の墓標既に朽ち

迂回して踏んだ踏絵の導火線

唐津市 浜本義美

難民が母国の蠅まで連れてくる

草に寝て着さ極まる天無限

個室からナースが走る女が泣く

吉野ヶ里弥生の国へ返り咲く

老いの身の憂きことのみの十二月

和歌山市 堀端三男

あの日から風邪が続いている出会

県境を過ぎると道路舗装され

四字熟語辞典浅学思い知らされる

里親制度過疎に子供の声返る

雑踏で亡妻に似た女見失う

和歌山市 垂井千寿子

松茸のルーツは聞かない事にする

陶工の筒袖今日は鬼になる

宅急便包むこの手が娘へつなぐ

飼主の人間不信に忠実で

籤運が良くて嫁までやさしくて

和歌山市 福本英子

松茸の香り今年も隣から

落城は決してしない母子手帳

先ず亡夫に報告がある菓子の手帳

ブロックの幅で隣と調停に

眼科歯科内科も済ませ寺詣り

和歌山市 牛尾緑良

丸ひとつ描いて幸せ閉じこめる

新米を新米らしく炊いて秋

煩惱と手を結び合う裏参道

月丸し思いを遂げた喜びに

三百年まだ芭蕉から抜けられず

和歌山市 内芝登志代

紙人形うすい身体にふかなさけ
古稀すぎて古い話で温まる

人並みにブランドものに憧れる
平凡なぐらしへ妻のふくよかさ
人恋しもみじ真つ赤に燃えてくる

和歌山市 桜井千秀

引き当てたカードに罪は着せられぬ
種庇うつもり落ち葉の掛け布団
尾を振るとジョークすらすら口に出る

紀子ちゃんに似てますうちの孫娘
悪ふざけだろうか雪が横なぐり

和歌山市 寺田裕美

かすり傷位はほしい未練かも
威張るほど中身が透けてくる軽さ
通帖が詰まると病気が怖くなり
こみ入った話は出来ぬコンパイン
米袋数える指に深い秋

寝屋川市 江口度

十字架を確かめあつて島無口
お隣へ何度もやつてくる毛皮

よう值切る妻で少うし離れとく
世辞に酔い有能社員見失う
澄んだ丘風船思わず手を離れ

寝屋川市 宮尾あいき
ヒマラヤ魔法使いのシルエツト

たわむれに老母背負うてああしんど
軽々とひ孫抱けたも三ヶ月

招待旅行 川柳大会と鉢合せ
ババタリアンすしとビールで気焰あげ

寝屋川市 柴田英壬子

汚染など知らずりんどう われもこう
ふるさとの新米老いの目がうるみ
高ぶりヘシヤネル五番をしまつせず

中座する顔が出口の席を撰る
師とひと言迷いの垣がサツと解け

寝屋川市 岸野あやめ

俱会一処 川柳塔の苔の下
寄付集めに回つて知つたお人柄
創業者天寿を悟る寄付の嵩

年金は有難いけどそんな年齢
ポインセチア老人家庭にも師走

鳥取県 川崎秋女

まっ白い皿真つ白に秋の晴れ
真つ白いリングの花の狂い咲き
そつと手を掛けてくれる思いやり

やんわりと愚痴きいたげる雨の午後
漁火が燃える魚の地獄絵図

鳥取県 林露杖

緑あり黄あり秋の田カラフルに
隣から金木犀の香を盗む

秋長けて体重計が笑いだす

政界に女が築く橋頭堡

いつの世か秘書の埴輪が出土する

鳥取県

松下 かつみ

ジープンの行儀は言わぬにぎりめし

黙つて笑顔に心のぞかせる

若い血がきれいな嘘へたじろがず

正直にやれば雑用きりがない

空想をいっぱい持つて白が好き

鳥取県

土橋 螢

大好きな女はまだ来ぬ喫茶店

真実の友だちとなる妻ひとり

キリマンジャロという珈琲を飲まされる

悪という遍歴がまだ終らない

空蟬のアリバイ土の穴ひとつ

鳥取県

新家 完司

よく転ぶ男とともうまが合う

あたたかい息をしている木の玩具

神さまの代理の雨に裁かれる

飽きてしまった皿がなかなか壊れない

森の中にも神さまはいなかった

鳥取県

土橋 はるお

末っ娘が今年に祭り客で来る

女の列に男がたった一人いる

鈴虫も亡母の命日知っている

周遊券の終りに近い無人駅

病院の廊下は内緒する所

高槻市 辻 白溪子

非常階段方向音痴が確かめる

理性勝ち過ぎて出来ないプロポーズ

口下手を除けば頼りに出来る部下

空からの恵み陽も照り雨も降る

事業欲みなぎり社長の作業服

降りかかる火の粉自分で払う外は無い 高槻市 川 島 諷云児

蒔いた種刈り取る妻がいてくれる

嘘本当ほどよく混ぜた五目寿司

倅せは惚れた女房に美味しい酒

飛んで来た礫にあたる不仕合わせ

ひとり笑いがだんだんうまくなってくる 高槻市 河 瀬 芳 子

昭和惜別忘れてならぬことがある

コスモスを抜けると風が優しくなる

美人画の切手の裏にすこし愛

月光燦々やましいことはなかりしや

お隣に恋をしすぎる猫がいる 松原市 玉 置 重 人

石切さんの坂でとうがらしを買う

花の香に誘われて来た万歩計

夫婦ではないなと思う法善寺

スッポンの生き血に頼る訳がある

ガラス食器磨いて今日は秋彼岸 松原市 佐 藤 藤 子

お隣の息子も急に声変り

百度石こんな淋しい所にある

焼魚きれいに食べている美人

ケーブルの私一人に発車ベル

昼と夜賢く分けて生きている

万に一つ賭け夜の雨聞いている

言い訳は一人称で書いておく

大都市の傷みを夜が知っている

芋が焼け生きている温みがたちこもる

兄が逝く星の向こうに星が降る

朝霧に産声高し茅の屋根

二歳児と本気でケンカしてしまふ

モーニングコーヒー昨日と違う私です

井の中のくしゃみを嵐だと思ふ

茜雲 観音像の美しき

夜泣きそばファミコンの手がふと止まる

もくせいは夜のしじまにしかと咲き

隣席が美人 夫が落ち着かぬ

言い訳はしないと決めた影法師

秋風ヘイツキに呷るワンカップ

戦争風化寂れた港の昼の雨

もういちど考え直すドアの外

西宮市 林 はつ絵

西宮市 奥田 みつ子

西宮市 西口 いわゑ

岸和田市 福浦 勝晴

ふるさとの友が呆けたという便り
金策のつかぬ師走の小糠雨

花もよい紅葉もよいと憩う寺

変形の指痛み出す秋の風

秋晴れの町が揺れてる笛太鼓

一つして一つ忘れて淋しがり

カラオケの今夜の艶歌身に沁みる

貴女の夢見たよと意味のありそうな

腕相撲始めて負けた男親

妻強しうすい口髭はえていて

慈善鍋その上献血までさされ

有頂天になると猫がまといつく

大小屋の仕上げは次の日曜日

カルチャーが仕事になった定年後

商いにならぬ一日雨彼岸

同病の妻と仲良き食メニュー

温め酒また痛飲の愚に浸る

音信は年に一度で通じ合う

独居に馴れて一人遊びがうまくなり

庭の樹木秋を告げるは檻紅葉

馥郁と木犀の香渡る窓で読む

陋屋に偲び寄るのは秋の月

岸和田市 原 さよ子

八尾市 宮崎 シマ子

八尾市 鷺見 章

姫路市 人見 翠記

箕面市 坪田紅葉

内科外科眼科回った小半日

夏も過ぎ病院と仲よく秋がくる

一人でも味方があって母達者

だんだんと親に似て来た孫の顔

ショーよりも見ている人のニューモード

尼崎市 春城年代

日日好日 気分屋さんと揺れている

赤とんぼやっぱり竿の先が好き

美しいばら一輪は人身御供

老いらくの恋を決してバカにせず

死ぬるまで仲良くしよう一病と

尼崎市 奥山美智子

十二月うっかり深爪してしまふ

言い慣れた科白をひとつ温める

大ショット振って心をまぎらわす

筋書になかったところが引かかる

逆転を狙い続けて老いてくる

松江市 柳楽鶴丸

ここはどここの細道造幣局の通り抜け

最高の仲よしは自然です

恋が完全燃焼したら 死

胃袋が無いからストレスたまらない

味方でも敵でもこわい婦人パワ―

東大阪市

森下愛論

父の日だけがモテモテ親爺なる

ボケ防止孫のお守りをさせられる

蝶の羽根動きも秋の彩であり

酒の席貧乏ゆすりはやめなはれ

〇 言い訳になるから黙って隅で飲み

大和高田市 岸本豊平次

何故なぜの孫と明日香の謎の石

八等身の足がぐいぐい押すラッシュ

電車ではすぐ眠れるに振子の音

スーパ―とデパートやっぱり着て判る

電車賃と思って電話長くなり

宝塚市 丸山よし津

現場百遍汚れた靴は休まない

無器用でその日暮しをしています

老化ですと言われ納得して帰る

目立つのが嫌いで靡くすすきの穂

終章になってからくり見えて来る

高知県 赤川菊野

煮こごりをひとりですべてひとりごと

〇 例えばの姑の話が胃にたまる

計算になかった寡婦の名をもらう

去る者は追わぬ主義だがある未練

竹原市 岩本笑子

野菊よ野菊いつまで待っているつもり

コスモスのさきやき涙する咄

どんぐりを転がせている一人の遊び

他人には遊びと見える皿まわし
秋から冬へ旅する心を大切に

竹原市 森井 菁居

休むまい又古傷が痛むから
酔い痴れて唄う昔の歌唄う
四面楚歌鳥になりたい童唄
振出しに戻る気は無い男坂
風をかきわけて行く子を唯信ず

大阪市 江城 修史

それぞれの秋へ父母の忌恩師の忌
賢不全私に義理がありあまり
かりそめの絆よ君はちぎれ雲
すさぶ世に温い詩もつ友がいる
楯となる妻には向い風ばかり

大阪市 河井 庸佑

他人の気を汲めぬ上司に悩まされ
守備範囲だけはしっかり守る人
世話好きに余計なことと陰の声
隠そうとするから余計探られる
お互いに模索している妥協案

大阪市 吐田 公一

野次馬が指図している事故現場
くじ付へ少し無駄買う市場籠
母からの無理を承知の金届く
切札に昔の浮気とっておく
生き抜いて今日を喜ぶ母子家庭

大阪府 本間 満津子
松茸ごはん幸せなんだうちの秋
やさしさは応えてくれる鉢の花

今日しか無い今日秋の日が短かすぎ
秋刀魚がうまい足ることを知る幸せか
今にして思えばよくぞ生きて来た

大阪府 神夏磯 典子

萩すすき夏の疲れが癒えてゆく
ホールインワン男の野望ふくらます
毒きのこ精いっぱいのおしゃれして
比べない私はわたしを可愛がる
柿一つ主の帰りを待っている

大阪府 黒田 真砂

仕舞い忘れた風鈴ひそと鳴る夜長
子が三人それぞれ違う親思い
愛憎の果て占いにこっている
茶房のガラスすかして未知の夢を追う
あきらめた服に出逢った南の灯

大阪府 藤田 頂留子

近鉄優勝野球ぎらいもうれしそう
出るわ出るわパチンコ疑惑フィーバーして
イベントが重なり体が二つほし
土曜日のバイク我がもの顔な音
もろもろのうずまく師走さわがしや

初体験消しゴム一つ持って行く
大阪府 井上 白峰

重箱の隅で妥協を考える

理想論掲げて下積み抜け出せず

色と欲栄光の座のすべり台

弛んでたネジ締め直すコップ酒

大阪市 中西 兼治郎

ベル押してから押売りは鬼になり

逢いびきが逢いびきみてる戎橋

父も子も阪神負けた夜は無口

かあさんの歯を考えて買う土産

ひまでよいものは警察 消防署

大阪市 板東 倫子

長いすね抱いて若者何思う

地価高騰他人の分も計算し

松茸が夕餉の話題弾ませる

鍵あけて猿が家出をしたニュース

効果抜群お若いですねという言葉

羽曳野市 榎本 吐来

イヤリング清楚だけではない初老

仲良くなったらそれで終いという夫婦

男気が瘦せて佇む台所

まだ下があるさとコップ酒強気

初孫を持つ飽食の喉仏

羽曳野市 田中 隆二

思い出を束ねて登る老いの坂

本棚に置けない本を読んでいる

泥の舟沈む童話を読みかえす

盛りみかん母の温もり置いてある

オツチャンと呼ばれて嬉しい二度の職

羽曳野市 吉川 寿美

あいこでホイ勝ち負けはなし秋の天

あざやかなジョークで曼珠沙華炎える

勢揃いすれば目刺も自己主張

正座しか出来ない父の怒り肩

聞き流すことにも馴れた座りだこ

奈良県 長谷川 春蘭

どこまでも続くこの道秋桜

サルビヤの余炎十月空焦がす

赤信号銀杏落葉が飛んで来る

道連れを誰にしようか秋の天

赤とんぼ二人暮しに恙なし

奈良県 田中 紀美代

筆不精今日は小説ほども書き

強がりを言うた旦那がもう帰り

強がりを言うにも女鏡見る

どの本もどこかに私が出てきます

姑さんのゆとり秋草活けている

玉野市 小谷 仙山

万歩計私の馬鹿について来る

行くにしろ戻るにしても金がいる

彼岸花田舎は遠くなりました

真実を丸出しにして敵つくり

なりゆきはどうかあれ柿は秋の色

町田市 竹内紫鏑

推敲の世でなし思い切りを讀え

挑戦を呼びかけ只で働かせ

児はファミコンじじワープロに奇声出す

いつ仕上がるかワープロに訊いてくれ

握手また握手自肅も過ぎた秋

出雲市 吉岡きみえ

どんぐりに誤算があつた水たまり

コマいっぱいつめてひょうたんぶらさがり

孫の来ぬ日暮れだんまり老夫婦

止り木でお金儲けをきいてくる

うそつきの舌抜くこわいマドンナよ

呉市 槇田英詩

私を育てて父母よ誤算はないですか

マイワイフ蓄のころも良かったね

ご用心夫を駄目にする言葉

肩の荷をおろしに孫が生れたり

爪まるく剪り愛妻も老いている

倉吉市 野中御前

でたらめな酒を肝臓怒りだし

ふるさとへ惚気と愚痴をおいてくる

頑固だが波長合わせてくれる姑

混浴は峠を越えた人ばかり

目に触れるところにはいない青い鳥

岡山県 小林妻子

遅咲きの花の演技と親娘の眼

また妻に相談をした処生術
フルムーン財布は妻に預けとく

どう見ても夫婦に見えぬフルムーン

お言葉に甘えて楽な仕事口

熊本市 永田俊子

何でも知っているこけしの伏し目

ティッシュペーパーを若い男が配ってる

連綿と続く雨夜の品定め

ちよっぴりと菩薩のエロス志功展

一合の米のとき水大切に

富山市 舟渡杏花

おしゃべりな玩具だ故障ばかりする

友達の机だんだん光り出す

ドラマ果てひたすら自愛のネギ刻む

あれ以来ヒゲにこだわる森番で

鎮守の森老いたカラスのひとり言

有田市 松井かなめ

肩パット小山のような女 気は小心

押入れ掃除柳行李を又しまい

母子家庭と思われる程夫留守

夫のハート ファイバースコープで見たい日も

子も漁師住家も海に向いて建つ

東大阪市 崎山美子

家庭優先 出世に遠い席にいる

無理などと言っておれない小商い

ストーリーどおりトカゲの尻尾切る

雑兵にも世論調査の声かかる
子供部屋静かすぎても気にかかり

鳥取市

両川洋々

回れ右するこの道に鬼が待つ

愛という真綿がじわり首を締め

神様も浮気のスリル好きらしい

癌かくす嘘なら神も許すだろ

罪ひとつ許した風があたたかい

守口市

野呂右近

秘訣など無いが八十過ぎました

妻や子の手の鳴る方へ向ける足

お土産の煎餅入れ歯で賞味する

死に度くは無し百歳は望まねど

句会での余熱大切にして眠る

藤井寺市

福元みのる

早々と来る返信は欠ばかり

無料バス貰う頃には足立たず

にこにこしたら惚けたと勘繰られ

飲み放題とあるが只と書いてない

自分より勝れる友を持つ励み

倉敷市

田辺灸六

幸せの味を雪月花がくれ

あきらめがついた余生の夫婦旅

挨拶と笑顔で町内道掃除

恩を忘れるようでは人間やめなれ

閻魔さん嘘は聞かない眼で睨む

脇役を自認している紅生姜

つつがなく暮れて明日へ竹を踏む

結局は仏間でこぼす一人言

色褪せた手垢の辞書は亡父ゆずり

つつましい生活に温い年金日

茨木市

堀

良江

困ったなママのお鼻に似てきた娘

運動会日和と近所静かです

グルメツアー仕上げは家のおつけもの

菊を着て人形たちの息づかい

長い睫毛がじつと考え込んでいる

仙台市

川

村

映

輝

甘え甘やかされて痴呆に一直線

体調がよさそう老妻のはずむ声

パチンコで隣り合せた委員長

国会質疑国民不在の問答きく

神戸市

山

口

美

穂

豊かさの中で不安なマグマ抱く

自己主張呑み込み腹の虫となる

戦中戦後の苦労話は横むかれ

有り難いと言うたそのあと愚痴が出る

寝屋川市

稲

葉

冬

葉

年甲斐もない愛とへのへのものへ

十本の指をならして片思い

軽口を叩いて赤いジンベ着る

姫路市

中

塚

遊

峰

聞こえない振りするようになった大

出雲市

板垣夢酔

食堂で会えばテールブル値踏みされ
泣いた日を忘れないコンバクト
あきらめた頃に妻子の御赦免船

もう夫はエクボを誉めてくれません

出雲市

園山多賀子

決断は早くつけよう紙コップ

花茗荷忘れ上手になつて老い
落し蓋乾く暇ないそんな位置
運鈍根みんな卒業してしもた

出雲市

石倉芙佐子

さんざめく花には花の思いやり

好きな帯結んで逢うた夢まくら

あいまいに話を逸らすうろこ雲

白い皿こよなく素直でつつましく

出雲市

久谷まこと

思い出が今日のときめきかき立てる

歳月は人待たずして人送る

背のびして野心の炎かきたてる

今日限り縁切りしても明日は明日

出雲市

竹治ちかし

ああ無情予定を流す秋の雨

陽を浴びた布団がくれる夢かし

アイ・アム・ア・ボーイのままで老いてくる

阿弥陀仏やっぱり母の顔に似る

大阪市 北勝美

枝切つて妻と和解の物干し場
病妻が気になり早退する句会
一週間散髪延ばす消費税

○ 大津絵に心も和む鶴喜そば

大阪市 大野武太

事なきを希う日々なり十二月

老友の病気遣う十二月

私の立場はいつも浮動票

捨てるのは自由権利は君にある

大阪市 坂本仙吉郎

旅先で思わぬ人と長話

橋架かり喜ぶ島と泣く島と

海賊の根拠地豪華なホテル建ち

デベロッパ―無人の島を買い漁り

岸和田市 古野ひで

弁解をしない男を信じよう

大金に縁ない財布に鈴をつけ

美しく老いたい木綿の糠袋

○ 黒茶色靴を並べてひとり住む

岸和田市 清野こう

娘の着付け手伝っている母の幸

年一度帰郷地車祭の日

小さい手で手伝っているおじやま虫

風に身をまかせてコスモスつつがなし

岸和田市 芳地狸村

○神様へ誓ってばかりの鈴を振る

毎朝を仏の心で写経する

悪役も素顔になれば好々爺

アリバイの辻褃合わす時刻表

姫路市 大原葉香

赤トンボ飛べばきれいな秋模様

○ボケは嫌ねたきりも嫌死ぬもいや

かくれんぼいつかは鬼の番が来る

端歩つく位の将棋なら出来る

姫路市 丁坪サワ子

義理人情へ溺れぬ処世習う日々

○内科歯科眼科整形のスケジュール

月詣り亡姑の足跡拾う寺

友の旅立ち報らせに来たか明鵲

和歌山県 天満三千代

踏みつぶされた靴のかかどが嗤ってる

写真機へシャーンと竝んだまんじゅしやげ

出不精を出る気にさせた孫の声

長寿国八十歳の歩は確か

和歌山県 細川稚代

○カラオケでポツネンとして迷い箸

ばあちゃんがワープロを打つ置手紙

四分の停車時間の再会だ

和歌山県 福井桂香

水を吸う土の溜息聞いてやり

シンバルを強く叩くは妻の役

やさしさが時折り傷をつけにくる

○哀しみの極限で聞くピアノソロ

和歌山県 山川克子

母の膝福ちゃん猫の三代目

思想なきオトコのチューインガムの音

複雑も単純作業もイヤという

友達の友達だから大切に

和歌山県 青枝鉄治

グチの聞き役にまわった一円貨

昇進はあきらめ休暇フルにとり

○声援へ笑顔で走る一周差

仏滅という神さまの公休日

静岡県 渥美弧秀

年金の暮しの梓へ慶弔費

孫台風去って無口な老いふたり

散歩まで小走りとなる十二月

三つ二つ義理を残して十二月

静岡県 永倉僕川

汗が好き健康体は宝もの

寂しさを拾ってくれる友が居る

君が代と国旗を上げて世界新

ワープロに教えられてる新漢字

静岡県 蘭田漠杏

火遊びの好きな女の独りごと

通学に夜光ジャケツト着る時代
草紅葉ボツンと墓が朽ちてゆく
プライドをさらりと捨ててスニーカー

岡山県 萩野 鮫虎狼

婦唱夫随世間静かに流れゆく
いい部屋は女房にとられ娘にとられ
満点の演技で左遷の辞令受け
頼りない息子惚れ込む嫁が来る

岡山県 岩道 博友

余生まだ石段登る背を延ばし
親戚と知恵比べする七五三
金魚の餌入れてやるにも消費税
中流のワイン飲ませて口説く気か

岡山市 花田 たけ志

人生の岬で近い水平線
すねているのにさりげない無関心
東京を叩けば地方の地価が跳ね
まな板で息は未だある消費税

岡山県 池田 半仙

陽盛りの陽射しを凌ぐ風は秋
生涯を川柳捏ねて終る僕
次々と一等田地減る怖さ
素振りするバットの孫の頼母しさ

岡山県 山本 玉恵

火をつけて来て美しい顔で居る
左遷地で好きになりそうな女に遭う

意地一つ通せば女でない女
男と女の掟に背くと月が哭く

島根県 松本文子

雨降って今日のシナリオ書きなおす
長雨に萩うなだれてうなだれて
イエスとは言っていないせんギリリス
応援団もコーチも居ない我が土俵

島根県 松本 はるみ

草笛を吹いて聞かそう秋の天
謝ってすむことでないお月様
血圧の上り下りに死ぬ気なし
生まじめにビックリ箱の蓋をとる

米子市 川上 より子

自分で歩く卒寿の父に逆えぬ
紫式部色づき亡母の風になる
屋根に化けタイルに化ける退職金
かぐや姫の続編として里帰り

米子市 金山 夕子

稲刈りの弁当入れるルイ・ヴィトン
旅がえり鉢にたつぷり水をやる
心の窓にキレイな言葉貼っておく
迷惑と知りつつ姑に八つ当り

鳥取県 羽津川 公乃

正直で頭を下げる癖がある
手に余る投薬タダでございます
大根とわたし相性いいらしい

無責任でも隣のことは褒めそやす

鳥取県 さえき や え

あゝ無冠自由な秋をポケットに

かかしくん君とおんなじ無冠だよ

自由になつてホウレンソウをまいてみる

百の芸おぼえ百姓はじめます

守口市 羽 原 静 歩

貸しそつで貸してくれない貸付課

神様もくしゃみしているお賽銭

百八の煩惱私はいくつある

幸せな雪だと思ふ除夜の鐘

今治市 越 智 一 水

和服着て喋るとテンボが遅くなり

膝枕男ごろをのぞかせる

運動会親子きれいな汗をかき

山頭火 酒飲むように水をほめ

羽曳野市 佐 野 白 水

古い二人マンマンデーで今日も暮れ

老いの指ワープロ笑つて動かない

パチンコの球に党首こけて怪我

鐘乳洞出た目に御岳山はるか

神戸市 仲 どんたく

ご無沙汰を思い出させる虫の声

閑日月あつてほつてる臍のゴマ

雑兵を集めて大河とする企画

クラス会余命あつめて子にかえり

人間ドック口の達者な人と遇い

おでん屋の内証話はすぐ忘れ

不可能を可能にしてる金のかき

すき焼の残りが好きな貧乏性

弘前市 真喜内 實

馬上から稲刈る心地コンバイン

今日よりも良い明日見せる茜空

噛むほどにほんとの味を出す牛乳

しゃべらずにこにこしてる祖母の役

十和田市 斉 藤 蒔

偏差値の話はよそう笛太鼓

黒い土ついてる手なら握手する

時効です言える話をコーヒィで

歩いてる幸せ車椅子の道

黒石市 相 馬 一 花

黒梓に入つてやつと人の顔

一匹の蠅が止まった一茶の句

馬の脚 家では妻に腰もませ

湯上りの快感に酔うバスタオル

大東市 土 岐 トク子

どうしたか元気ないぞと遺影の目

親が言う事は然りと娘婿

紫の野菊貰つてピアノ映え

コスモスの赤白ピンクとゆれている

唐津市 浜本 ちよ

お人好し自分の尺で他人測る

佳人のごと生けし白萩楚々と咲く

目覚しも要らぬ二人の余生かな

あめんぼの奴に短足嗤われる

豊中市 上田 登志実

人の世がどう変ろうと雪月花

落ちる滝揚げば天の青深し

秋深し焼芋の値は五百円

娘としての最後の夜を母と寝る

加賀市 細呂木 魯木

巢籠りと洒落て謹慎臆に傷

小出しする心のメモにあるうつぶん

わん白に似た羅漢像に親子連れ

マスコミの世論作りが苦々し

唐津市 山口 高明

パテレンの昔も今も十字切る

十階の方と知り合う水飢饉

財政へ貢献してます酒乱です

有線の呼出し野良に風疾る

松山市 谷 信夫

都合よくは忘れられない胸の中

うまいうどんを食べたい今の欲

こけたこと嫁にも息子にも言わず

酢大豆で百まで生きてみようかな

寝屋川市 平松 かすみ

初孫が生まれて来るに消費税

垣とれば嫁も姑も女性です

ストップのカードを持つている詐欺師

わたくしが自分に気付く試着室

竹原市 信本 博子

あなたにはこんなにもろい胸の鍵

トータムボールだけが見ていた初キッス

ひたすら祈りにマリア無表情

ママの手を払う小さな自己主張

河内長野市 井上 喜醉

まだ生きる覚悟ができて手術台

週一のカレーは妻の胸算用

気短かで下手な世渡りしかできず

一念を貫く蟻の道遠く

八尾市 山下 美津留

パチンコよお前も汚職していたか

妻の尻ヨチヨチ歩くビール腹

織物に女工哀史の深いしみ

働いた虫ゆうゆうと穴へ行く

高槻市 竹内 花代子

明日の晴約束します茜雲

タレントの休憩多いコマーション

外食へときどき連れ出す老母の足

断りの電話へ私も風邪ですの

福岡県 横地 正好

正しいと思うが肩肘張らずに和

手離したその日に増資の値が上り
辛酸の成果を学ばれ真似られる
求人の中に都会の嘘を秘め

堺市 柿花 紀美女

残照の坂で許し合う夫婦
切札の一つもなく落葉燃す
橋かかり島の情が薄くなる
ツインビルまだ眠そうな霧の中

羽咋市 三宅 ろ亭

一つの嘘その嘘またその嘘を呼ぶ
この川の治水にかけた老区長
人間の丸さへ老化かと思われ
時雨空 能登の魚がうまくなる

吹田市 茂見 よ志子

末席で気楽に笑うのは仮面
よろこびの風は友達つれてくる
梅干もグルメでカツオにまぶされる
お互いに年齢さぐる初対面

西宮市 瀬尾 六郎太

花の博キヤラバンギャルや黒と赤
知恵者が鯖街道をひた走り
茶の道の心得なきも京の町
ついてないそんな日もある夫言う

富田林市 片岡 智恵子

○絵日記の中で育った蛙の子

許されてこころは重い喉仏
新空港噂話をする魚
三人の文珠の知恵に惑わされ

境港市 細木 歳栄

花束が届いた日からの想い
筋書を変えねばならぬ還暦や
この牛の優しい眸に安らぎぬ
雨しとどくらまの里の人想う

海口市 三宅 保州

美しい約束だから守れない
速達と書いて三日も持っている
縁談がまとまりはしやぎ過ぎる妻
好きという言葉しかないもどかしさ

広島県 藤解 静風

ひとり者みために妻が旅に出る
一応は辞退しておく腹づもり
正直に平均寿命では死ぬぬ
松緑に手塚治虫にひばりの死

河内長野市 植村 喜代

次々と疲れ出る娘の秋こぐち
身内とは思えぬ嘘が影を這う
一年の早さ喜んだり哀しんだり
秋の夜の二階の咳に眠られず

箕面市 椎江 清芳

くじ運は弱いが僕を引いた妻

島の幸皿で動いた蛸の足

謝りに行くのに走ることもない

王様に髭が無いので笑われる

鳥取県

清水一保

人間より先に地球が病んでいる

台風は政治の穴を見て貰い

◎お医者様明治の部品頼みます

岡山県

直原七面山

世辞言えぬ夫を妻は気にして居

灯を消して月を眺める暇が出来

誤解が解けて夫婦仲良く湯につかり

倉吉市

渡辺菩句

田舎っぺいの代表はいなかつぺいさん

涼風と監督10時には来る

ちよっと待ってもらって草の花を摘む

和泉市

西岡洛醉

流れ雲明日の予告に類染める

各停に眠りこけてる仮面なり

心音のまだ確かなり夕暮れる

大阪市

坂口公子

芒穂がのびゆく里の行き帰り

百舌鳥鳴いて深い深い秋にする

目をつむり雑品捨て年輪となる

七尾市

松高秀峰

紅を濃くぬって女の貌になり

病んで知る天国ゆきの遠い道
嫌だとは言えない話へ保証印

岡山県

井上柳五郎

ワープロへ八十路の友が挑戦す

たばこやめ灰皿そこへ置くなどは

ノモンハン戦友と結ばる五十年

倉吉市

淡路ゆり子

叱られた記憶がもどる蔵の中

割るための皿も余分に買って置く

景気いい手締をよそに茶漬食う

鳥取県

谷口次男

◎秘書に見えそうにも見えぬ女秘書

等外も同じ商品体育の日

友だちの友だちわたし他人です

岡山県

松本元江

ヘッドホン噂話を遠ざける

ほんとうのことが言えない四面楚歌

むらさきの好きな私の花ぐるま

鳥取県

乾喜与志

十人の家族で居てた二人きり

七目を置いても囲碁の醍醐味よ

芋を煮た囲炉裏を偲ぶ初寒波

大阪市

宮下とし

貰い手も捨てる勇気もない和服

来世も一緒などとは迷惑な

食卓に孫 先生のくせばかり

和歌山市

田中輝子

奈良県

中原比呂志

洗濯が好きで女をしています

助手席で愛を問うてもいいですか

お喋りの女が握る導火線

豊中市

辻川慶子

木枯しへ嬉しい便り着きました

萩の花 今を静かに生きており

そして冬 他人のような風が吹く

奈良市

米田恭昌

群れの中イルカにもいた落ちこぼれ

無駄な事をとへアーブラシの一人言

親馬鹿は娘の出た美人コンテスト

大阪市

富岡温子

さりげなく庇ってくれる夫がいる

見た目には料理の本に似たお膳

再利用出来る積りの粗大ゴミ

岡山県

矢内寿恵子

燃えつきて思い残しを舞う枯葉

終着が見えるだあれも追うてこず

春夏秋冬回り舞台はもう冬に

岡山県

千原理瑛

妥協ぐせ時には卑怯とも思う

かくれんぼ鬼が薄目を開けている

恐山 仏の使者か烏たち

ちっばけな嘘がつけない親ゆずり

絹糸でないが生存権の網を張り

青信号プロは危険と心得る

大阪市

塩田新一郎

動く歩道俺は一步も動かんぞ

そのうちに亡命しろよ日本人

宝籤神に仏に御先祖に

高知市

北川竹萌

老寿会和氣藹藹の美作湯

昼餉箸はこぶ与島の青芝生

毎日が日曜これをどう生かす

和歌山市

玉井豊太

起きてくる順にお早うございます

足早に行き交う蟻に冬がくる

本当の嘘で許しはまだ下りぬ

鳥取市

小谷美千秋

妥協ぐせついた自分をもてあます

竹藪の情報ならばうけたまわる

自画像に涙もろさを見た焦り

米子市

小村てい子

アンバランスの眉描きなおす初対面

風が出て旅の枕を裏返す

身勝手はお互いさまで今日終る

鳥取県

津村 八重子

袖引っぱってくれる温うい友が居る
反発は雑魚の歯ざしりかも知れぬ
顔のきく人にぞろぞろついて行く

出雲市

小白金 房子

嫁がせて苦勞知らずの娘を案じ
正面も横顔も好き野の仏
山門をくぐれば心の鬼にげる

静岡市

安本 晃 授

辻棲を合わすと過去が回りだす
冷や水に命さらして許し合う
檜山へ行く日は妻と手をつなぐ

守口市

結城 君子

静けさや秋雨とまがう谷の水
長びけば地方色も出る喧嘩
ポークチャップたべて兎の死をいたみ

広島県

田村 新 造

お茶の葉を探しあぐねた妻の留守
湾岸を飛ばして夕日追いかける
諦めた出世お流れなどいらぬ

吹田市

園田 文 子

桜貝波をまくらに母と逢う
水琴窟ドラマを語る水の音
ストレスにこぼれ話がついて来る

大阪市

渡部 さと美

菊の香に染まった体もち帰り
オクターブ上がると孫の一等賞
今日も無事に終り大きな月昇る

島根県

藤原 鈴 江

こんな時すがり付きたい風の彩
しとしとと降る雨なればまた寝よう
コツコツと石橋叩いた余生です

大阪市

神保 拓 生

こんな時笑顔でいるは悪い癖
悪口の輪に入れられた市場籠
大空をカンバスにする遠花火

守口市

森川 まさお

地酒酌む山ふところの城下町
折角の峠に自動車道ができ
ぬいぐるみ抱いて速達出しに行き

寝屋川市

堀江 光 子

来てみれば変らぬものは波の音
美しい昔を語る糸切り歯
美しい故に切られたバラの花

貝塚市

行天 千 代

畦道に一列縦隊彼岸花
お彼岸になつかしい人と墓地で会い
就職が決って親子おちつける

吹田市

栗谷 春 子

気まぐれに波紋を落とす秋の雨

キウイ添えてサラダの景色出来上がり
秋日和セツトだけでもして待とう

大阪市 北山悟郎

軍歴の鎗が義足に付きまとい

晩成の占いやたらに死ねもせず

子は宝 子に殺される人もいる

豊中市 一瀬福一

候補者が停らぬ駅で一人降り

なるようになるさと母の底力

栄転の春とは言えど孝ならず

川西市 松本ただし

銘木であると枝葉は自慢せず

ストレスと不摂生とのヤジロペー

ハードルが段々高くなる節目

出雲市 小玉満江

つき離す母は涙の思いやり

四捨五入一円玉の別れ道

素通りは出来ぬ赤ちゃん元氣かな

富田林市 新開千代女

押売りに居留守つかってくしゃみする

けたたまし もずの鳴き声猫あくび

単細胞ゆえに深くは考えぬ

東京都 吉川一郎

フライング重ねグツシュが鈍くなる

与野党は今三バーのあぶら汗

ともかくも今日のけじめを酒にする

和泉市 岡井やすお

チューリップは議員へ開くチンジャラと

まいないの来ない御仁の真白い手

大阪市 松尾柳右子

近所みな新築してのわだかまり

七人の敵は女のいかり肩

大阪市 町田達子

ちっぽけな秘密そんな写真もセピア色

ローカル線で祭囃子を聞くゆとり

大阪市 横山為子

歯には歯を啖呵を切った気味のよさ

横にただで頼れる肩の幅

大阪市 松永すすむ

この頃は恥という字の軽いこと

猫死んで口数増えた古女房

出雲市 河原恵美子

ありのままの自分だから滑稽だ

こだわって選んだもののこの結果

鳥取県 田村きみ子

高層ビルに住んで与作を恋しがり

皇居から菊のご紋の財布買う

豊中市 吉田あずき

モガモボで又生き直す老夫婦

大根の白さやさしい暮れの町

自選集

小林由多香

親戚が揃うとろくなことがない

金井文秋

肌ざわりほどに心は荒れていぬ
よろこびの涙勝手に出てこまる
ジंकスに負けぬ強壯剤を飲む
面接の冷たい椅子に浅く掛け
抜け道も作って城の石を積む

野村太茂津

自炊して味の文句は言えません
じわじわと進む老化の待ったなし
もぐら叩きのようにチャンスは出て来ない
手ごろも同情もない棒グラフ
私よりお若いのにと言う悔み

兎島与呂志

塔開眼 雲の峰指す俱会一処
丹念にぬかるみを出た足洗う
恵まれた思い出綴る年の暮
落ち葉焚く煙にむせる半生記
立直宣言開き直っている余生

河内天笑

道ひとつへだてて噂の人にされ
気まぐれな風と付き合う屋台の火
人さまの事が気になる終電車
悔いばかり背負うて生きている如し
十二月もいちど騙されそうになる

八木千代

真似されるようになったらほんまもん
どろどろと巧いはなしに堕ちていく
天職を持ってええ顔してなさる
諦めた筈が飲み屋でぶりかえし

枯野から母の茶碗を捜し出す
痛かったろうに落した皿拾う
箸茶碗どう転んでも落さない

意識して父の湯呑をひきたてる
風景になじんだお茶をさしあげる

本田恵二朗

聖職の愛のまなざしあたたかく
原点に返れ返れと独り言

有働芳仙

ステッキの艶を褒め合う散歩道
老夫婦の歩幅を嗤う万歩計

木刀の素振りであいを追い払い

阿萬萬的

神戸の画廊にて

酒蔵の壁の白さへ風匂う

風見鶏の館に風もうたとなる

干潮の運河に昔のうたがある

春の潮も眠そう小さな船が行く

荒壁の崩れへ過疎も冬仕度

工藤甲吉

百姓を殺して何がまつりごと

十二月一日先ずは腹を据え

歌の無い鳥なら生きた甲斐がなし

また一步棺へ近づくと暦はぐ

新聞の無い日時間をもて余し

小出智子

思い出があつて虫干しはかどらぬ

すぐに忘れることも私の芸のうち

それからは私のクシャミ治らない

したたかに今日も洗濯しています

体重は変わらず秋から冬に入る

マンションに住んで無口になり申し

奥様にこれは内緒と言われたり

耳打ちへ唾をゴクリと呑み込ませ

宝くじ高い買物しましたネ

もう年を考えなさいへ考える

野田素身郎

信号待ち会いたくもない人に会い

刈り取りを待ちわび稲穂頭たれ

お祭りの夜店序列があるらしい

カーディガン着たり脱いだり秋の風

秋の風障子の穴をふさがねば

正本水客

遠野巡り(岩手)

一本彫りの観音像日本一の影大(福泉寺)

見渡す限り庄家屋敷の土地なりし(千葉家)

カッパ調昔のままに詩情持つ

曲り家で馬のひずめの音を聞く

千体おしらすま民話の底にうずもれる

西田柳宏子

結論は噂で終った回り椅子

久家代仕男

美しく咲きたい蔓をからませる
齡やなと思ふ腰痛 背中痛

借財の嵩む補助金うけている

塾靴いまの世代はみな孤独

葛藤が続くわたしの不整脈

捨て猫に眠たい朝を起こされる
背をさする妻も手足にサロンパス

鈍臭いわたしの黴を秋に干す

月原宵明

○雁が去ぬ僕の思いを道づれに

山内静水

嘘が出る青くて高い空だから
泣きに來て思い直した鏡かけ

○日の丸もまばら平和だなと思ふ

正面に居る二番目に好きな人

ご指名にあずかり皆さんお静かに

髪染めてそれから人が騙しよい

何を言うても笑わぬのが一人

○統編は左遷の浜で釣糸を垂れ

突っ込んで問えば友情冷えそうで

藤井明朗

匂わない女になっても櫛をあて

黒川紫香

朝の挨拶元気な声に街は和す
健康の自慢も言えぬ薬のんでは

やわらかく豆が煮えたと隣から

お蔭で仕事も終る統計調査へ感謝

秋の朝隣の声が透き通る

財布も少しふくらみます十二月

島一つ抜けると霞む島がある

日本の経済大国へ世界から責める

しきたりを大事にしてる京の店

藤村メ女

○慶弔の時だけ出会う縁つづき

遠山可住

ふる里の森へ翔びたい竹とんぼ
上品な女の嘘についかかり

本丸を失いましたお月さま

栄枯盛衰昔を語る庭の石

産声へわが家も二十一世紀

生涯を語る老女の長い修羅

金持って死ねんと貧乏人笑う

この人も国を支えるビル掃除
余生などとてもとてもものに追われ

波多野五楽庵

妻よし子貴女の海のつつましき

医者目で見れば悲しい友の咳

契約書読めもしない字を並べ

二十九 三十 三十一 嗚呼と書きたい十二月

掟かな雨雪ばた雪つむじ雪

水粉千翁

畏友安達清路君を悼む

萩濡れて安達清路の声がする

遺影かすむ冷たき涙如何にせん

あのときをもう語らない君を追ひ

惜しむべしああ直情を愛すべし

忘れじの浄土へ祈ること多し

大矢十郎

国民の皆様という後ろ盾

政治屋を辞めては政治ブローカー

○キスを待つように受け取る袖の下

伸びかけた芽を税務署が来てつぐみ

病院に息を引き取る部屋があり

橘高薫風

羽衣を盗られたような風邪を引き

前後して逝く人のあり雲の峰
柿の色 大事なひとを大事にと
神妙にいたせ渋柿どもよ
勧進能これは夫婦で出かけよう

麻生路郎先生句碑 建立募金のご案内

かねてから麻生路郎先生の句碑が地元大阪に
ないことを、私たちとして寂しく思っていました
が、今回、「夕桜とんぼがへりがしてみたい」
の句碑を左記により建立することとなりました。
同人・誌友のみなさまのご支援をお願い申し上
げます。

一、建立地 大阪市阿倍野区北畠

阿倍野神社境内

一、募金 一口 二、〇〇〇円

一、完成 平成二年一月

★送金は、川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へ

〒581 八尾市中田二―三〇二

振替口座 大阪 8―133336八

川柳塔社

— 同人 吟

秀句鑑賞

— 前月号から

久家 代仕男

街角を曲り切れない竹の蛇

林 荒介

蛇行させてみたものの竹の模倣には限界がある。物真似には本質は掴みきれない。それは心が伴わないからである。示唆に富んだ句として私は鑑賞した。

なにごとにもなかったように秋の天

田中正坊

今さっきの騒ぎも嘘のようにあつげられんと澄みきった秋の天、そこには計り知れないすがすがしさがある。「秋の天」が句を引き締めている。

会釈するだけの絆を大切に

西出楓楽

たかが会釈と思われるむきもあろうが、顔見知りの会釈が後日、大きな役割を生むこともまれでない。自分の虫の居ることでぶつと横に目をそらすようでは人間失格、真の知己を得ることもおぼつかない。

川がある私の小さい頃がある

小島 蘭幸

山里には、今でも昔のままの小川が残されてる。メダカを追い、笹舟を流した懐かしい思いは生涯のもの。子煩悩で愛妻家の蘭幸さんの巧まざる句もさこそと頷ける。

その辺のことは男に分らない

谷垣 史好

おんなの心理は繊細微妙な面が多く、男性から見れば歴然と結論が出ていと思うことでも、おんなの立場ではそうゆかないことがしばしば。盲点を旨く突いた句。

ひとに道譲つてみちの広いこと

片上 明水

我が道を行く直行も結構だが、時と立場によつては譲る雅量も持たたいもの。たとえ譲つたとして道が消えないかぎり、洋々と続いている。道を塞ぐ愚はくり返したくないものだ。

アバアバと隣の孫に遊ばれる

福本 英子

アバアバをしてやると、隣の孫の手も英子さんの口元に伸びるほほえまさが目に浮かぶ。子供の純情ほど、人を見抜くに敏いものではなく、險阻な人には決してなつかない。英子さんのお人柄が偲ばれ、座五で句が生きた。

ライバルの肺活量は知っている

江原 とみお

私は若い頃、短距離の県代表として転戦した体験上、数少ない大会を捉えて予選の走法

を見て、ライバルの長所に学んだものだ。常時ライバルの二人や三人は持っていた。相手の力量を知らずして、向上も進歩もない。趣味の世界も同じこと、嫉み妬みのない良いライバルは一人でも多く持つことは大切である。枯れ葉にも散り際がありそれぞれに

桜井 千秀

疲れきって散る桐の葉、バラバラと儚く散る木の葉、枯れ尽くしてもなおしがつつき、風に未練を残して散る木の葉、それぞれ人生の一端を見る思いがする。人生における進退挙措の機と重ねて鑑賞した。

自家用で豆腐一丁買いに来る

山口 高明

戦前の僻地は豆腐屋に一里、酒屋に三里もまれでなかった当時を思えば、随分、便利な世の中に様変わりしたもの。一寸そこまで行くにも自家用車。たかが豆腐一丁くらいなら徒歩でも自転車でも足ると思うのだが。これも年寄りの愚痴かも知れない。ただし上五は不鮮明、マイカーとした方がすっきりする。

補聴器が悪い噂をきいてくる

山口 美穂

補聴器には話を選ぶ権利は持たぬ。うつかり飛びこんだ悪い噂にうんざり、遠耳のままなら知らずに済んだものぞ。

句評を割愛した秀句

つますいた石の言葉を抱いて生き

嘉数 兆代賀

川柳太平記 (139)

川柳の群像

安川久留美

東野 大八

「久良岐を葬れ 嘗て俳人沼波瓊音氏が

『川柳は気の強い馬鹿の作る文芸なり』と云へるは、中央九段の老人久良岐氏を指して痛罵せしものに非ずや。瓊音氏の語も川柳に対して侮辱言句なるも、久良岐氏が現在川柳家としての態度も世人の注目や如何？吾人は眞面目な人、常識ある人としての批評を与ふるに忍びず、寧ろ奇人として、速かに柳界より葬るべき者也。

彼や往年『五ヶ月』を発売して江戸趣味を謳歌せるも悉く自家広告也。作句に忠実を欠き、只青年時代よりの読書家として物識りなるに如かず、川柳に四書五経や論語の必要なし。近くは女優讚美に帝劇の提灯を持ちて律子々々の有様なり。川柳と女優は果して何の

関係を有するものぞ。

殊に川柳初学者にこの提灯を抱かしむる事切也。彼れにして寧ろ川柳学校を組織なしその入門を説くこそ遙かに人格ありと言ふべきなり。吾人は茲に川柳の改革を叫ぶもの也。來つて共に現代川柳の友とならんことを望む。(以上原文のまま)

右の一文は、大正11年4月25日発行(創刊号)『川柳学会公報・川べり』誌(B5判8頁)の巻頭文で、安川久流美主幹の書いたもの。

この本には「備忘帖 美生」という次のゴシップ欄が二頁にわたつて収録されている。

▽札幌の川柳大会に久流美の「熊の皮殺した話してすわり」という句を、剣花坊選で地位の光榮に浴して選者が書いた横物唐紙を貰

つたことがある。其句は、剣花坊独特の句で「有名な人を罵る二階借」というのである。

▽大阪の路郎とともに須磨のみの作庵を訪ねて一泊御厄介になった時、湯へ入つていた庵主の奥さんが、別荘裏で塵芥を燃しているのを火事と早合点して湯文字一枚で茶の間へ飛んできた。路郎君もバケツに水を汲むやらの作が頓狂な声を出して山出しの女中二人を叱るやら大狼狽を演じた。あの時、須磨で死んだ青明君の霊が嘲笑うがように浪の音がした。

このゴシップ欄には、二山、萬雄、孤山、笑字坊らのことが面白く書いてあるが省略。

この頃、六厘坊や路郎は、剣花坊の柳樽寺派に組して反久良岐の旗幟を明らかにしていたが、久留美もその有力な同志で反久良岐の旗手。右の「川べり」は創刊号だけで廃刊。

本名安川実。明治25年一月一日金沢市生れ。家業は代々質商で、跡取りの彼はしばらく古物商を営み、地元紙の記者になった。明治42年北国新聞の柳壇選者の窪田銀波樓に師事。初号みの坊、久流美。別号箕哉、蛙村。明治44年柳壇仲間と作った川柳六華会から機関誌「六華」を出し、大正8年北都川柳社を創設。「六華」を「礎(いしずこ)」と改題したが、

すぐ『百万石』と改めたのが同年4月。だが、その主幹をつとめたのが三号までで、同人永山香林坊、唐白露月坊らに同誌を明け渡した。この『百万石』は、大正15年9月まで六〇〇号を続刊し、石川柳壇の黄金期を築きあげていった。

「句とはある思想感情を、ある一定の型式で清算したものである」

これが久留美の、川柳に対する端的な定義であった。この持論にもとづき、「柳俳無差別」「戲号排斥」「課題吟廃止」を唱導した。

このため、大正期柳壇切つての論客として知られ、『百万石』をやめた年の六月句論集「かき松葉（井上剣花坊序）」を出している。

北海道では札幌で神尾三休らと交友し、北辺にも名を知られ、かつての盟友麻生路郎の『川柳雑誌』の不朽洞会友を三十年在籍。愛知県犬山市の戦後全国誌『すげ笠』社客員七年の間、『すげ笠』誌上に毎月、大家が選出したものを、更に選評し、同社ではそれを安川久留美著『現代川柳の鑑賞』（昭和28年刊）として出版している。

「久留美君とは随分ながい交友で、四十幾年になるか、ハッキリ覚えはない。私は金沢へ数回出かけたが、いつも喜んでつきつきり

でついでいてくれた。金沢へ行っても、大阪へ来てもよく飲んだものだ。いつも私に一步譲っていたので、弟分のつきあいだった。

君はよく酒の上で失敗したので、度々禁酒をしたが、その禁酒は長続きしなかった。

『川柳雑誌』へ禁酒広告を出してくれと度々原稿を送ってきたが、決して掲載しなかった。雑誌が出る頃には禁酒を破っているので、イヤな思いをさせないためだった。

飲み代がつきると私に短冊を十枚送ってくるといつてきた。そのころ、私の短冊を一枚五十銭が一円に売りつけ、それで飲んでいるとのことだった。久留美君と小松へも出かけた思い出は尽きない（『川柳雑誌』No.359・麻生路郎）

東京行の友人を見送った駅で、俺も旅をしてやろうとそのまま金沢から神戸までやってきた。大酒家で、粹人でとうとう家まで飲み潰したという噂が伝わったことがある。この人は入院生活をする、病室が住家であつたと根元紋太も書いている。

「久留美は、明治24年12月生れだが、戸籍面では25年1月1日となっているというようなことを話していた。大正5・6年ごろが彼の絶頂期で、各地からの有名川柳人を迎えて

華美な歓迎をしたものであった。しかし、西町から彦三へ移って道具屋をはじめたころは、家財のほとんどを川柳と酒のため使い果たしたといわれている。

その後、新聞記者として舞鶴へ単身転居して以来、彼は不幸の連続であった。金沢のある料亭の二階から落ちて左足の怪我、脳を患つての病院生活二年。それに長男の逝去という不運続きであった。それでも愚痴一つこぼさず、いつ訪ねても川柳に親しんで、私が訪ねるといつも「待っていた、待っていた、よく来てくれた」といいながら、例の松葉杖をついて近くの酒屋へ出かけていく。そのうれしげな後ろ姿を眺めて、私は人知れず涙を流したものであった。（『川柳雑誌』船本夢考悼文）

「死ぬるべく海まできたが月見草 久留美 久留美は生涯酒毒からのがれることができず、十五回におよぶ転居など、常住の漂泊者と言われ、厳冬の二月、金沢の繁華街香林坊の路上に泥酔して倒れ、不帰の人となった」

（『創』No.30・奥美瓜露）一九五七年（昭和32年）2月20日没。享年65。

すげ笠の紐道草はして居れず 久留美

風鈴の烈しき鳴りに秋が来る //

★次回は「藤島茶六」

柳籠裏三篇研究 (二丁、三丁)

的。②は捨ててよろし。

16 正月のけも無ひ時分ンよめの礼

佐藤 松がとれてからというより、正月気分の全くなくなつた二月とか三月になつて、家庭の主婦や嫁が年始回りをするのが当時の習俗であつた。松がとれてそこそこの女の年礼は、まず早い方で、遅いのは初夏にかかる者もあつたらしい。主題句はそれを詠んだもので、「嫁の年礼」の句は非常に多い。

初鰯山はとときす嫁の礼

拾一 16

松よりも桜に近き嫁の礼

二七 32

鈴木 賛。岡田 同。

17 隙な居酒屋つらりとちろりをかけ

佐藤 「ちろり」は徳利のこと。居酒屋では、流行る店も流行らぬ店も開店前に、土間の棚にずらりと徳利を掛けならべておくのが一般である。流行る店は、この棚の徳利が次々と消えてなくなるのに、流行らぬ店は、ずらりと並べたまま、かんばんまで動きが乏しい。主題句は、店は開けてあるのに、なお、徳利がかけ並べたままになっている情景を諷刺した句と思われる。

岩田 「ちろり」と「徳利」は、『松屋筆記』

15 旅の留守とんだ天窓にむすこ成り

佐藤 「とんだ天窓」が問題。①は本田髷、

②は廓でのリンチの髪切り。旅の留守とあるのは、頑固な親父が旅に出ていて留守の意であらう。廓内のリンチは、いわゆる審に対する恠氣的制裁であるから、親父の留守と因果関係は薄いように思われる。とすると、この息子、口うるさい親父の留守をいいことに、本田天窓にしてしまったのであらう。本田髷は、当時の通人の髪形であり、黒羽二重の羽織に、帯を幅広く、雪駄を鳴らしてと、洒落本に描かれる代表的風俗。赤にしの親父が見た

ら気が違ふかも知れない。

額にも新地の出来る一さかり 拾二 7

七久保 礎稿の①の場合であらう。親父の留守をよい事に粹がつてしたのかも。

本田 ーとんだ、にかけて。

青木 親父の旅の留守をこれ幸いと、ドラ息子の遊興三昧。

鈴木 礎稿の①が無難のように思うが、本田に結つたやつが髪切りのリンチにあつてゐる例句もあるから、②にとれぬこともない。小生も決めかねる句。

岡田 七久保氏が触れているように「とんだ」は「本田」に掛けてあるのだから、①が決定

に「酒器に知呂利あり……小器小杯などに盛る具にてそのちらちらと垂出るゆえの名也……徳利は口よりドクドクともドクリドクリとも出るゆえ止久利といふ。知呂利はた口よりチヨロチヨロと出るゆえの名也けり」と区別している。

青木「ちろり、爛徳利、銚子、徳利、何れも酒器ですが、各々別物。

鈴木「意は礎稿のとおりですが、なるほど「ちろり」は諸氏の言及でよくわかりました。

岡田「賛。

袂からちろりを出してたたかれ

安五義 4

酒飲みがよくやるやつ、ひそかにちよろまかし、それが露見。

二丁

18 塗簾簞客の羽織がある斗り

八木「遊女の部屋の情景と思う。派手な簞簞が置いてあるが、中には立派な着物なんかは何も入っていない。まともな物といえば、客の羽織くらいである。

七久保「一見、派手な商売だが、内情は借金

で火の車であらう。類吟に、

明店と書いて張りたい簞簞なり 拾七 18

空簞簞ありんすやうにぴんとしめ 六〇 29
絵に書いておいてもすんだ簞簞なり

西原「賛。古川柳のタンスは、たいてい女郎のからだんす。

二五 27

佐藤「礎稿賛。塗簞簞は、部屋持女郎の調度

の一つであり、一応、豪華なものとしたい。外見が立派なだけに、主題句の擲掬が生きてくるわけであらう。七久保さんが例句を示されており、兎に角、大した物が入っていないことは、遊び馴れた客なら皆承知していたことであらう。

見かけは光りかがやくがからっぽ

二六 26

鈴木「諸説に尽く。女郎のからだんす。

岡田「同。

19 かけごの有 飯鉢を船頭もち

八木「カケゴとは一つの箱を他の箱の縁にかけ、重ねて、その中にはまるように作った平たい箱である。船の中はせまいので、場所をとらぬように、飯を食い終わったら次々と重ねて、一つにまとまるような便利なしかけの

飯鉢を、さすがに船頭は持っているわいと言った素直な解釈ではどうでしょうか。

西原「かけご（掛子）には、「野心」なる意もあるが、元来は箱の中子でしようから、中に重ねることができる飯鉢を持っている船頭の生活の知恵に感心した句だと思えます。

佐藤「この船頭は渡し舟の船頭としたい。

首桶をあけて船頭めしをくい 一六 10

鈴木「船宿あたりの船頭でしよう。客が沖釣りなどに行く時、飯がつかめなくなため二重になった飯鉢のことと思う。また、佐藤さんの例句からすれば、船頭は常に自分用にも備えたものらしい。

岡田「『広辞苑』の「かけご」の項に、①或箱を他の箱の縁にかけ重ねて、中にはめるように作った箱。②本心を打ち明けて話さぬこと。とあり、①がそのままあてはまる。当時の弁当箱としてはニューアイデアだが、現代では珍しくない。つまり、オカズ入れが中にそなわっている弁当箱、ただし当時ですからもちろん木製。

喪中につき年末年始のご挨拶
ご遠慮させていただきます

里小路

水煙抄

黒川紫香選

熊本県 大川 幸子

難しい言葉で煙に巻かれる
人走るだからわたしも走らねば
お隣へ行ってあまえている小猫
そして朝ここに居るのがふにおちぬ
セールスに來た娘あまりに可憐すぎ

八尾市 高杉 千歩

万歩計に煽られ記録更新中
うさぎ小屋に同居人とふたり住む
煩惱がきれず抱いてる花の種
平成元年勇み足で突っ走る
トリックにかかる神様好きになる

浜田市 中尾 まゆみ

振り出しでゆとりを持って背伸びする
先生の言葉と疾る道がある
透明なガラスが海を呼んでいる
ゆるやかに余韻ただよう日記帳

言い訳を君に許して待つ答

名古屋市 藤井 高子

揺れうごく心句帳へたそがれる
風花のかすむ彼方に祖母の唄
とある迷路で散った少女のスニーカー
あれはパチンコ屋で垢を落して來た顔だ
天と地のはざままで拗ねてみせたとして

熊本市 宇野 昭代

夕食へ一人欠けても物足りぬ
悠々自適という寂しさにやっと慣れ
嬉々として婚家に帰る娘に妬ける
歩くだけの二人へ月がきれい過ぎ
小雨ぐらいて傘など持たぬランドセル

広島市 流 奈美子

木の葉いま枝に訣れを告げて秋
ひとりぼっちの風鈴が哭く秋の夜
夜が更けて貝が泣いてる桶の中

ためになる話やたらと欠伸出る
野に佇って一兎追えないまま昏れる

今治市

野村京子

深いめの帽子で抜ける恋の街
泣きに來た海が他人の顔をする
切り札がなくて善人寝るとする
失恋の娘三度はちゃんと食べ
そして秋逝く日と思うこぼれ萩

富田林市

池森子

やわらかい夢はふもとに置いてある
あくまでも他人として逢うロビー
呪縛から解かれて女 風になる
山裾に噂話が舞い落ちる
先が読めたので中間点を打つ

静岡市

沢田きん

曼珠沙華秘密を抱いて燃えている
苦しさを優しく包む詩ごころ
優しさをちよつと和服が覗かせる
隅っこで風がささやく他人ごと
秋晴れへ明日の約束してしまふ

枚方市

中山おさむ

ふる里の土へ自分史くちずさむ
特権を手ばなしてから好々爺
妄想のとりこになって雨煙る
膝小僧抱いて軍歌を遠く聞く

この辺で折れてみようか缶ビール

米子市

新正子

幻を恋して染まる青リング
お隣の屋根が第九を歌い出す
ひよっこりとへそくりが出る十二月
プレゼント 聖夜に雪が降って來た
晦日にはそばとうどんとラーメンと

和歌山市

堀畑靖子

顔だけは自前と笑う借り衣装
曼珠沙華自制を失くすほどに燃え
美容院へやつと行く氣になった鬱
釣り自慢男無邪氣な顔をして
家出する時はアルバムだけ持とう

京都市

松川芳子

面倒は見ますと遠いところに住み
木犀の香りに氣付く秋の風
語尾にまだ残っていますわだかまり
敵意など無いがライバル同士です
結局は一人と悟る遍路道

西宮市

秋元てる

政治家の影がなければいい話
虫の声影絵のゆれる秋が好き
お百度を踏むのは何時も女達
願う事ないが野の花野の仏
譲られた座席へ顔を見合せる

尼崎市 森 安 夢之助

北風がとても厳しい二度の職
孫の夢守るちいさい貯金箱

夢に出た亡父は眼鏡をかけてない

腹立てているらし皿の破れる音

これからを楽しむ余生竹を踏む

大阪市 上 田 柳 影

風化せぬ傷が澄んでる空にある

湖に沈む村でひとりの粥を炊く

険から出るのは友情だけでない

荒れた手の妻を宝と思うてる

旅にいる時は明るい妻の顔

久留米市 鶴 久 百万両

白足袋も喜寿と思えぬ華やかさ

嵯峨野路の初冬を蝶の如く翔ぶ

相続放棄した賢兄を裏切れぬ

消去法俺に関係ない人事

巨大迷路に愛の踏み絵が捨ててある

尼崎市 山 田 保 蔵

ながながとメニュー睨んでカレー食う

中折帽山高帽も倉のすみ

公園に車椅子もいる秋日和

孫娘屋台で飲めるカネくれる

初孫に送る祝でもめている

伊丹市 山 崎 君 子

ファッションショー脱いだり着たりママの秋

ショーウインドー汗を流して冬飾り

湯の宿のまねき猫ではない子猫

紙人形小さな顔は無表情

手を拭いて出ればセールス立っている

和歌山市 森

財テクを聞いている席が冷えてくる

ゆらゆらと風にまかせた折鶴蘭

戦争を知らない子等と芋ようかん

喜んでくれる瞳が澄んでいる

出雲市 金 村 青 湖

離職する漁師が増える船溜り

ツルが来て刈田の道のカメラアイ

掌のもろさへ秋がしのび込む

秋祭り昔にもどる里言葉

熊本市 北 川 一 進

マスコミのマイク油断も隙もない

長生きをしただけ役が回って来

こんな事平気で言える同窓会

砂遊び孫のお守りも楽でなし

尼崎市 的 場 十四郎

意地張って本音が言えぬその怖さ

マンションの風に馴染めぬかぶと虫

見送りの道で本音をたしかめる

十年も若さもらった秋帽子

兵庫縣 奥野 テル

姿見に姑となる日の帯の位置
いつの日も開けば温い母の傘
ダイヤより女的笑顔美しい
目立たないように小出しの知恵袋

鳥取市 松本 伊都子

頂点に立つ夢だけは捨てず老い
涙壺いっぱいだから泣き止める
尻餅を突いてゆっくり空を見る
アルバイト少年の背に母があり

豊中市 小林 一夫

二死満塁ぼくは打順をはずされる
病室へ入る笑顔を整える
鳥籠の中で生れて死にました
一匹になった金魚のエサを買う

大阪府 川原 章久

心寄せて古老が語る祭笛
大阪をだんだん遠く曼珠沙華
砂かけた故郷こんなに暖いとは
雑兵の鎧が枯れる菊人形

兵庫縣 森脇 和子

名月へ歩幅が揃う帰り道
孫去んだあとの静けさ猫を抱く
頼られて火の輪くぐりの意地通す
手鏡の裏に染みてる生きる道

鳥取縣 山根 八重

長雨に淋しく散ったはぎ桔梗
着飾ってみればちよっぴり他人めき
花束に隠されています薔薇の刺
紅椿ころろ読まれる隙がある

鳥取縣 中村 幸代

涙と酒が演じる愛の物語
風の唄でんとう虫はそつと聞く
グム底になるのも知らぬ螢舞う
石榴のように口を割りたい秘書もいる

吹田市 井上 照子

イソップの嘘の話で子を論ず
手枕の甘い眠りを覚ますベル
病む母をさすると背骨つきささる
豊満な裸像を秋の雨洗う

摂津市 木下 道子

横顔をほめられてから首がこる
肚の中みせて茹で蟹買われゆく
菜を間引く最も腰を低くして
スカーフをふわりと結ぶのも余裕

藤井寺市 高田 美代子

駅長の欠伸見ていた終列車
どう化けてみてもすすきの穂の軽さ
花博の切符が二枚あるの다가
秋の天 妻が肥りませぬように

尼崎市 野瀬 昌子

岸和田市 三輪 通彦

自分では走っている気オバアチャン
物入れとなった金庫が座している

川柳の小径で温い亡父にあう

蕎麦の花ただひたすらに天を向く

熊本県 岩切 康子

見え過ぎた世辞から少し離れて居

つぎはぎの人生若さやり直す

父の背に錯覚しました交叉点

行つて来いそれまで居るとは有難し

東予市 小山 悠泉

幸せに近道はないマイペース

半分はあなたにあげる梨を剥く

だまし船蜜はたっぷり積んである

内弁慶と妻も認めている者り

尼崎市 鈴木 良征

半信半疑で手柄話を聞く鸚鵡

急いでもいそがなくても陽は落ちる

カラコ口と空缶ころけて秋深む

一杯飲むところころ変る主義主張

西宮市 松本 一郎

通学の子ら会釈して村の道

平凡な日々に不安とやすらぎと

銀婚を祝ってくれた無沙汰の子

よくもまあこれだけあった不用品

善人にされてストレス溜めている
汗出したゼニはやたらに使えない

無位無冠失うものの無い強み

無職でもせわしくなってくる師走

酒田市 永澤 裕子

旅の夜聖書を読めと置くベッド

俸せに呆け早めてる物忘れ

結局は仮病で休む二日酔い

行く果ては高野にしたい同人碑

岡山県 伏見 すみれ

毎朝が戦争ですと送り出し

相談をする長老がいる平和

旅の宿こんなにはずむ母をみた

入口も出口も同じ兎小屋

鳥取県 西浦 小鹿

夕暮れを友達にして歩こうか

もめごとを丸くおさめて十二月

ふるさとをうたうと老母が近くなる

今ここで死ねばこの愛完結か

尼崎市 尾宮 弘治

久方に老母の部屋で雑魚寝する

我儘を言い合う嫁と居る安堵

借景の山がゴルフに削られる

嫁ぐ娘の言葉が恐い程嬉し

尼崎市 木下義嗣

あきらめがついて男を送る朝
彼岸花川の岸にも咲き出した
ときめきを隠した同士の散歩道
旅立ちの我が子を送る無人駅

静岡市 柳沢たま

思いきりヒツパタイテも藪蚊逃げ
耳もとで怒鳴って祝う長寿の日
せみが消え せんだく物に赤トンボ
雨あがり洗濯機がうなり出し

和歌山市 田中みね

ああ夫婦パントマイムに縁が無い
二十五年添うて夫の影法師
財産はアットホームに友数多
甦る生命善意の血が流れ

寝屋川市 宮崎菜月

受験生親と摩擦の秋が来る
寒さより風に疲れる街の角
手も足も出ない売地を眺め住む
饒舌の谷間に寡黙配置され

吹田市 山本希久子

画廊から茶房へ余韻抱いてゆく
お隣が模範亭主で困ります
少しずつ足早になる十二月
帰省子の話題茶の間が若返り

枚方市 森本節子

ミニ栽培幸福の木一鉢買ってくる

雨の日も帽子は離せられぬ人
朝粥が飽食の胃を宥めてる
花に惹かれ言い値で買った黄の懸崖

尼崎市 明壁敏之

どの句にも河童顔出す泰西寺
小銭入れ膨らみ過ぎる消費税
院長が家族に何か話しとる
車座で祭り囃のけいこする

岐阜市 渡辺杏村

ジョギングも伊吹嵐に鈍る足
赤ちようちん自然に足が向いている
縁側で孫を相手の糸電話
信用を一度で落す電話口

貝塚市 池田寿美子

平凡に生きて感謝の鱗雲
語らいも暫し途絶えて萩の露（萩の寺で）
大和路は何時来ても好し雲流る
コスモスのやさしき風や旅の友

堺市 近藤豊子

人生の三年目から反抗期
譲ることおぼえて砂場広くなり
運動会果ててコスモスゆれている
就職が決まって終日寝ています

鳥取市 萩原美雪

仏様にすがりつきたい日もたまに

十七文字に本音をチラと覗かせる
甘ったれの末っ子ですと目を細め
妻で母で女の顔も持っている

唐津市 山口 ふさ子

少しずつ近所に馴染み夏終る
女です綺麗でいたいと化粧する
首一つ捻って人形艶を増し
名月も恥ずかしそうにベール被て

旭川市 朝倉 大柏

遮断機が降りて自分を取り戻し
負けてから負けた理由が腑に落ちる
句読点さてそれからが続かない
芽を出すと種を信じていた誤算

尼崎市 中澤 向西

神木が村の歴史を知っている
地下足袋が濡れてる秋のコップ酒
見送りの旗は今でも忘れない
恐ろしい話に子供寄ってくる

尼崎市 長浜 澄子

キャンパスに一筆早い秋の色
はまり役と喝采あびる芸の虫
出し抜いた記事へ世評が拍手する
明日の夢にスタミナ少し取っておく

尼崎市 吉永 伊三郎

せつかな男で女の裾を踏み
古疵を忘れたいのに秋がくる

素うどんを食べる言い訳なら聞いた
菩提寺に無縁仏が積んである

熊本県 高野 宵草

安くつく呑み屋教えに友が来る
寝不足を理髪の椅子で寝かせとかず
食べて寝て喋って食べる里帰り
ジェット機で梅干持って老母が来る

岡山県 後安 江山

バトンタッチする子のいない父の背
新米がとどいて今年も母達者
叱られて叱って母娘丸く生き
入歯して豆腐すっかり好きになり

兵庫県 東浦 砥代

言い切った後のレモンが歯にしみる
道ならぬ恋に重たい秋の帯
夢覚めてむなしさだけの飾り棚
喪があげて静かに見せる底力

京都市 渡辺 圭坊

息災で鯖すしうまい秋祭
消費税割勘手間どるレジの前
春来れば必ず咲くと椿の芽
企画して実行遅い年になり

島根県 加本 義良

花を選ぶ蝶の浮気や秋の風
人間に戻って仏の声を聞く
底辺の暮しに慣れた蕎麦の味

隣からさんまが匂う秋の風

寝屋川市

河合時広

カタカナのメニューに惑う老夫婦

包丁の要らぬ料理に馴らされる

ネクタイの結び方さえもう忘れ

陽も土も要らぬ野菜へ世が動く

米子市

足立由美子

子の住める空の予報も見えてしまう

すっきりと決めて今年の幕を引く

同じ話それでも友はいいものだ

寝屋川市

豊福路子

花と蝶奇縁の舞を舞わされる

二人三脚もつれたままでゴールイン

鬼が去ぬ夫とお祈りする間

徳島市

宮武まつ女

平熱になって人間とり戻す

余生なおんなの業の深さ知る

満点の予告真つ赤なバラが咲く

鳥取市

西村黙光

肩の凝る話にビップエレキバン

豊かさに馴れて満足出来ぬハト

左遷地で男を上げたアデランス

和歌山市

山口三千子

追い風に変ってからの日の速さ

筆不精になって郵便屋さん来ず

振り向いて自分の影をたしかめる

静岡市

久保きぬ

温室で四季の喜び忘れてる

悪口を言えば心につけが来る

年金が納得しない消費税

鳥取県

木下芙葉

窓越しに私の噂聞えてき

紀子さんの笑顔礼儀がしのばれる

よい話ゆっくり出来ぬ気ぜわしい

出雲市

岸桂子

坊さんに長生きしろと励まされ

きつと来る返事ポストに手を合す

起きて寝て一回転の反復よ

島根県

高野律子

逃げて行くものの魅力に取りつかれ

母老いて直ぐ感激に拭く涙

古里の土橋の穴が夢に出る

大田市

亀井円女

嫁さんに上げてと娘は分を知る

父さんに阿呆と言え年になり

冬の蚊は痛々しゅうて叩けない

尼崎市

佐野六浦

草も木も水が一番好きと言う

目も足も弱いが親爺口達者

芋粥を食ったと日記書いてある

京都市

小林英子

木犀の香に誘われた万歩計

松茸の吸物も出る山の寺
主張する碑一つ聚楽址

静岡市 小木久子

人情がからみ流れに乗り遅れ
悪口を言えば自分にかえつてき
飽食の雀案山子に笑いかけ

守口市 森川春子

さりげなく病状話す癌患者
病院で月見だんごの出た食事

鳥取県 西原艶子

患者さんのふるさと自慢に花が咲き
隠したいことがうっかり顔に出る
絵の具箱昔の夢を詰めたまま

鳥取県 菅田かつ子

胸焦がすスリルだんだん遠くなり
セールスがはいはいと逆らわず
コンピュータにこき使われるイスにいる

島根県 八塚三五島

棟上げの餅に義歯を取られかけ
落ちこぼれ隅に涙の人生譜
この枝を除くと野性美が死ぬる

愛媛県 太田藍子

遊園地スナップどれもパパいない
少な目に作り評判呼ぶお店
旅慣れた友のプランについていく

電柱へ家買いますのビラ貼られ

佐賀市 江口万亀子
宣誓してるわが子の姿ビデオ撮る
百年の風雪に耐え蔵の壁

時間外に怪我してしまいスママセン
鳥取県 乾隆風

お茶つぎに出る妹も別嬪や
私の荷馬車に酒は積んである
貧乏人も麦めし食えぬようになり

静岡市 増田扶美

宮参り児よりも母に手がかかる
振り向けば精一杯に生きた道
母の味思い出させる秋の風

青森県 富士トキ

足裏に秋を感じる彼岸花
蛇口からこぼれる水が闇を打つ
金木犀咲いて異境に住みなれる

鳥取県 伊吹富恵

三文判で上手に貯金しています
二階から隣の柿の色を愛で
コーヒードソットと沈める胸さわぎ

静岡市 西村千代

負けた日は悔いを残さず髪洗う
聞き上手話し上手な垣根越し
惜しみないざわめき幕がしまらない

米子市 小塩智加恵

点と線結ぶドラマをといている

窓際で働き蜂が休んでる

妻は旅さしみ天ぷらサラダ買う

鳥取県 太田 幸枝
住谷 石舟

赤字路線ですすぎがおいでおいでする

手のり文鳥老先生は休診日

酒のむとボーと出てゆく癖がある

伊丹市 小 熊 江 美

口喧嘩スタミナのある妻に負け

売り込みはせずとも馴染みの客で込む

吊橋が揺れ出してからは夫頼る

静岡市 宇佐美 寿 美

夕映えが葡萄棚から語りかけ

秋風がやさしい声で窓覗く

野菊咲き亡姉を送った風に会う

鳥取県 石 倉 美恵子

新人類家柄などにこだわらず

雑巾の乾かぬ妻でくつろげず

追伸のペンに本音を小さく盛る

青森県 荒 田 つ る

中座する訳はとなりへ耳打ちし

健康が取り柄いびきもはばかりず

われ鍋にとじ蓋夫婦で五十年

高槻市 芦 田 静 江

勘訝えて車座の老母頼られる

機転よく利く話上手に乘らされる

へつらいのうまい女に秋の月

鳥取県 太田 幸枝

何ごともデートの日から告げて来た

傘立てのしずく昨日の涙かも

スッポン鍋かこんで老いのさ中なり

鳴門市 八 木 芳 水

気にいらぬ話補聴器外される

現地からクレームが来る机上論

特売日一人一個へ立ち並ぶ

十和田市 阿 部 喜久江

新鮮さ朝の市から買って来る

明日の米といで一日締めくくり

宿題の絵日記ママが書いたもの

相生市 中 塚 礎 石

生きるため蜘蛛はせつせと糸を出し

失業へ三度の飯は変わらない

塾の見栄ないからランドセル軽い

大阪市 山 北 三三三

乗越しをさせた漫画の面白さ

夕立が帰りの橋で降る不運

開ける戸に飛び込む猫の朝帰り

羽曳野市 芦 田 絢 子

泣きそうな空と我慢くらべをしています

たわむれにした指切りが責めてくる

一人ぐらし外野が少し騒がしい

鳥取県 石 尾 かつ乃

自分史をふりかえるお茶あつくして

口下手がデートに行くとして出て行った
おでん屋の大根売れて秋が逝く

広島県 森川 抜智

自叙伝ではじめて知った人の過去
泡の立つくすりを飲んで元気です
絵のわかる顔で見ている美術館

鳥根県 松本 聖子

姪の死 (二句)

ひっそりと野菊の中へ散った姪
残業の肩へ斜めにお月さま
針仕事するにほどよい秋日和

鳥取市 岩原 喬水

借金に走る時計は止まらない
風の糸今朝の青空縦に割り
単身の今日も淋しく食べて寝る

岡山県 土居 ひでの

信号機のうしろで囁くプロポーズ
イマジネーションあなたと伴奏のベル鳴らす
宇宙から松茸探しの作動する

大阪市 今西 静子

キャンプ多彩若さがこぼれる山の朝
旅の夜話題はつきぬ缶ビール
柳友の手つなぐ酒の軽い酔い

西宮市 菊池 トミエ

亡き父の足跡詰めたこの靴
車より電車が早い行楽地

読むだけでもうかりそうな本が売れ

岡山県 富坂 志重

虫の音を入れて舞台の秋つくる
日向ボコ愚痴言う人が一人来る
精一杯生きた枯葉の吹きだまり

鳥取県 黒田 くに子

うるおいが欲しくて秋の野を歩く
週休二日そろそろ邪魔にされそうな
母さんがいると和んでくる茶の間

豊中市 三宅 つえ子

ひとりぼっちの屋根が軋む寒き音
秋深し少ない蝶の数をよむ
自分の中に明日を重ねる父なりき

堺市 神原 文

この子らの顔を覚えてつばめ去る
菊開くあしたを信じミシン踏む
独りいて少し濃い紅ひいてみる

大阪市 堀口 欣一

秋の夜の夢は京都の五条坂
ありがたや一冊の本とめぐり逢い
ふるさとに來て美しい曼珠沙華

羽曳野市 麻野 幽玄

主人の方が折れてくれます夫婦仲
買って來た土でペランダ花が咲き
盆栽に水遣ってから解く旅装

和歌山県 森 三枝子

豊作で喜ぶ時世は遠くなり

ネコの手もあまり機械が穫り入れる

あつさりとかきらめて出る笑顔

岡山県 清水 悠貴女

約束を守る律気な茄子の花

陽の匂いいっぱい孫を待つとん

菊日和の咲くベンチ

川西市 田中 喜俊

宝石に無縁の指で栗をむく

消費税割勘出来ず個々払い

涼風にさみしさ感じ老いを知る

伊丹市 猪原 石莊

もう雨は要りまへんなど傘を振り

シヨベルカー狭いとこ程見事なり

農務課の実力市役所の花壇

静岡市 三浦 つね

石鹼の泡丹念に孫二十歳

ポケットがも一つ欲しい栗拾い

青春のシンボル乳房まんまるい

岡山市 中嶋 千恵子

周波数うまく丸める舌三寸

輝いて見えるあの娘もお年頃

赤いシャツ着せてあげたい人がいて

静岡市 大村 正雄

にわか雨優しいママがきつと来る

一芸を貫く証 指の胼胝
究極の味方は自分ただ一人

岡山県 大石 あすなろ

いい思案出ずに堂々めぐりする

ある日フト平行棒をふみはずす

手文庫に亡母の記憶がつめてある

岡山県 平田 たけよ

善人といわれお人好しとも思い

指切りの温さうれしい菊日和

丁寧な言葉で針をさしている

鳥取市 武田 帆雀

こちらこそお世話様です隙が無い

金賞の菊を咲かせるへそ曲り

奥さんの地声隣に朝が来た

熊本県 増田 一乗

運動会日焼けした子の頼母しさ

華道展個性あらわな花となり

今脱いだズボン履かせるベルが鳴り

富田林市 山原 昭水

ふる里がテレビに映り拍手する

高台の新居は星に近くなり

自分史に失恋五回書きました

豊中市 村上 とく子

矢印の方へ進めば上り坂

新世帯妻のバイトに助けられ

カレンダー妻の予定に負けている

河内長野市 大西文次

朝霧にゲートボールの音が冴え
線路から金木犀の風が吹く

文部省推薦ドラマだけを見る

鳥取県 西川和子

金のないのが集まって打開策

手作りを我が家の文化として話し
足跡を見たから道を変えました

岡山県 福原悦子

木犀の香りを満たす秋の風

大根の味が分って十二月
唐津市 浜本治幸

鯖寿司に亡母の追憶深くなる

子の手前妻を主役に立てておく
子宝に恵まれ過ぎて貧乏し

若者の囃子が冴える秋祭り

虫の音に秋の足音確と聞き

川西市 西脇富美

庭の土芋を育てた体験談

吹田市 廣屋利通

山茶花の咲く頃孫が産まれます

銭湯のある町に住むあたたかさ
出向を拒んで肩が凝りはじめ

夜叉の面はずすと風が快い

無理させて無理をすると言う課長

米子市 小西五十鈴

昭和史を読む祖父の瞳が燃えてくる

米子市 服部朗子

給食へ思い出があるコッペパン

せめてもと思いを詰めて宅急便
事分けて頼んでみたが手まで振る

おさげ髪あんな時代もあったかな

日曜日讃美歌きいてやすらぎを

鳥取市 美田旋風

駅弁が好きでわざわざ汽車で行く

佐賀市 古川一徳

妻が着る服は一応はめておく

世渡りがうまく七つの面使う

マイホーム汗と涙でやつと建て

肩書がないから主張翻えす

大阪府 乾哲静

遺跡から奈良の都が見えてくる

輝いた指に消えない疵のあと

神主も踊る気になる秋祭

尼崎市 那賀島雅子

悪友と飲めば梯子の午前様

月の夜映画のように歩こうよ

島根県 福岡博利

風邪ぐすりよりも艶めく卵酒

孫の顔うかべ今日も便り待つ

飾りだな片目ダルマも古びてる

藤井寺市 菊地繁男

古時計ネジを巻くのは祖父の役
日和下駄履くとお不動へ足が向き
缶詰に馴らされネズミ捕らぬ猫

豊中市 松岡久留美

人の世は甘い柿やら渋い柿
一抹の望みをかけて葉のむ
秋の空過ぎしロマンを呼びさます

和歌山県 西口忠雄

倅せなハンガー花子の服を着る
米櫃を満たすと小言多くなる
他人ならあんなに近寄るはずがない

大阪狭山市 桜井莊次

なめらかな舌が自分を見失う
占いに凝って迷いが深くなる
豪華な軒をかいている内気

鳥取市 前田一枝

せまい部屋大きなピアノだけ光り
断った誘いに未練ふとよぎる
回れ右左むいたら彼がいた

芦屋市 根来敬

男見る目ばかり肥えて縁遠い
雲きれて風の私語聞く寒い途
腹からの笑い欲しくて一茶読む

川西市 野村静雄
ちよつとそこまで来たので好きな人

医者へ行かぬ日の一日の長いこと
ひまそうだなと行間を読んでいる

枚方市 山崎彩子

ヨーロッパふらり

アンネ悼むアムステルダム時雨がち
風車には浜茄子の花よく似合い
霧の中ロンドンならぬパリの駅

鳥取県 中瀬さつき

雨しとど他人ばかりの駅で待つ
見るからに礼儀正しい人横に
他人の傘入れて貰ったにわか雨

羽曳野市 福田満洲子

木犀が香り父の忌が巡り
爆笑の渦にキョトンとして呼名
ナイターの野次に挟まれ初観戦

大阪市 清水利武

松茸の声で食膳喜ばれ
橋渡る鬼が途中で鬼と逢い
離婚して出発点へ子と帰り

姫路市 谷清柳

汽車に乗る傷の痛みの癒えぬまに
かさかさに渴いて候倦怠期
あしたこそいいことがある茜雲

神戸市 岩田信義

名物の自慢それぞれ国訛り
揺れているブランコ未練のある別れ

きつかけが無くて友達のままでいる

鳥取県 浜田民子

朝食に軽いスタミナ料理盛る

足音に心はずんだ時もある

満天の星に誘われ遠まわり

静岡県 中西雅

足首のころばぬまじない又切れた

愚痴いわぬ老いになりたい好かれない

乾杯は葡萄酒にする甲斐の旅

砂川市 大橋政良

愚痴ばつり心のゆるみ突いて出る

煮ころがし少し詠った味になる

猿カニの話を聞かすぬいぐるみ

広島市 中村要

わがままは妻の掌の中でする

ダイエットベルトの穴が顔を出し

里芋と格闘した夜は亡妻を恋う

豊中市 額田明吉

近江雪野山遺蹟発掘現場へ

標野ゆく姫王守った雪野古鏡

見渡した蒲生野の里は黄金波

古稀すぎて似たもの夫婦で古墳行く

岡山県 後安ふさえ

老妻の小言は馬の耳で聞き

赤ん坊の夢の笑顔はサクランボ

駐在とみんな親しい過疎の村

新潟県 高野不二

大金も拾えば苦勞するそうな

笑うてる顔までわかる電話口

本だけは邪魔になつても捨てられぬ

島根県 岩田三和

クローバーが牛と少年近づかせ

いい話時間のたらぬ頃に出る

村長の娘に声をかける牛

大阪市 吐田純子

精一パイ生きる証へ蟬はなく

滝壺を真つ赤に染めて秋はゆく

鳥取県 市村京子

思い出の赤い鼻緒の下駄探す

禁煙権に遠慮しながら吐く煙

青森県 木村喜衛

表札は誰よりでっかい兎小屋

免許証だけが誕生日知っている

八尾市 片上英一

満ち足りて毛づくろいするペルシャ猫

二番手が好き追いかけて行けるから

大阪市 尾崎黄紅

神様も五分の味方は付けてくれ

直立不動へ爪剪っている上司

岡山県 牧野秀香

秋の空雲の変化が夢を描く

二見浦昔のイメージ消えて居り

唐津市 入江喜久夫

一日中話相手のない不幸

泉南市 坂根流水

コップ酒飲んで腹立つ消費税
嫌ですと向けた背中が笑つて

鳥取県 今本早苗

彼岸花燃えて乱れて道成寺
藪椿飾らぬ姿気品持ち

倉吉市 橋本さつき

かあさんの大根足が大好きだ
文化祭にも出してみるわら草履

鳥取県 山内芳江

孤立して秘かに火薬詰めている
思い出は虹のべールに包まれる

奈良県 井上明大

金魚売る店も秋から焼きいも屋
童謡で許してもらう酒の席

宇部市 中村三良

見直しか廃止か秋の夜は長い
スーパードパートばかり目立つ国

出雲市 原章峰

豊かとは分らぬままに腹がへり
のびちちみ尺取虫にもある老後

田辺市 染道佳明

ひねもすのたりテトラポットの私語を聞く
小走りの妻は二三歩先にいる

和歌山市 北山好笑

寂しくて赤いトマトを食べている
水呑み場赤い幟が立ててある

藤井寺市 武部敦子

煮つまった話を野暮が突きこわす
淋しいのお話聞いてよお月さま

出雲市 伊藤寿美

一匹の蚊と闘って寝つかれず
東海道トンボ帰りの商社マン

岡山県 江口有一朗

古里は釣瓶で飲める水がある
沈む村の家一つ消え二つ消え

兵庫県 倉垣恵美

金だけでない世の中が見え始め
谷あいの街にもゴルフ練習場

吹田市 西岡豊

星のない夜は杉苔もねむるだろ
レモンティー腹を立てないことにする

出雲市 高橋きよし

松茸がひととき浮いた土瓶むし
モシモシと互いに達者さぐりあい

豊中市 滝北博史

補聴器が内証話をききたがる
雨しとど松江大橋旅の下駄

いろいろな雲を見てきた二人旅

十和田市 阿部 進
のんびりと行く人生の長い旅
ほめられて子がだんだんと自信つけ

鳥取県 幸家 単車
まっ白い花に詩心くすぐられ
ご立派と言われ正座が崩されず

静岡県 青柳 金吾
一円をお持ちですかとレジが問う
初任給金三十円わが青春よ

河内長野市 岡崎 実
一枚の紙で辺地へとばされる
原稿紙似合う女で寄りにくい

唐津市 野田 旭恒
川の字に並んで寝るも久し振り
通夜の席話とぎれて転寝する

北九州市 香月 直平
百歳の顔はまぎれもない仏
電話なる誰も出ぬから立つとする

寝屋川市 井上 すみれ
脳みそが大分軽くなって喜寿祝
川柳締切友の電話がネタをくれ

鳥取県 森山 豊子
花嫁が来て台所若返り
愛されていると信じていびきかく

大阪府 清水 絹子

初ものを食べると母を思い出す
れんこんの気持になって泥の風呂(九州旅行)

八戸市 島田 昭治
すきあれば友の足まで引く構え
天国は勝手に遊びに行けぬとこ

岡山市 河村 青銅
ずっしりと責任負わす三文判
物事が器用で小銭しか持たず

松江市 原 長三
酒煙草やめた男の日向ぼこ
女房のよさを見直す七回忌

青森県 波 ただお
海と空眺めて暮す年金者
赤トンボ物干竿で愛結ぶ

富田林市 浦田 トシエ
人形に花ちゃん花ちゃんと一人っ子
ジャンケンポン縄飛び折紙日が暮れる

宝塚市 末次 真
それぞれがそれぞれの暇過ごし居り
ゴルバチョフ北方四島還してよ

高知市 山崎 一求
秋の味届けてくれた過疎の母
口先と本音が違う恋心

檀原市 西本 保夫
空想が途切れ大きく背伸びする

雨の日もいとわぬ妻が服を買へう

茨木市 藤井正雄

ひんやりとした畳祖父お茶を飲む
氏神の太鼓帰って来いと鳴り

今治市 渡邊伊津志

四季があるから母さんは忙しい
泣かされた児が帰り行く曼珠沙華

鳥取市 中居武士

歯の抜けるように減りゆく戦友会
アルバイト人の情が身にしみる

静岡市 大神静枝

それなりに活けし小菊の彩華やぎ
恰好な道万歩計と朝を生き

泉佐野市 大工静子

夜もすがらホツツキあるき膝の猫
見てくれと言っただけあって目鼻立ち

弘前市 村田善保

鳩笛に故郷を想い夜も更ける
葉鶏頭五百羅漢の貌に映え

鳥取県 中西智恵子

なんとなく票を匂わす葉書来る
授乳時に乳歯数える母の愛

岡山県 福原辰江

切り花にすればなんでもない野草
ちぐはぐも流行として着る若さ

静岡市 浅子まつゑ

敷石のまだ濡れている雨上り
暑さにも負けず草取る妻の唄

岡山県 森下正子

眠られぬ夜の時計が良く喋る
はみ出した孫の布団に大あわて

鳥取県 横山房子

亡夫に似たセールスが来てことわれず
胎教に音楽聞かせ歌手目ざす

堺市 井上たかし

病窓に見送る傘が点となる
談笑の隣の部屋は危篤です

藤井寺市 田中孝子

木枯しがピシピシ鳴らす旅の窓
夫の墓紅く触れてる烏瓜

倉吉市 青砥菊枝

痴呆症にこにこ顔が愛される
底抜けに明るい女にいつも負け

唐津市 福島紀一

宵祭りしみじみ聞いた祭り笛
沙魚の川昔はよかったと橋の上

静岡市 大石たき

読経する内は雑念忘られる
萩すすき供えど月は雲がくれ

鳥取県 鈴木 芙美

デートした瞳輝く娘が帰り
追い風に乗ってうれしい先をよみ

泉佐野市 真崎 浪速子

親馬鹿もよし幸せな家なれば
同窓会昔の癖を見付け合い

静岡市 丹羽 定次

軽く受け責任重し証人判
気ばかりで孫の動きについてけず

鳥取県 武田 照女

唯一つこの足音を信じきり
にこりとも出来ぬ女の管理職

大阪市 榊 本落児

焼酎をワイングラスで飲む男
カルテ書く医師の手元をのぞきこむ

八尾市 向井 しづ子

年かしら見る番組のないテレビ
陽だまりの秋へベコニア咲きかえし

藤井寺市 楠 昭子

最終のコースだ妻がいてくれる
東海道富士にさよならして弁当

鳥取県 美浦 美代子

孫が来て虫の居所良くなった
温室のバラ四季をたたえる詩がない

和歌山県 岩崎 穂

無礼講渾名とび交う同窓会

天才も酔ってしまえば只の虎

弘前市 肥後 和香子

湯豆腐は円満家庭の見本です
美しく老いるは常に課題です

島根県 梅木 梅園

あきらめの道を見つけた運鈍根
つけものの味変えてゆく秋の風

島根県 今川 三津江

峯寺の鐘を合図に終る畑仕事
来年のプランの中に農作業

島根県 兒玉 幸子

畑仕事少し残して冬支度
秋深む新聞配達重くなる

静岡市 山中 竹野

冷房で残暑の味も味わえず
葡萄たね飲んで芽出ると気にする孫

八尾市 松本 芙美子

ブランドの娘のバッグ借り不釣合い
子ばなれが出来なくて大可愛がり

鳥取県 久野 野草

喧嘩買うほど豊かではありません
かたつむり急げお日様笑い出す

岡山県 三村 美恵子

絵に書こう心に刻み夕日見る

ヒヨドリに少しは残せと庭の柿

富田林市

加藤 ミツエ

一葉二葉カサカサ落ちる師走かな
独り居になんと気楽な十二月

寝屋川市

北岡 波留吉

手土産まで姑が見たてて里帰り
公園の椅子も赤面ラブコール

兵庫県

円増 貞子

道問えば笑顔で示す指の先
耳元にまつわる秋の蚊に目覚め

米子市

大田 みさと

逃げて来て大事なものを置き忘れ
灰皿も衣替えして秋深む

藤井寺市

中島 志洋

無精者バナナと蜜柑ばかり買い
雪国の恋を育てる囲炉裏端

大阪市

家村 高雄

日の当る場所まで遠い二人仲
出世欲友情までも踏み台に

大阪市

平山 登代

一人でもまた観たい奥入瀬の秋
秋咲きのばらは小さく誘ってる

大阪市

平井 露芳

アデランス社長もしているとコマーシャル
使い捨て元祖は割箸妻揚子

新春市民川柳大会

とき 平成2年1月14日(日)
10時半開場 11時半締切

ところ 津山市総合福祉会館

会費 1000円(発表誌呈)

柳話

兼題と題者

「文句」	尾崎俊平
「癖」	富永邦坊
「摺む」	西山晴々
「摺順」	小林妻岳峰
「並ぶ」	青山岳奇童
「糸」	浜野方夫
「山」	杉山俊平
「宴」	尾山恵美子
「特別課題」	森中哲秋
「特別席題」	土居連山
	大野

◎各題2句・特別課題1句 欠席投句拝辞

主催 津山市教育委員会

悪友が来て一本追加してくれる
冬支度に漬けもの樽がひとつ減り
年賀状元気に受けて根競べ
ロンドンに住んで恋しい黒田節

◆ジュニアの部

ウフフフこれが私の素顔です	尼崎市	新井 朋子
ツバ飛ばしケンカができる友がいい	大阪市	福西 範子
左かん屋のようにバタ塗る今朝の兄		
運動会リレーで一等目指すのさ		
	島根県	川津 幸夫
	東大阪市	大平 太一郎

これも又仏の葉か鱗雲

和歌山市

堀 畑 靖子

六道の絵は彼岸花咲く此の世

大阪市

榎 本 路 児

女流画家敵意が見える裸婦像に

米子市

林 荒 介

夜の帷に包まれる絵の中の海

枚方市

山 崎 彩 子

中世の塔すつばりと蔦紅葉

川西市

野 村 静 雄

かんらからから腹とは違う笑いよう

唐津市

山 口 ふ さ 子

前世では仇であつたよな夫婦

唐津市

田 口 虹 汀

説教を聴いて一日仏哉

米子市

青 戸 田 鶴

この皿に入れると亡母の匂いする

唐津市

仁 部 四 郎

天高く女子中生の膝頭

神戸市

岩 田 信 義

手袋が覚えた十本指の癖

高槻市

川 島 颯 云 児

老いてなお確かな母の目分量

今治市

渡 辺 伊 津 志

悦楽のザッザザンザ波返り

寝屋川市

堀 江 光 子

終戦に灯を一せいに点した夜

堺市

井 上 た か し

医療機器機械化群の中で病む

英面市

椎 江 清 芳

駐在さんだけが他人の過疎の島

和歌山市

長男に結婚促進決議欲し
島根県 小 砂 白 汀
食うだけは食った毛虫が地にもぐり
米子市 光 井 玲 子
その時は蛇になつても渡りきる
唐津市 浜 本 義 美
分け合えぬ妻の痛みの指十本
鳥取市 西 尾 呼 風
妻の刻く梨だけ食べて句終わり
岸和田市 古 野 ひ で
折にふれ心をよぎる亡夫の癖
宝塚市 末 次 真
向日葵が燃ゆる夕日と正眼に
和歌山市 牛 尾 緑 良
海光る胸の鼓動のそのままに
八尾市 高 橋 夕 花
菊人形雄々しきひとのまぼろしか
羽曳野市 田 中 隆 二
寒いさむい男の部屋にあるポット
藤井寺市 高 田 美 代 子
食欲をとうろくかファッションをとうろく
八戸市 島 田 昭 治
悪銭を身につけたのが名士様
大阪市 兼 松 宏 安
告別式少しはなれて不肖の子
豊中市 田 中 正 坊
全集の埃を払う漱石忌
廿日市市 森 川 抜 智
ババ抜きでおばあちゃんが勝ちました
和歌山市 福 本 英 子

コロボツクル童子に還る路の傘

寝屋川市

豊 福 路 子

コスモスに聞いてみようか七番地

米子市

小 塩 智 加 恵

還暦を同窓会で祝い合い

米子市

信 本 博 子

月光へ小さな恨み消えました

竹原市

尾 崎 黄 紅

町会の派閥は酒と饅頭に

大阪市

服 部 朗 子

頑な糸で織物には向かぬ

米子市

米 田 恭 昌

ライバルとひとつ盆のむ屋台

奈良市

麻 野 幽 玄

盃は一つ夫婦の月見酒

羽曳野市

神 原 秀 子

子が病んだ日のことリンゴむきながら

島根県

大 平 太 一 郎

白菜の味に顔出す亡母恋し

東大阪市

兵 庫 県 遠 山 可 住

熟年の途をまっすく舗装する

岸和田市

芳 地 狸 村

一步一步積んだ手習い生きている

仙台市

川 村 映 輝

パチンコは献金されてやめられず

島根県

堀 江 芳 子

表面に出さぬ不満が泡をたて

寝屋川市

宮 尾 あ い き

まだ炎えていたのか十一月のカンナ

北九州市

香 月 直

後退をするなび視野を広くする

直

大崎市 家村 高雄
役付きの同期を妬む根性なし

藤井寺市 中島 志洋
味方だと心許して裏切られ

唐津市 浜本 ちよ
井戸を出た蛙とわたし向う見ず

唐津市 野田 旭恒
月を見る団子へ猫も来て座り

枚方市 森本 節子
吾亦紅シルバークレーになりつも

守口市 結城 君子
胃袋と相談ステキとて残す

吹田市 栗谷 春子
いつの世も親とはそんなものである

岡山県 松本 元江
旅に出る私の夢を見直しに

茨木市 藤井 正雄
島育ちらしからぬ手で酒を注ぎ

島取県 ささき やえ
彼岸花咲けばケロイドまたうずく

羽曳野市 徳山 みつこ
ガリバーになって眼下に淡路島

守口市 羽原 静歩
阪妻の顔をチラリと思ひ出し

西宮市 門谷 たず子
それなりの出会いがあつていびつな皿

倉吉市 市村 京子
気をつけいの号令あれば立てそつな

和歌山市 桜井 千秀
化け方が下手で尻尾を掴まれる

広島市 中村 要

年波であやしくなった無神論

大崎市 松尾 柳右子
麦踏みもおととき話になる平成

堺市 神原 文
沈む陽を待てず半月自己主張

岡山県 山本 玉恵
森までの道なら教えてあげましよう

岡山県 千原 理瑛
いい汗をかいて人間らしく生き

和泉市 西岡 洛醉
無為無策落ちる夕陽の背に痛し

弘前市 真喜内 實
コンパインに孫乗るだけのお手伝い

広島県 田村 新造
窓越しに五重塔を拝む宿

鳥取県 西原 艶子
簡単に男へ好きと言える齢

大崎市 山北 三三三
歳月が無縁仏となった墓

岡山県 富坂 志重
一抜け二抜け小さくなった父の顔

大崎市 板東 倫子
定年後バックボーンが曲り出す

大崎市 今西 静子
マイホーム庭にハーブの香を散らす

豊中市 三宅 つえ子
地味な道辿ればやと道しるべ

和歌山市 古久保 和子
大胆な言葉も書ける砂の上

大崎市 神夏磯 典子
飛行雲平和な空を案じさせ

岡山市 井上 柳五郎
秋霖も古色滲ます宿場町

倉吉市 淡路 ゆり子
上品な言葉に触れて水旨し

鳥取市 美田 旋風
下戸にされ上司の鞆だけ抱え

八尾市 片上 英一
ラビアンローズリハビリー室で鳴っている

大崎市 亀井 円女
茶柱を陽の落ちるまで信じてる

大崎市 大福 留吉
手を上げて会釈で送る車椅子

堺市 高橋 千万子
言い負けて時代のずれはねるとする

豊中市 辻川 慶子
経を読む老母に秋は深みゆく

投句先 川柳塔社事務所へ(ハガキに3句)

「愛染帖」へのご支援ありがとうございます

した。1月号から選者が河内天笑氏と交代、

「銀河系」と改題してスタートいたします。

よりしくお願いします。

NHK川柳

12月の放送は都合により中止

となりました。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

川島 諷云児

夫婦の絵だんだん乾燥して暮れる

池 森 子

子供達も漸く独立、ほっと一息つく頃には下り坂。夫婦の会話も途切れ勝ちとなり歳月と共に老いてゆく。宿命とはいえ身につきまされる。枯れてゆく様子を乾燥して暮れるとは巧みな表現。まさに巻頭を彩る秀句である。

一応は余白だらけの手帳繰る

木 下 道 子

現職の頃は手帳も予定がぎっしり詰まっていたが、定年後はこれといった予定も無い。それなのに一応手帳を繰る。習性とは恐ろしい。共感を覚える。上五が句全体を引き立てている。粗大ゴミにならない事を祈りたい。

養育費めぐってオトコ対おんな

鶴 久 百万両

家裁も頭の痛いことだろう。子供の事を考えれば、一日も早く円満に解決してほしい。夫婦でなくなった男对女の醜さをずばり風刺

した心憎いまでのテクニクに脱帽。ときには止りときには流れ丸い石

松 本 一 郎

だれしもかくありたいものだが、さて實際はどうであろうか。人生訓を巧みに詠んだ句で、作者の手柄がしのばれる。この心境になるまでの努力に敬意を表したい。

大家族だった広さに一人住む

宇 野 昭 代

夫には先立たれ子供らは遠くに住んで帰っても来ない。話相手も無く広い部屋にぼつんと独り、賑やかだったあの頃が懐かしい。老いの寂しさがにじみ出ておりしんみりさせられる。「広さに」がこの句を生かしている。

それからのは神様に聞こう

高 田 美 代 子

さらりと軽く言い切つてあるが、奥深い味のある句である。神様はなんとお答えになるだろう。他人事ながら気にかかる。

田舎の風に抱かれに行こう影法師

市 村 京 子

女性ならではの優しい句。暖かく迎えてくれる故郷があるってなんと素晴らしい事だろう。故郷の無い者にとっては羨ましい事だ。暖かい故郷を田舎の風と詠んだ上五に感銘とつつきの悪い隣のパラの花

上 田 柳 影

世間にはよくあること。遠い親戚より近くの他人という事もある。腹の虫を押さえて仲よくやりましよう。

責任が無いからすぐに妥協する

松 川 芳 子

人間の心理をつまく突いた句である。自分の事なら唯々として妥協はしないはず。男なら余り出世をしないタイプ。「他人事だからあつさり妥協する」という句があつたと記憶するが、思うことはだれも同じである。

出世するはずの手相をじつと見る

今 西 静 子

理想と現実の相違は世の常、だれもが経験する。この句を鑑賞していると啄木の詩「働けど働けど……」が連想されて微笑ましい。

押し出され成り行き見てるトコロテン

野 瀬 昌 子

ペースとユーモアが句全体に溢れ、じつくり鑑賞していると笑いがこみあげてくる。上五に對して下五の着想はお見事である。

そのほか、見逃すには惜しい秀吟五句。

桜貝波に誘われ行つたきり

山 本 希 久 子

友の背の温みで知つた生きる道

森 脇 和 子

一日の汗をまるめてシャツを脱ぐ

岸 桂 子

老人の背は年金に支えられ

富 坂 志 重

涙濁れ果てて女はつよくなる

黒 田 くに子

苗香のむ

小出智子選

憧れて久しリンゴの丸かじり

大阪市 西出 楓栄

ダイレクトメールばかりが届く寒い午後

八尾市 宮西 弥生

神さまは不在十月淨く住む

風の言葉に嘘がないから旅に出る

和歌山市 後藤 正子

蹟いた日はゆっくりと歯をみがく

相槌を打って欲しくて電話する

和歌山市 西山 幸

もうかなが読めるとおしめかえながら

堺市 宮本かりん

欺くに微笑みひとつあれば済む

倉吉市 市村 京子

宵寝しておとぎばなしを見つづける

八尾市 高杉 千歩

お蔭さまと思うものが見えてくる

西宮市 林 はつ絵

火を持ち寄って明るい部屋にしてあげる

米子市 政岡日枝子

断って明治の女膝崩す

米子市 服部 朗子

どこへ行くのと時折聞いてあげている

和歌山市 田中 輝子

刺子して老母とわたしの冬が来る

島根県 松本 文子

年寄りの冷水でよし恋ごころ

大阪市 板東 倫子

点を打てない男と女の居る原画

富田林市 池 森子

老父母と別れる日などひきのばし

羽曳野市 徳山みつこ

トイレまで付き合うグループの一人

和歌山市 桜井 千秀

マネキンが冷たく笑う飾り窓

赤ちやんをあやすが如く犬を抱く

じつと目を見て話すから信じよう

一人ぼっちはお互いさまと言う亡夫

狼狽えているのはわたし娘の自立

低血圧ネジは静かに巻きましよう

友情は資産うれしく増え続け

混浴は峠を越えた人ばかり

カラオケへ行く友達は別にいる

淋しい日は母・母・母と書きなぐる

一昔前なら嬉し巡り合い

ゆずる日のヌカ漬けの壺搔き回す

指さされようと私の好きな紅

朝出たままの茶碗ポツンと置いてある

鈴なりの柿を横目に一服す

遙かなるものへ一途の鳥帰る

こだわりを捨てて森をさ迷うて

梅干しがやんわり亡母の貌になる

瞑想の中でバズルが解けていく

大声で叫んで待つっている

突っ張ってみてもかなしい業を持つ

ローランの絵を抜け出した少女の恋

あれも小さな恋かも知れぬ椿の朱

本棚へ乙女の心置き忘れ

喋りたいし喋りたくないしで逢わず

西宮市 西口いわゑ

八尾市 高橋 夕花

倉吉市 青砥 菊枝

大阪市 日阪 秋子

和歌山市 山川 克子

富田林市 片岡智恵子

羽曳野市 福田満洲子

倉吉市 野中 御前

堺市 山本 半銭

姫路市 丁坪サワ子

堺市 小西 小雪

米子市 石垣 花子

大阪市 島村美津子

羽曳野市 吉川 寿美

藤井寺市 武部 敦子

静岡市 増田 ふみ

静岡市 大神 静枝

高槻市 河瀬 芳子

和歌山市 山口三千子

大阪市 田中 弘子

寝屋川市 稲葉 冬葉

米子市 林 瑞枝

西宮市 門谷たず子

兵庫県 倉垣 恵美

河内長野市 植村 喜代

駅前の赤いポストに用がある

鳥取市 小谷美つ千

いました。

た
か
く
た
く
た
く

(ハガキに3句)

ベ
ル

千 原 理 瑛 選

古き世のベル聞く小さい銅鐸に
 発車ベル永い別れになりました
 老いひとり頼みの綱の福祉ベル
 恐るおそるベル押してみる朝帰り
 発車ベル新たな夢を滑らせる
 秋人
 花咲かす決意を乗せて発車ベル
 青銅
 発車ベル永久の別れを知っている
 冬
 三度目のベルを合図に立つて行く
 冬
 目覚ましのベルに楽しい夢破れ
 一
 報知機のベルはとっても過敏症
 有
 息抜きをポケットベルが追いかける
 大
 終列車のベルは聞かないことにする
 枯
 襟元を合わせてベル押す門構え
 鉄
 ポケットベル賢い妻に操られ
 繁
 人生の始発のベルをベアで押す
 義
 真夜中のベルにもしやが先に立つ
 正
 主婦業に休憩ベルのほしい日も
 清
 真夜中のベル快楽の夢途切れ
 柳
 一人寝の深夜のベルに恐怖感
 恭
 時報ベル午睡の夢見惜しかった
 軒
 立ち食いへもう一箸に発車ベル
 太
 核心を突いたところへベルが鳴る
 實

運命を変える発車のベルが鳴る 高明
 豪邸のベルをからかう酔っぱらい 陶美代子
 発車ベルそつと見送る片思い 悠泉
 ノーモア広島世界平和へ鳴らすベル 一ひの
 ジングルベル狂想曲となる師走 杏村
 愛のベル高らかに鳴るハネムーン 辰江
 時差ぼけのベル真夜中のミステリー 達子
 一生に一度だけ押すベルを持つ ち亭
 都落ち発車のベルにホッとする 園みつ子
 午前五時行動開始のベルが鳴る 元江
 踏ん切りを発車のベルがつけてくれ 旋風
 終業のベルから炎えてくる若さ 可住
 ライバルのポケットベルも鳴りだした 正坊
 完敗のベルへあしたの血が騒ぐ 和子
 山小屋のベルは雲海の彼方から 朴竜
 夢うつつベルを押さえていた不覚 勝美
 再会の夢は捨てない発車ベル 輝子
 告白へポケットベルが水をさす 京子
 心残りをぶつ切り断った発車ベル 博子
 ウエディングベル長い旅路のプロローグ 寿美
 虹色の余生に警報ベルが鳴る 雄々
 人生の明暗分けた発車ベル 弘朗
 天
 ベルの音ここから歴史変るかも 重人
 軸
 二十一世紀へ叫ぶ平和のベル鳴らす

終
わ
る

金 井 文 秋 選

エリートのにレールへ乗れぬまま終り
 一生を終るわけがまだつかぬ
 敬
 悪ない一日だったしまい風呂
 終りましたと葬儀屋の排気音
 枯
 子育ても終えて鏡にもつゆとり
 テ
 終わりでよろしく頼む女房どの
 京
 刃傷沙汰あつて不倫の恋終わる
 右
 終わる日は泣くかもしれぬ出勤簿
 四
 宴会が終わると養子すぐ帰る
 正
 除夜の鐘多難な年を締めくくる
 達
 戦後終わらず北方の島基地の島
 正
 送り火も終わり静かな加茂河原
 静
 終の日へ写経つづける老いの日々
 狸
 終電へ街の流れが吸い込まれ
 可
 松茸も食はず今年も旬終る
 かなめ
 晩酌がまだ終わらない上機嫌
 典
 過去となる石ひとつ積み今日終る
 元
 終わるまで話聞いてと泣いて来る
 高
 ひまわりの深く付き夏終る
 伊
 ラストチャンスに賭ける男に期するもの
 寿
 うたた寝して見たいテレビは終つた
 繁
 勘違いされたまんまで終わりそう
 弘

初歩教室

題 — 湯豆腐

辻 白 溪 子

(湯豆腐を囲みよく食べよく喋り)
湯豆腐の晩酌へ親子の馬が合い
表現を省略して、情景を描くのも一つの方
法です。

(湯豆腐へ絆ぬくめている親子)

湯豆腐に熱燗が出る小さい城

(湯豆腐が煮えて酌ぐのが止まる酒)

単身の湯豆腐とてもうまくなり

少し着想を広げてみますと

(単身に馴れ湯豆腐の連れが出来)

湯豆腐はふたりの話きいている

(湯豆腐が聞き倦きている愚痴話)

湯豆腐へ酒好きの友だから連れ

(湯豆腐で足る酒好きの連れと知る)

あれこれとグルメを追って湯豆腐に

(結局は二次会湯豆腐だけで済む)

子の本音湯豆腐食べつ聞いてやる

(湯豆腐へ誘い本音を喋らせる)

湯豆腐で正座しながらしはられて

(叱言聞く正座へ湯豆腐煮え詰まる)

外は雪単身赴任は湯豆腐で

(湯豆腐を食べ馴れ別居苦にならず)

湯豆腐を吹いて悪女の深情

「悪女の深情」は少し表現がきついので

(妻でない人と湯豆腐差し向かい)

病みあがり湯豆腐の味思ひ出す

(湯豆腐の味恋しがる病みあがり)

許しこう祖父と一杯湯豆腐で

少し表現を変えてみると面白い。

(湯豆腐にすると機嫌が直る祖父)

柚子利かせ湯豆腐一際味が生き

(柚子利いた味湯豆腐の好き嫌い)

湯豆腐の旨い季節だ来いと言う

(酒好きのもてなし湯豆腐だけで足る)

湯豆腐の好きなお方に寄ってくる

(湯豆腐を運んでおんなの話好き)

湯豆腐に夫を旁う酒を注ぐ

(湯豆腐で足りる良人へ酌いであげ)

湯豆腐ではまだカラオケと迄行かず

(湯豆腐の店カラオケは置いてない)

雪もよい湯豆腐の出る思いやり

(湯豆腐へかえたい雪が降ってくる)

一丁でよい子はなれ夫婦の豆腐鍋

(一丁で間に合う夫婦の豆腐なべ)

暖簾から湯豆腐と声かけている

(湯豆腐の注文のれん越えてくる)

タイエット湯豆腐出番今日も又

(タイエットする湯豆腐をたべ倦きて)

湯豆腐の昆布は尻尻で母の味

(湯豆腐の味へ尻尻の昆布選ぶ)

湯豆腐に気をつけてます猫舌で

(湯豆腐へ猫舌おくれて箸を出す)

志 重

繁 男

敬

ひさ子

和 子

保 夫

時 弘

しづ子

興 輝

芙美子

方 子

金 吾

湯豆腐を箸で取り込む膳曲り 康子

(湯豆腐へ挑戦少うし箸が酔う)

熱燗と豆腐の鍋で医者いらす 君江

「医者いらす」より「しらぬ」にしては

(晩酌と湯豆腐病気をしらぬ父)

湯豆腐が一番好きな総入歯 三津江

(湯豆腐の味が入歯を喜ばせ)

ふうふうとゆどうふうつく南禅寺 明吉

ひらかなが続くので湯豆腐と漢字にしたい。

(湯豆腐の庭で知れてる南禅寺)

ご近所も湯豆腐らしい窓の露 志華子

この場合、隣の方が親しみが持てるのでは

(お隣も湯豆腐らしい窓の雪)

箸の先逃げた湯豆腐追いかける 幸枝

面白い情景ですが、次のようにしては如何。

(湯豆腐の湯気もおたまは掬いあげ)

友が来て湯豆腐かこみ話がはずむ ミツエ

(湯豆腐のもてなしだけで足りる友)

湯豆腐のせいにしている酒の量 円女

(湯豆腐にすると晩酌量がふえ)

湯豆腐の昆布だけ食ってる変わり者 高雄

(湯豆腐の昆布が残っていない鍋)

湯豆腐へ一家団らん冬の夜 太一郎

(団らんの湯豆腐温い冬の膳)

個性を見せぬ湯豆腐の味が好き 喜与志

(飾り気のない湯豆腐の味が好き)

南禅寺拝観そこそこ湯豆腐やに 登代

湯豆腐へ足を伸ばした南禅寺 勝美

(湯豆腐の店が待ってる南禅寺)

ウイスキー飲むと言うのに湯豆腐か 義

(湯豆腐の一人がチビチビウイスキー)

湯豆腐の鍋ふつふつと顔四つ すみれ

(湯豆腐の鍋へ四つの顔が寄る)

結局は二人で湯豆腐食べる蔵 和子

(湯豆腐の話題がなごむ老夫婦)

今日も又湯どうふですかお父さん とく子

(晩酌の当て湯豆腐で足りる父)

湯豆腐が待ってる家路へ今日の冷 一乗

(湯豆腐が待ってる帰りの足が急ぐ)

湯豆腐の用意して待ち午前様 三千子

(湯豆腐の用意が無になる朝帰り)

ふいの客湯豆腐かこんで話し込み 美恵子

(湯豆腐の話が弾む不意の客)

湯どうふに熱燗セット首のばす 隆雄

(湯どうふのセット相談せずに買う)

湯豆腐が小耳にはさむ黒いグチ 治

(湯豆腐の話題近所の噂聞く)

湯豆腐に小さな愚痴もビョント浮き 彩子

(湯豆腐に聞かせる愚痴はたかが知れ)

着想と表現が巧みな句

父の顔待って湯豆腐昆布敷く 照子

湯豆腐の猪口が明日のプラン練る 三津江

湯豆腐が待ちくたびれて固くなり 遊峰

たぎる鍋コトコト踊る嵯峨豆腐 章久

湯豆腐に決まって笑みが鍋にある 小鹿

湯豆腐の鍋のかこみにある謀反 敬

私の句

二次会は湯豆腐だけで足る仲間 白漢子

湯豆腐へ座って外人京が好き

◇

題「空席」 12月15日締切(2月号発表)

宛先 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

ハガキに3句以内 辻 白漢子

小出智子句集『露の臺』は、皆さまの
あたたかいご支援により完売しました。
ここに厚くお礼申し上げます。

川柳塔社

西日本文字放送作品募集

題「馬」 森中恵美子選

3句 締切 12月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウミビル3階

西日本文字放送 川柳係

本社 十一月句会

11月7日(火) 午後6時

メンズファッションセンター

このところ冠付きの句会がつづいたが、今回は通常の本社句会となった。しばらく病氣療養中であつた山本規不風氏が八カ月ぶりで元氣な顔を見せ、早速、席題の選を担当された。また、兼題選者にあたつていた河瀬芳子さんは本社句会初めてながら立派な選をされた。おはなしは、これまたしばらくぶりで野村太茂津氏、葵水・酔々・弘生の三氏と共に写つたモノクロの古い写真にからんで、今は亡き柳友の思い出をしんみりと語つた。

月間賞は西出楓楽さんが獲得。(正)
(進行「天笑」)(記録「射月芳・月子」)

出席者—太茂津・福本英子・すすむ・仙吉
シマ子・利武・悦郎・白兎・重人・規不風・柳影・房子・公一・恭昌・三男・光代・寿子・敏・東雲・タン吉・遊美・冬葉・文秋・智子・絹子・隆二・笛生・右近・小路・楓云

児・紫香・白漢子・天笑・月子・千秀・幸・柳伸・達子・杜的・小林英子・白峰・静歩・満津子・典子・鬼遊・眉水・柳宏子・悟郎・武庫坊・楓楽・勝美・勝晴・憲太郎・美智子・藤子・おさむ・元紀・章久・岳人・寿美・庸佑・八斗録・いわゑ・みつ子・白洋・吐来・射月芳・昭子・美代子・頂留子・度・一二三・あいき・英一・萬的・正坊・雀踊子

席題「汁」

山本規不風選

足のしびれに息づく熱い箸洗い
一汁の情がこもる旅の宿
一汁一菜こころ豊かに生きてます
米の汁飲んでくだ巻く不埒者
韓国の貝赤だして口を開け
言うなれば汁気まったくない女
墨汁の跡サラサラと美しく
味噌汁がこんなうまい病み上り
おしるこを囲んで女かしまし
みそ汁の味で体調よくわかり
味噌汁の香りが孤独を慰める
十二単衣に嫌われている桃の汁
病棟の坂にしじみの汁がある
二度ともうこりたと誓い合う苦汁
この指とまれお汁粉の好きな人
騙されて飲んでいたのは狸汁
みそ汁もだんだん嫁の味になり
一汁一菜守つて老父の健康法
みそ汁の美味い故郷に酔っている

絹子 利武 寿美 千秀 小路 楓楽 遊美 杜的 美智子 武庫坊 楓云 元紀 元紀 憲太郎 藤子 英一 満津子 柳宏子 おさむ

リンゴ汁飲んで長生きする心算
みそ汁の味はやっぱり亡母のもの
湯どうぶにスダチ日本の冬の味
レモン汁瘦せたい願ひ叶えましょ
結婚つていいな暖かい汁が出る
粕汁が欲しい名残りの秋の冷え
干拓はどうなつていいるしじみ汁
みそ汁がおいしい朝のよい予感
離婚など出来ぬみそ汁うまい妻
甘辛いお汁粉彼とそれつきり
棘のある言葉は要らぬお汁粉屋
汁の実も秋から冬になつてゆく
汁かけを食べて出世に遠くいる
粕汁でぬくもりもらう昼の街
大それた望みはいわぬしじみ汁
闇汁へ男きわどい話する
朝のみそ汁はいくさを知っている
塩断ちの汁から汗が軽くなる
苦い汁飲んで力をつけている
とろろ汁夫婦の絆確かめる
しじみ汁昔話はほどほどに
妻と旅ととろろと唄の最上川

席題「皮」

福本英子選

手垢が光る皮の袍と職を引き
新品の皮靴見せに来たデート
鯉の皮祭ばやしが風に乗る
りんごの皮むいて見舞の言葉選る
偽物が出て来てかなしヴィトン持つ

シマ子 白漢子 重人 絹子 笛生

利武 恭昌 満津子 典子 昭子 小路 度 美智子 公一 福本英子 みつ子 幸 勝美 笛生 美代子 萬的 幸 白兎 月子 典子 正坊 規不風

持つ人が持てばほんとの皮に見え
つらの皮薄く政治家にはなれぬ
リンゴの皮の赤さに戦後史が残る
点滴の皮膚から生氣はとばしる
大阪生まれやっぱり鰻の皮が好き
男らしい男の皮膚にある匂い
和鉄で祖母が切つてた鰻の皮
もつものを持つてひと皮剥けました
中年を背伸びしている皮コート
皮ジャンで軽い命がぶつとばす
皮一枚剥ぐよに化粧拭き落とす
フアッジョンの毛皮へ溜息ためて
性こりもなく嘘を言う面の皮
手の皮も厚く母子の灯を守り
栗の皮剥いてトルストイから逃げる
熟年の皮膚もてあます整形科
牛皮の靴くたびれて父の秋
野暮用も毛皮のコート着て女
皮ジャンもやさしい言葉待っている
おらが村にもミンク着る娘が増えた
満腹の秋目の皮がよくたるむ
これ以上瘦せれば骨と皮になる
ピーナツの皮へ思案の尽きた顔
娘も二十歳ひと皮むけて帰省する
乾布摩擦の皮膚風邪にはすぐ負ける
パトロンがついて一皮むけたママ
ピーナツの皮膚にさわったことがない
皮斬らす心算骨まで斬られてた
恋おわるたびおんな一皮ずつむける

庸 佐 武庫坊 元紀 規不風 みつ子 雀踊子 紫香 三男 幸 寿美 千秀 笛生 隆二 一三 白兔 憲太郎 八斗 美代子 いわゑ 右近 眉水 白峰 静歩 月子 シマ子 八斗 正坊 柳宏子 楓 楽

毛皮買いきて行き先を考える
皮算用外れて土地も妻も逃げ
皮膚貼つて縫いで整形美人です
少々の寒さいとわぬ皮下脂肪
善人の皮をかぶつただけの寄付
五体満足つき目等ない皮膚がある
バーゲンにしてもミンクに手が出ない福本英子
兼題「表面」 桜井千秀選
月の表面あれは兎と言いはろう
弾まない毬の表面だけ叩く
どろ沼の表面疑惑の目が浮ぶ
表面に見せぬ黒子の舞台芸
表面に立たされスリムになりました
表面の苔はひたすら雨を待つ
表面をとりつこうた杜の人事
表面は花を浮かべた泥の沼
表札は夫婦現在同居人
表面に触れると鳴り出すオルゴール
表面に浮かんでこない闇がある
おだやかな表面だから恐くなる
表面は猫をとおして宮仕え
表面は妥協本音は別にものつ
表面の影武者ばかり見つめてる
表面はあくまで味方の顔をする
表面に見せぬマグマを抱いている
表面の処理がしこりをくすぶらせ
表面は仏の顔で鬼を射る

庸 佐 公一 典子 柳影 美代子 藤子 白洋 絹子 柳影 白溪子 憲太郎 満津子 あいき 杜的 英一 いわゑ 射月芳 寿美 妻子 白溪子 三男 頂留子 武庫坊 冬葉

表面は取っ付き悪いがよい父で
表面はとても静かな休火山
表面は素直に仁義きつてくる
表面をつくらつているおかめです
表面からずばり咎めの矢が刺さる
表面は味方の顔で酌いでやる
表面は幸せそうな竹人形
表面は平和に積木積んでいる
きつかけを待つて表面崩れだす
表面で笑いきびしい父の眉
表面を飾ると心の飢になる
金張りのうわべばかりに乗せられる
つくらうてみては上げ底見えて
表には出るつもりない知恵袋
表面の虚飾にからむ蜘蛛の糸
表面の数字に出ない核汚染
借りものの智恵で表面撫でている
表面はおだやかやがて火を吐くぞ
表面は君子の顔で嘘をつく
表面は鼻毛抜いてる風の中
表面良すぎて本音覗けない
兼題「引く」 玉置重人選
我田引水河童も人も濡れネズミ
引き止める言葉へ本音なだれ込み
棚はたの話を妻が袖を引く
綱引きの太郎に旗を振つてやる
どこで線引くかでもめて居る会議
嘘一つ引くと辻褃合ってくる

眉水 新正子 紫香 冬葉 寿子 風云児 規不風 元紀 おさむ 萬的 雀踊子 笛生 吐来 正坊 憲太郎 鬼遊 三男 月子 隆二 悦郎 千秀 章久 寿子 あいき 瑞枝 頂留子 風云児

我田引水皆に外方向かれても
一線を引いて仲良いお付合い
わたくしを置き去りにして潮が引く
昨日も今日も脇役になる眉を引く
引き潮のように座布団だけ残り
赤線を引いて一人を抹消する
小さな謀反が時どき私の袖を引く
幕引きは妻にあんじよう頼んどく
跡つぎがなくて引けない荒れた海
菩提樹はときどき母の影を引く
一線を引くと哀しいまでの秋
片意地をはって引き際見うしなう
幕引いてからの素顔についてゆく
うまい空気を引き寄せる森がある
すんなりと引いて思惑あるらしい
辞書を引くひとつ賢くなつてくる
引く手あまた難民船もやってくる
まとまらぬ思考に補助線ばかり引く
引き返す勇気が欲しい雪の山
引き金はいつでも引ける射程距離
引つ張り風になつて自分を見失う
引きつける餌にたんまり蜜を塗る
くじ引きが好きで陽気な蟻の列
引き際を飾る言葉がみつからぬ
千潮の長さへ貝がくたびれる
引くことも知つて人間幅が出来
一步引きさがつて来たら気をつける
引金を引くと地獄図絵を見る
引きがねが錆びて魅力のない男

柳影 小林英子 藤子 幸 白兎 達子 寿美 憲太郎 元紀 白兎 頂留子 おさむ 螢 庸佑 笛生 英一 絹子 武庫坊 房子 天笑 千秀 柳伸 おさむ 笛生 庸佑 天笑 右近 楓楽

いつ幕を引くかは神に委ねよう
このへんで身を引く金の話など
一步引けば風治まつて広い視野
世渡りへちよつと曲つた線も引く
引き際の幕は自分の柵で降ろす
引くときはきれいに引こう太い眉
兼題「秘密」 高杉鬼遊選
時効まであと一日の罪を抱く
マル秘情報売って儲けて誠になり
口止めをされると秘密かと思う
秘密秘密で装備をかえた自衛隊
秘密など張子の虎はもつていず
年金のくらしの夫婦にない秘密
木簡出土古代の秘密あはかれる
三途の川へ流す秘密は許される
糸ゆるめ男の秘密たしかめる
ポロツと口に出る善人の秘密
善人に秘密の話せぬことだ
良い事は探さぬ秘密探偵社
大袈裟に極秘の中にいた秘密
縁談をみんな断る娘の秘密
コスモスが枯れて悪女にある秘密
火葬場の煙となつてゆく秘密
秘密だと言えばあの女しゃべるはず
秘密ですそつと自分の夢のくじ
秘密ある女にわたし見えますか
妻の留守知らない電話ようかか
補聴器をつけると秘密よく聞こえ

三男 月子 光代 楓楽 光代 重人 柳影 天笑 冬葉 武庫坊 眉水 勝美 萬的 寿子 シマ子 美代子 射月芳 螢 白峰 悦郎 妻子 千秀 すすむ 笛生 度 美代子

「川柳塔」建立募金

ありがとございました

山川克子・細川稚代・有田實根子・今村忠美・柿花紀美女・野坂なみ・古野ひで・島崎富志子・清野こう・植山武助・辻川喜仙・小畑よし子・堀良江・中島小石・中島生々庵子息・井上柳五郎・小砂白汀・信本博子・佐野白水・寺沢みど里・上田佳秋・栗原隆・栗原富子・岸本木魚・渡部さと美・山口美穂・吉田あずき・真喜内實・遠山可住・小西無鬼・永澤裕子・山内香住・藤田頂留子・宮尾あいき・坂口公子・菅井智水庵・吉岡きみえ・小西雄々・川村映輝・川端柳子・みきわきみ・神保拓生・中原諷人・津村八重子・川柳塔鹿野みか月・上原逸・三宅保子・前出豊子・阿山美代子・武田粗粒・村上千穂(春巳)・奥谷弘朗・高田博泉・藤村重成・井上照子・一瀬福一・和田維久子・江口葉子・吉永伊三郎・堀江正朗・堀江芳子・藤岡花梢・越智一水・山田里子・北山越山・柳原秀子・三輪通彦・小林トメ子・天満三千代・岩崎瑞穂・西口忠雄・小倉アサ・天根夢草・吉岡美房・西森花村・西岡洛酔・高橋操漕・西尾美与子・瀬尾六郎太・久谷孝吉・小島蘭幸・渡邊圭坊・高橋操漕・野田宵風・富岡温子・黒田真砂・荻野鮫虎狼・北山好笑・中塚遊峰・浜本義美
(11月10日現在・前号分含めて二九五件)

少年の秘密がリング箱にある
やつとみつけた秘密が虫にくわれてた
口止のふるまい酒が口はしり

耳もとの秘密に連帯感を持つ
座ってる夫婦だろうかナンバ発
秋桜触れてはならぬ秘密もつ

秘密持ちはじめた柿が熟れてくる
ひとつ位は楽しい秘密もつてます
二つ三つ秘密つくらにや下痢をする

善人を誘うと秘密ばれやすい
酔うほどに秘密言いたくなつてくる
一つくらい夫婦にあつてもよい秘密

菊枕秋の秘密を匂わせる
萩はこぼれて私の秘密だけ残る
死にはつてから解つたしもうむない秘密

母さんに秘密の部屋はありません
鼻水を垂らして秘密守り抜く
よく喋る夫だ秘密あるのかな

どろんこになつて帰つて来た秘密
日記には鍵かけておく秋の恋

兼題「塔」

西尾

兼選

おにぎりを五重の塔の下で食べ
芸術にする泰吉に塔の位置
あつさりと訣れて塔は影をもつ

キャンパスに象牙の塔の影はなし
イデオロギーどうあろうとも忠霊塔
塔の屋根小さい秋が降る様に

積み上げた塔父の汗母の汗

美智子

藤子

あいき

絹子

岳人

幸二

度

仙吉

白漢子

典子

満津子

瑞枝

太茂津

小路

ゲン吉

おさむ

重人

智子

鬼遊

妻

池の鯉のぞいて塔の影揺れる
死してなお同じ寄る辺の塔を持ち
ふぐちようちん通天閣を見て暮らし

ねむの木に育つたまり子の愛の塔
テレバシー塔から塔を馳け巡る
幻想の中で見上げるバベルの塔

塔仰ぐお遍路さんに迷いなし
たそがれの塔で出会つた旅の僧
仏塔の翳からはを見失う

まなうらに積木くずしの塔がある
斑鳩の三塔大和は秋深む
多情多恨塔の高さに石を積む

逆風へ塔はまっすぐ生きている
塔の下ドストエフスキーの墓がある
と根性通天閣の灯に育つ

相輪に諸行無常の風からむ
ペンだこの指はわたしの塔である
古寺巡礼塔も私も秋の色

サンフランシスコで塔はたおれない
塔のある町で育つて嫁に行き
蟻の列たまには塔を見てごらん

絵心を誘う水面の塔が揺れ
秋の塔迷い雀と仲が良い
塔のある街で終りにしたい旅

てんのじ村も通天閣も過疎になり
裏道へ来ても八坂の塔が見え
水溜りまたげば塔が揺れている

歩道橋の高さで塔と対話する
塔五重朝夕や町が好き

文秋

吐来

鬼遊

寿美

荒介

達子

静歩

千秀

荒介

房子

萬的

隆二

寿枝

瑞峰

白庫坊

白洋

隆二

岳人

重人

新正子

庸佑

月子

藤子

通天閣汗の男が好きである
土門のカメラ大和の塔の心知る
塔へ登つたその日脱サラ考える

団体が帰つて塔もほつとする
棟梁と通じる言葉塔は持つ
(清記「楓楽」)

「茴香の花」欄選者交代

「茴香の花」欄の選者は、一月号掲載
分より小出智子さんから八木千代さんに
交代します。

川柳塔社

大阪文化祭川柳大会 秀句

ふる里を削る私も削られる 西 美和子

子の立場親の立場の木が揺れる 関口きよ子

肌の色超える確かな愛がある 泉谷喜代子

ジャズが突然煉瓦造りの倉庫から 宮前 秀子

目覚し時計がこのまま眠つておれという 天野 堯旦

頼みたいときの掌雷する 本多 洋子

卑弥呼の墓が何処に建つても遙かな潤 墨 作一郎

ニッポンという妖怪が潤歩する 早野 賢

ダン吉

楓楽

三男

天笑

■ ずいそう

佐渡の句碑

西 尾 栞

『柳都』四〇周年記念川柳大会の帰途、薫風さんと佐渡へ一緒することが出来た。

新潟港で佐渡行のジェットフォイルに乗りこむと、一昨夜以来、馴染みになった杏花さんと秋津さんにはったり遭って、賑やかな佐渡行となった。そしてその夜の旅館、八幡館でもまたまた一緒になった。奇しき邂逅を不思議な縁と喜びあった。

八幡館で、川柳家浜本千寿氏と会談の翌日、薫風さんも私も見残した、小木の港のタライ舟を見ることがしてタクシーに乗った。

小木の港へ行くには、村山峠という峠を越して行かぬばならない。タクシーは、その峠の頂上で止まった。そして、そこにある自然石の句碑に案内してくれた。それは、かの有名な金色夜叉の著者尾崎紅葉の句碑であった。句は

汗なんぞふいてもらうて別れけり

明治三十七年七月二十九日とあった。説明によると、小木港のごんざや、という宿にしばらく泊っていた紅葉が、お糸という妓と親しくなつて、小木を去る日、この峠まで、お糸さんに送ってもらつて、ここで別れを惜しんで作った句が、この句であった。紅葉が金色夜叉を作つたあと、少しノイローゼになつて、赤倉温泉で療養の後、こちらへ回つてきたとのことであつた。

汗という季語は入っているが、これは俳句というより川柳調だねと、薫風さんが言う。僕もそうだねと賛成して、「君なら汗なんぞ拭いてももうた位で別れないだろう。『口なんぞすつてももうて別れけり』だろう」と言う。薫風さんは「口なんぞすつてももうて戻りけり」だと言つたので、同乗の案内も運転手も大笑いになつて、俄然、車中は賑やかになつた。今はタクシーで峠から小木まで十五分もあれば下れるのだが、歩いてテクテク登つた峠までの道は、紅葉にとつても、お糸にとつても、大変だったろう。

小木の港では、タライ舟に乗っている観光客で遊園地のように、乗る順番の列が出来ていた。私は家内と二人で乗つたが、薫風さんは一人で乗つてタライ舟を漕いでいる元気に驚いた。帰り道で、ある部落に入ると、大き

川柳塔社常任理事会（11月1日）

▽高野山大霊園に建立する「川柳塔」の開眼式の次第について柳宏子氏、募金状況について鬼遊氏から報告。

▽「愛染帖」のタイトルを選者交代に伴い、一月号から「銀河系」とすることを了承。

▽新春おめでとつ会の兼題・選者を決定。

▽麻生路郎句碑を阿部野神社境内に建立するため、募金を行うことを決定。

▽課題吟「一路集」の年間最優秀者を表彰するため、「一路賞」を新設、第一回授賞を四月号で発表することを決定。

▽西尾美与子・秋元てる・山崎君子・岩崎瑞穂・岸本木魚・西口忠雄・高橋操漕の七氏の同人推薦を承認。

な草鞋を吊つてあつた。そして出口にも、また同様大きな草鞋が吊つてあつた。これは盗人除けで、こんな大きな草鞋をはく人が住んでいる村へは、おつかなくて入れないというて素通りするように、盗人よけの草鞋だと運転手は話してくれた。二時半のジェットフォイルで四十九里の波の上を渡つた。

涼風の我が眉太し佐渡ヶ島
紅葉の句だと聞いたが、すっかり覚えていない。

宝石アラカルト

吐田 公一

およそ川柳とはほど遠い宝石の話をも十月の本社句会でお話しましたところ、編集部からその要旨をまとめてほしいとのご要望がありましたので、あえて筆をとった次第です。

さて、宝石の話と言いますと、何か固苦しい肩の凝る話だと思われがちですので、少しでも宝石に興味が湧くお話をしてみたいと思います。

一般に宝石には、別名というのがあります。皆様方がよくご存知の石に、トパーズという黄色の透明な宝石があります。このトパーズという石は相当、高価な石ですが、これに似た石で別名シトリントパーズ(黄水晶)というのがあります。この石は、外見だけでは全くトパーズと同じで、宝石の鑑別がやかましく言われる以前は、本物のトパーズとして宝石店の店頭に出ていたほどです。昔の方々がお持ちになっておられたトパーズの中には、こ

のシトリントパーズがあるかも知れません。トパーズという石は、日本名黄玉と言って、鉱物学上は硬度(石の硬さ)八度の石ですが、シトリンの方は硬度七度の石英(水晶)であり、鉱物的には全く違う石の種類です。ところが、昔はそんなに鉱物学的な鑑別機関が発達していなかったで、黄色の石をみればトパーズだとして宝石商でも取り扱っていたようで、最近になって品質表示の面からも、シトリンという名称で区別するようになったのです。

このような例は沢山ありますが、もう一つ翡翠の例を挙げましょう。普通、ヒスイと言いますと、緑色の半透明な美しい宝石を意味しますが、このことから緑色の石を○○ヒスイと呼ぶようになったのです。即ち、オーストラリアヒスイ、ニュージーランドヒスイ、台湾ヒスイ等々。本当のヒスイと言われるのは、世界広しと言えども、現在では、ビルマの奥地にしか産出しないもので、それ以外のヒスイは、すべて本ヒスイではありません。ですから、前述の地名の付いたオーストラリアヒスイはメノウの一種で、あとのニュージーランド、台湾などはすべてネフライトという石なのです。因みに本ヒスイは硬玉と言われ、鉱物的には輝石という種類の石で、ネフライトは軟玉と言ひ、角閃石の種類で両者

は全く異なった石であります。従ってお値段的にも格段の開きがあるにも拘らず、昔は同じように取り扱われ、軟玉を本ヒスイとして買われた方も大勢いらっしゃいます。

私が宝石教室で教えておりました時にも、こんな話がありました。ある日、一生徒(と申しまして五十年配の婦人)が、「先生、このヒスイは香港で買って来たんですのよ。いいでしょう」と言うので見せてもらいますと、確かに半透明の緑色のきれいな石で、一見、本ヒスイに見えるような石でしたが、私にはすぐにそれが軟玉であることが分かりました。で、値段を聞いてみると、確かに本ヒスイとすれば非常に安い値段ですが、軟玉としてはむしろ日本の方が安いぐらいだったので、

です。ご本人が非常に喜んでおられたので、あえてそのまま何も申し上げずにおきました。が、人が悪いのでしょうか。

宝石には、このほか貼り合せ石や染色石、アイヤスターの出る石の話など沢山ございますが、紙面がないので割愛いたします。

▼記事訂正 11月号・柳界展望のふれあいの祭典ひょうご89川柳祭の本社同人受賞者が一人抜けていましたので追加します。

▽西宮市ふれあいの祭典実行委員会会長賞 お荷物にならないように竹を踏む 中塚遊峰



1人1句、原則として30句以内、各句会
ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月25日締切厳守。
担当・玉置重人

城北川柳会

神夏磯典子報

歳重ね生かされることお礼申し
寄り合つて長生きします夫婦柄
高原でうまい空気とうまい水
銀の鞍置いた駱駝は騙せない
八十路こえ生さる喜び顔のしわ
高原の押し花孫の宝物
伝説の少女湖畔の花になる
高原に立てば人生小さく見え
恐ろしや湖底に眠る鎧武者
滝つぼの深さへ煩悩埋めておく
励ましてくれる形見の銀時計
星の降る高原までも買いしめる
一幅の絵になる滝へ赤とんぼ
明日あると命信じて今日生さる
路まれても踏まれてもなお生き続け
生きてゆく寡婦に噂がつきまとい
たくらみの踵が折れた銀の靴
滝壺の風舞い上り舞い下り
生き残る距離保険屋に計られる

寿美礼 ぶさ子 午郎 だし 敏子 文子 満津子 きくゑ ふみ 典子 公一 史風 達近 右近 仙吉郎 静子 テルミ 倫子 白峰

精一パイ生さる証へ蟬は鳴く
素振りして生さる自分の磨きかけ
大切な余命を生さる連れがいる
高原へ小さな我執を捨ててくる
高原の夏は短し秋の風
赤信号銀杏枯れ葉が散つたあと
銀山の太鼓打つ手に惚れ直し
高原にまただけ星に近づいた
御仏も年に一度の里帰り
お隣も海の土産を持つてくる
魚ヶ滝見れば見るほど絵のような
湖の夢を砂漠の蜃気楼

川柳後楽

井上柳五郎報

酒のめば一つおぼえの黒田ぶし
古いが好き女嫁のおくれ
ぼけた振り演じて老母は丸く生き
笑顔からはほの家族が見えますね
カルガモのはの家族を街で見る
ほのぼのと風のカルテに旅ごころ
ほのぼのとまわるふたりの風ぐるま
拗ねる子が母を女に引きもどす
お爺さんと呼ばれ買物のやめにする
世の中を拗ねた窓際族の椅子
愛枯れてすねた女の独り言
一つだけすねたかひまわりよそを向き
焼酎の花瓶で拗ねている野菊
霊山に魔物が一匹棲んでいた
百歳も不可能でない食文化
安住の地で難民が欲を出し
酒愛し瓢を愛し五十年

純子 秀夫 温子 静歩 とみ子 春蘭 みさ子 春雄 久留美 登美子 輝子 閑石 九坡 美智子 玉水 清三 青銅 照路 健一 正秀 佐加恵 哲郎 柳五郎 草風 桃風 みよ子 進月

瓢箪を師に人生を勧めあげ
ひょうたんのような人生妻と僕
ひょうたんのつるで一生女に寄りかかる
ひょうたんに幸せつめて旅に出る
ひょうたん酒飲めば浮世が好きになる

川柳化粧槽

植村客遊子報

飲む人が見れば飲まない変り者
自負持とつ亡夫が選んだ私だ
孫叱る娘の声に馴れ夏休み
襖絵に囲まれ一人妻の留守
所詮は兵 散兵戦の華と散る
警官の眼つき定年後もきつい
ママの媚ポトルをキープさせている
お向いも同じカレーを炊いている
胸だけは残してほしいダイエット
定年後思いやられる趣味の無さ
罪一ツ古い日記の中に有り
一病とつき合い上手な肌のつや
帰省の娘一と足早い暮参り
終了式生命加えし集いなり
そう言えばそうかと孫にも一理あり
マニキュアの指に女の香を残す
茶袱紗へうれしいウソをたたみ込む
一張羅の目も見ずに春は行く
外孫も立派に育ち社会人
むつこうて穴子にしとく土用の丑

川柳東大阪

森下

愛論報

金吾 博友 義親 拓治 たけ志 大鷹 サワ子 輝月 葉香 礎石 紅月 岳詩 悲子 秋信 鈴代 朱玉 嘉 茂章 姫女 好花 はる子 春華 遊峰 永楽 客遊子 孤舟 美子

代官に腹を切らせて幕が下り
甘い糸たぐると代官ころげ落ち
亭主関白のやさしさも知っている
年輪を重ねやさしい顔になる
母よりも父がやさしい子の日記
孫の声とたんにやさしくなる父で
波頭昨日の嵐ケセラセラ
海荒れて日本をけする波の音
心ない風が夫婦に波立てる
山の汗女らしさを消す匂い
鼻の汗小さい嘘を聞いてやる
防波堤枕も高く明日の夢
子が知るや鉄の熱さに塩の汗
湯上りの風に汗引く青簾
自販機のビール楽しむ万歩計
ビールでは百葉の長とまで行かず
祈願こめ汗する母の百度石

サークル樟櫛

新開千代女報

公一 度 文 湖 勝 頂 柳 百 晉 滋 慶 喜 章 雅 眉 愛
秋 風 美 留 宏 合 枝 吾 啓 三 風 久 士 水 論

辛いから知らず知らずに神拝む
初心に戻って鮎を釣ることに
鯉つり男冥利というものか
島国で舶来の魚食べている
願いごとしぱりきれない初詣
神風にだまされてから無神論
敦盛の公達あわれ須磨の浦

むらくも川柳会

藤井 明朗報

電柱のとこまでいつも送る恋
月だけが明るく照らす過疎の村
カメラマン美人とらえるのがうまい

早 苗 寿美子
秀子

北風を独りで受けている電柱
明るさが家にみなぎる嫁の顔
政治家が平和を乱すもつくる
卒業へ前透明い希望もち
酔い機電柱相手に長ばなし
平和だな朝の目醒めの深呼吸
秋空の光さこみ平和です
太陽の明るさもつて子が育つ
情報に火花を散らすスパイ戦
情報に妻の方が知って居る
大雨の情報裏山たしかめる
佳い情報持つてきました大安日
掌を合わす心の中にある平和
うす明り新聞配る寒い音
電柱の蔭で口笛呼んでいる
平和です幸せですと新婚さん
婚約の華が明るく咲く皇居
おいと呼ぶ山のこだまは平和です

倉吉川柳会

渡辺

菅句報

義 幸 久 仲 島 百 千 福 峰 梅 三 幸 一 正 芳 武
良 夫 仁 子 子 代 里 雪 園 津 子 葉 朗 子 衛

混浴場明るい声が流れ来る
ボチだけに私の愚痴を知らせとく
年金に愚痴はそほと吐いてます
我が家では今も混浴しています
混浴は人に差別の無い笑顔
皿割れて隣の喧嘩幕が降り
音頭とり先ずは乾杯景気づけ
愚痴言わぬようになったら呆けて来た
お隣の工場は景気よさそうだ
大海は愚痴を平気で呑んでいる
混浴へ脳波も少し乱れそう

寿満湖 幸苑 天雀 千代子 寿朗 和枝 碧水 柳風 小鹿 秋人 雄々

佳句地十選 (前月号から)

政岡 日枝子 選

何かしてないと愚痴がこぼれそう
景気なら宿の浴衣に聞いて呉れ
夫婦です風呂で背中を流し合う
年金の暮らし景気に遠くいる
景気いい話にや黙って付いてゆく
愚痴言わずサツとのんだらサツと寝る
混浴の湯気で菩薩に化けて見せ
叱られてリンカーンの父思い出す
愚痴のまい母は仏の顔でいる
叱る子がいいるから私に朝がある
割るための皿も余分に買って置く
皿割って寒冷前線通過する
主婦の目がしつかり叱る消費税
不況でも一応メシは食っている

堂 よしえ かつみ 満春 秋女 ひろし 康志 さつき 康志 やえき やえき あけみ ゆり子 石花菜 御前 次男

いい話だけ病人にしてあげる
間をもたすキリマンジャロがほろ苦い
丸木橋の下にいっぱいある童話
コスモスもかくれん坊も消えた街
話かて生きてる少うしづかわる
風はたわむれ木々の緑を騒がせる
残り少ない旅で港に誘われる
銘水百選みんなおなじ味がする
善人の面は重いなと思う
飲み直す酒に溶けない事がある

紫香 寿美子 笑子 白洋 凡九郎 鬼遊 作二郎 蘭幸 美子 荒介

聴き上手愚痴を寝言と聞いてやる
叱られている犬が上眼で見てこざる

西宮北口川柳会

松本

一郎報

まだ青い柿に触るるも故里よ
弁当が重くて困る齡となる
美人寡婦老舗を守る紺がすり
政治漫画今朝のお通じさわかだ
美人だと定評があり売れ残る
源氏物語も漫画化されたいあわれ
好奇心危ない路地を子が抜ける
凡妻でビールの味が旨い宵
柿色つてお伽噺が始まりぬ
老人の食養生に柿ひかえ
影武者が前へ出たがるので困る
アイデアを褒められ昇給見送られ
妻は許してくれたのに締め出され
一筆の漫画のような夫婦なり
サザエさんだと思つ一日暮れて行く
合戦の火種となった柿一つ
かあちゃんを今も美人と思つてる

柿熟れて傷もわたしも旅に出る
こんな平和で良いものか国境
目の高さ変えて漫画になる暮らし
美人薄命私長寿を保障され
本妻の方が美人という噂
父の日の父は漫画の顔になる
点滴の爪が伸びてのに気付き
ジャングルを燃やしてツケの来る地球
一人住む母の夢みて電話する
四コマの漫画で喧嘩終らせる
ドラエモンで口調で話す子の世界
柿たわわ出稼ぎの父帰る頃
地図にない道ばかり選る子が不安
税法も漫画でわかるよき時代
北京百日疑いもなき秋の天
向こう岸揺れて渡れぬ不安感
なに不足ないが名前をまだ呼ばず
外堀がだんだん浅くなつてくる
一服の清涼剤です時事漫画
高いがマニキュアしてからの不安
揚げ足を取つて学歴仄めかす
柿熟れて郷愁さらに深くなる
潮時を失いました娘の不安
束ね髪健康美人でとおしてる
漫画字が義理人情を遠くする
降車ボタン誰か押すまで待つて
誘われて若葉マークに乗る不安

独歩
苦句
正一
正一
柳伸
宣代
光代
芳子
萬子
夜船
静子
はつ絵
江美
みつ子
風云児
香子
鬼遊
トミエ
白浜子
園芳子
英子
喜代治
哲郎
きよ子
柳右子
国公
杜的
正坊

三幸川柳教室

桜井

千秀報

どのボタン押しても世辞の出る男
お世辞など通さぬ父の老眼鏡
共白髪お世辞忘れぬ距離にいる
仲人は帰りに猫も褒めたいゆき
孫を抱きただそれだけの父の世辞
三文判別居の理由知つて
別居中馴染みになったほっかほか
ジャンボくじ当たればすぐに別居する
別居宣言妻は二階で寝ると言う
釘かけ違つてからの別世帯
摺理とも思ひ別居を受けとめる
別居先不倫のように妻がくる

好笑
和子
孝子
桂香
保州
高夫
親路
みね
朱夏
鉄治

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

揺り椅子の余生は独り夜に泣く
真髓をとらえぬままの懐手
始発ベル急げど慌てぬ六十路旅
たそがれて終駅までの刻を読む
天高く多弁諷める文が来る
長雨にいつか茸も顔を出す
雑魚が集まる仏陀のような広い胸
鍵かけていても次第に残る窓
刻を経てのも次第に薄れゆく
穂芒においでおいでの秋がくる
二次会で幹事の役を捨てて飲み
影法師同じ歩調でついでくる
風船の糸を離れて天無限
自信過剰ウエストバックの一人旅

高明
實竜
タミ
四郎
旭恒
虹汀
ふさ子
ちよ
紀久
喜久夫
治幸
義美
正敏

川柳塔わかやま

牛尾

緑良報

突き破る壁は私を拒まない

アサ

福耳でよいことばかり知りたがり
 福耳に期待をかける夫婦著
 お日柄の福茶を囲む笑い声
 福耳がいつも財布の底を突き
 待望の福がお腹を蹴っている
 よろこびの福から千の鈴が鳴る
 昔むかし筒袖洩で光らした
 封筒の裏は男の名を借りる
 竹筒の酒に田楽木の芽和え
 竹筒のうなぎ可愛い顔を見せ
 日々好日笑い袋に詰めてある
 宅急便詰める此の手が娘へつなく
 詰め込んだ知識が滲む燻し銀
 追い詰めた積り抜け穴開いていた
 詰将棋親爺に花をもたせてる
 核心は笑い袋に詰めておく
 腸詰の料理に嫁の心意気
 いつも誰かに突っかかっている気はせぬか
 天を突く拳 闘志をむきだしに
 突き当たるまでは気付かぬ父の愛
 雨風は突いても走る恋は闇
 剣先の鋭い突きに鞘気がある
 突きあげてくる哀しさよ海の蒼
 的を突く友の意見が胸を打つ
 弱点を突いて蜜柑を色付かす
 急所外して突くのも男の情かも
 突き放す親の情けが汲みとれず
 したたかに生きて天突く杉木立

川柳はまでら

井上

喜醉報

桂香 稚代 豊太 信子 恭子 好笑 三男 正博 寿子 愿 忠雄 信秋 千寿子 克子 凡太 照子 美智子 静代 紫香 英子 忠 狸村 公子 武治 輝子 萬的 柳宏子 登志代

手をたたく気分になれぬ義理の酒
 飼い夫も気分次第で横を向き
 秋の虫気分さわやか自己主張
 だまされていたい気分が高い酒
 気分屋で売れてる親爺いる町会
 嫁に出し張った気分が座り込む
 気まぐれな気分で風船をそらへ逃げ
 忘却の風が素肌へ気分よく
 ストレスを落しいで湯で良い気分
 妥協する気分で結婚式の父

川柳塔鹿野みか月川柳会 土橋

八重子 八重子 小鹿 智恵子 義和 次男 静生 公乃 みさ子 蘭正子 明美 菩句 大漁 富恵 盛桜 孔美子

晴れた日も留守番の身は肌寒い
 維木林あしたを意識して芽ぐむ
 風呂上り月夜が肌を刺してくる
 茶柱に今日の返事を信じきる
 神様の前でほんとの札を言う
 デートの日少し派手目の服を選ぶ
 くらい夜をチンチロリンに導かれ
 あくせくと働く素肌まぶすぎ
 結局は茶がらのように老いてゆく
 生ぬるいお茶で別れを演じきる
 姑さんと一緒に飲む茶おいしくて
 ログハウスの樹の肌をずっと撫でている
 通知簿を隠し見る子の眼はうつろ
 再会の涙乳房の枯れた日を
 ゆっくりと話す言葉に実がある
 十三夜あうたかたの月めぐる
 不機嫌な社長へ秘書が輪をかける
 夜の帷に包みきれぬ絵の中の海
 原っぱに寝転び雲とデートする
 火と契り水と睦みて和を析る
 つまずいたのは桃色の肌のせい
 泣き場所も秘書が探してきてくれる
 不断着のままでデートに誘われる
 父祖の地へ真つ赤の意識ひがん花

川柳塔鹿野みか月 前月分 土橋

星ふたつ逢瀬しずかな夜のしじま
 また一つふるさとの友星になる
 満天の星にゆだねる人生譜
 ※前月分が3句もれていました。

喜与志 隆風 百合子 和子 きみ子 芙美 汲香 かつ乃 くに子 三千代 早苗 瑞枝 公弘 野草 幸枝 幸代 由多香 荒介 石花菜 美つ千 完司 千代 螢 諷人 螢報 八重子 和子 三千代

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

玉杯にさくらの吹雪散りそめる
杯を重ねて明日を信じよう
金盃で集めた金もゴミの中
杯の中に彼の顔が浮かんでる
杯に入れて飲み干す大文字
過去乗せて同期の桜酌み交わす
華やかに杯交わしきあスタート
乾杯はビールの泡の消えぬうち
心臓を狙う杯ならいらぬ
杯を重ね美学論つきぬ
失った時間に杯が乾く
譲るまで磨き続けるギヤマンの杯
杯でえにしの糸の切れるまで
杯を受けて器量を読まれたり
杯がふれる相聞歌がゆれる
杯なみなみこで和解をしておこう
杯をなめて人間まだ止めぬ
一对の金杯を受け野にくだる
杯が国を動かす話する
仲人として尽きぬ冥利の祝盃よ

大原川柳社

小林

妻子報

親の汗知らず子供の使い捨て
稚魚遊ぶ母なる川は濁されぬ
汚染した河は文化のツケを溜め
ほんのりと乳の香残し孫は去に
秋の彩夕陽が過疎の絵を決める
秋の味覚いっばい詰めて宅急便
赤トンボ老母の心もつたえてよ

保子 千春 寿々子 八重子 正子 玲子 朗子 恵子 亜弥 田鶴 荒介 登栄 ゆき より子 千代 日枝子 やえ てい子 富美子 瑞枝

ボンヤリとしてはおれない娘が二人
綱引きの前に進めば負けになる
振り向けばまだ立ちつくす母います
歯車の狂いは見せぬ父の腕
丸い灯を抱いて渚の中にいる
スタートは皆一列であった筈
あの人の噂小耳にお茶を汲み
母の海胸の濁りを澄ませくれ
マドンナの時代チョッピリ気をはいて
保護色にとっふりつかり住んでいる
口説かれて酒の味まで見失う
ローカル線古里近し国訛り

岩美川柳会

羽津川公乃報

真実を軽い頭で考える
昇進の内示ハンドル軽くなる
仁丹を噛むと無口が軽くなる
朝の膳軽いスタミナ料理盛る
波風の立つのが見えて輪を抜ける
人よりも抜け出て厳しい風に合う
足音をひそめて罪を消している
ジंकスに玄関右の足で出る
大の日にジंकス知らず腹帯しめる
ぬるま湯に慣れてジंकス破れない
昼の月みたジंकスに騙されぬ

京都塔の会

松川

杜的報

お呪いを書けば解けますか
一歩家を出ると仲の良い夫婦
お月さん出ると出まいと飲み仲間
乗り越えた試練にやっと花ひらき

美智子 関芳子 杜的 よ志子

美代子 正己 たけよ 悦子 朝代 智泉 宮辰 辰子 みづえ あすなろ 玉恵 妻

照女 美恵子 大漁 民子 美代子 芳江 忠良 公乃 幸枝 由多香 螢

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

人生は未知数だから生きられる
帰省して角のテール丸くなり
未知数に私の命揺すぶられ
アラアラ盆のだんごに角がある

歳栄 民子 鈴江 恵美子

老母の練るそば懐しい里帰り
主流派の中をすいすい泳ぐ雑魚
鍛練はその場限りの現代っ子
どことなく練れたお人のおだやかさ
練り直しても予算に多い無駄
仲間からはずされ重い靴をなく
仲よりの美代ちゃんといくランドセル
仲店で茶請けの土産寺詣り
戦略を練るとき花野暮れかかる
キーホルダー不倫の仲を知っている
谷崎の世界華麗な夜夜長
赤坂の酒で政治を練っていた
練りあげて焼かれていのち貰う壺
すいすいと秋風にのる霊柩車
ふと目覚め妻の寝息に安堵する
ペランタの独りわらしも銀河系
ストレッチがたまっているらしいよく食べる
風の便りに二の足を踏んでいる
すいすいといかぬところがおもしろい
すいすいと秋連れて来たあかトンボ
ひねり飴亡母は臉にいつもいる
策練っている間に逃げた青い鳥
土練って練って茶碗へ夢があり
育ちざかり子供は夏と仲がよい
手を握るだけの仲でも噂する

花代子 佳秋 京童 栄 白溪子 福子 正坊 圭坊 年代 英子 武庫坊 貝女 河芳子 和友 諷云児 はつ絵 美穂 水客 三求 倫子 磔 だだし 飛鳥 求芽 紫香

未知数へかけずり回るのも楽し
未知数に追われて走る選挙カー
未知数を買ったんですよと姑笑う
人ごみをはなれ故里盆の風
未知数が私を大きくしてくれる
こんな時自問自答の茶をすすり
仏壇のない食卓に盆だんご
年金を貯めて未知数模索する
果てしない円周率はパイにされ

川柳塔とつとり

岩原 喬水報

人道を盾に難民なだれこみ
觀光に奥の細道呼び戻し
一筋の道停年て向きを変え
好きな道歩いて疲れ感じない
逃げ道を探して世間狭くする
道路鏡人の心も映してる

飲み遊びした金あれば家が建ち
パン食に瑞穂の国の田が遊ぶ
お遊びの付けが大臣つまりかせ
良く遊び良く遊んでも職がある
ばけ防止孫のおもちやでよく遊ぶ
一日の疲れを癒やす湯があふれ
しまい風呂流して今日もやつと済み
陳情の名の裏にあるトルコ風呂
お湯沸いていますと娘それつきり
湯浴みして女の業をまた羽織る
しまい風呂少ないぬるい湯に慣れる

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

母の見栄満たすピアノが好きでない
野草

かつ子
ヒデ子
好栄
はるみ
聖子
芳枝
博利
清泉
白汀

友夫
秀和
呼風
旋風
山人
侑里
新風
一止
俊路
主一郎
一枝
多可志
喬水
帆雀
粗粒
艶子
由多香

舟に乗る見栄の絆纏ぬいで乗る
あいさつをするにも見栄にひっかかる
一言で断りきれぬ見栄を持ち
子に職をちゃんと言わない母の見栄
見栄張った帯の家紋が重たそう
蛙の子が蛙になつただけの見栄
見栄っぱりだらうかいと背伸びする
見栄張って走りつづけただけの過去
見栄張った交際でまだ親しめぬ
見栄を張る女はこわい嘘を言う
見栄張った分だけ爪に火をともし
見栄張ってみても蛙の子は蛙
外聞も見栄を捨てても嫁がない
赴任地で早くも女見栄を張る
見栄張って次に着てゆくものがない
お見舞の果物籠に見栄を盛る
引越へ派手に着替える母の見栄
見栄張った屋根がローンで軋みだす
他人のは見栄でも自分の甲斐性
見栄坊のツケさら金を取り立てる
身の程を知らずふるまう見栄張り
姑の見栄のうしろで嫁が泣き
見栄張った分だけ心おもくなる
見栄っぱり表ばかりで裏がない
見栄捨てて背中のもともよく眠る
水玉のネクタイで見栄張つてみる
親の見栄ない袖振つて嫁がせる
見栄なんか若い時さと老いている

川柳藤井寺

高田美代子報

天の邪鬼痛さ辛さを訴えず
宗一

とみお
螢
邦俊
善政
小鹿
雀踊子
きみ子
早苗
温子
いわず
紫泉
幸枝
幸妻
獏子
典子
白峰
佳子
節子
柳風
節枝
みほ
喬水
梅朗
孝恵
静歩
勝見
玲子
弘朗

辛いとは言わぬ息子のアルバイト
二次会へ目と目が誘うタイミン
誘われて夢中になつた絵の心
ストレスに悪魔が誘うクモの糸
誘惑に小さな良心つろたえる
流れ星誘う言葉を考える
オーロラが誘う地の果て櫃駆ける
例のこと言えは通じる飲み仲間
本命の隣を彼はます誘い
誘い球打者の心理をかきまぜる
手の届くところ禁断の実が赤い
ドラム缶虫を聞きつつ野戦風呂
公園の美化に逆らう缶の山
父さんの甘えすぎて缶ビール
缶詰りの缶にいつの顔を描く
缶詰のパンティーもあるホワイトデー
缶詰を握りつぶした負け惜しみ
缶詰を投げ返したいあの車
缶蹴りの子の夢天に飛んで行く
喰べられる缶が出来たらいだろに
缶詰を積んでヨソロ帆を揚げる
缶詰にしたいハートが一つある
缶詰を開けると四季が狂い出す
缶詰につめて埋めたい古い傷
風刺画のネタは国会から貰う
消費税鬼の金棒細くする
立ち呑みの季節も近し梅田地下
二人で見た景色へ切符同封す

志洋
信子
三郎
寿美子
敦子
与呂志
彩
吸江
婦美枝
修六
繁治
作秀
末一
きよし
たかし
伴子
治子
昭代
政美
須一
美代子
正枝
比呂志
淳一
紅月
祐二
和子

川柳たけはら

森井 著居報

ボケツトにメモ帳があるやすらぎよ こうじ

もくせい川柳会

田中 正坊報

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

すず虫は秋だ秋だとないている

小四史 子

生きている証戦の日が偷し

菁居 子

みんな寝てから色紙一枚書いてみる

蘭幸 子

玄関の戸ぐらい軽うしておこう

静水 子

名案へ鉛筆の芯折れている

比呂子 子

朝毎の山に生き抜き糧もらう

栄恵 子

学歴のないのが強み生きて行く

一枝 子

念仏は不思議私を落ち着かせ

清水 子

カレーのお隣孫が来たらしい

ふさ枝 子

過ぎし日のロマンを語る絵ロウソク

愛子 子

付き合いで温泉に行く夏の旅

喜美子 子

うぬぼれを捨てて自力が見えて来る

喜久恵 子

黙とうをして八月の暦はぐ

浪子 子

向うばかりむいて吹いてるラッパ草

麻代 子

と言っても一人は淋し夕すだれ

俊夫 子

紙芝居園児の胸に夢運ぶ

ヤスエ 子

忍一字耐えてこの家の主婦となり

節夫 子

枕並べてそれぞれ夢みるので

節夫 子

九月の風が暴走族の真似をする

節夫 子

童謡の二番の歌詞を風に聞く

節夫 子

お父さんと乾杯ビール泡がとぶ

房子 子

きれいな夢見ている丸木橋の花

笑子 子

ほんとうのところはどう聞いている

伸子 子

以下同文なので電文考える

静風 子

それからの二人に檻が広がる

静風 子

死神を払いつつ夜が長い

新造 子

いい事を一つ話して満ち足りる

貞子 子

いつしか虫が羽根を広げる恐い日よ

静月 子

風化した村に埋れた文化財

蝸牛 子

平成がいつか古典の一頁

田英子

大昔の鼠のしみがあがる古典

しげお

古典読み飽きるとどこでキュンと百舌の声

きく子

形見分け古典模様の袋帯

富子

神妙に五百羅漢は藪の中

杜的

竹の皮鱗すし包み祭つ竹の下

圭坊

貴船菊時雨にゆるる竹のつ

登代子

竹細工嫁と選つる田舎町

よし子

竹人形の由来乙女の恋の悲話

武庫坊

石庭の竹のリズムやししおどし

慶子

竹棹にすべて任せる川下り

福一

竹トシボ一人で遊ぶことに馴れ

白溪子

竹トシボ空の高さを知っている

正坊

竹トシボ六郎の絵にうたがある

萬的

一輪車の子供が急ぐ秋祭り

明吉

奥比叙ドライブのあと邪魔払う

明吉

新聞の隅で小さく尋ねる

明光

セーターが縮んでいると言う娘

博史

ひとり住む父に電話をかける秋

つえ子

遮断機へ心なごます金木犀

とく子

ドラフトの話に変わる釣り仲間

紫香

千羽鶴願いを抱いたまま翔ぶか

露児

美人だが兇悪犯となっている

追児

どれ着て行こう八十になっても女

英女

二次会は出世がしがら引きつける

登志美

門口で昨夜の試合読む新聞

寿美子

今日だけは臨時停車をした祭り

紫香

ケンカ祭りブラウ管を走り抜く

洋子

新しい母と祭りの灯にとける

礫

快調に飛ばすと足許すくわれる

武庫坊

快調なころは忘れていた故郷

園歩

何ことも快調に済み今日華燭

栄

快調な空気が何時も流される

歌子

一言の情けが沁みる都が砂漠

英子

都市砂漠有情無情の風が吹く

諷云児

水子地蔵母の情けの風車

芳子

涙腺にささったままの深なきけ

天樹

ふつつと母の情けが煮えつまる

敬人

友達の家泊まると電話来る

静夢

草双紙の中で女が出来上がる

伊三郎

丸めこんだ女に又手を咬まれ

保蔵

訓示する小きい社長威張ってる

正舟

葉の中にカマキリ親子が住んでいる

石舟

老いらくの恋までつらぬレントゲン

正一

花売りという長話 妻の忌に

正坊

メルヘンの話が好きな青りんご

萬的

よく喋るママを園児が見上げてる

作郎

ランブが点るランブも影も曲線に

杜的

カレンター八十歳にもあるプラン

年代

快調を人に告げないことにする

紫香

尼崎尾浜川柳会

春城武庫坊報

奇しき縁句碑を訪ねる旅枕

澄子

エスカレーほしい弓削の句碑巡る

六浦

取りまかれカッパ少々てれてる

江美

宅配便松茸だけが入れてない
そして秋旅立ちの足軽くなる
地下足袋が濡れてる秋のコップ酒
始発駅秋風そつと置いてくる

そして秋サンマと語るコップ酒
寅さんと一年振りの秋祭
クルス錆び南蛮寺に秋が来る
コスモスのゆらいて秋の風を呼ぶ

駅まで歩いてみよう秋日和
彼岸花燃える道あり鐘を聞く
そして秋影も思いが深くなる
虫といて祭太鼓を遠く聞く

句碑からの声なき声に胸を打つ
敗戦の歴史を綴る古日記
バスガイド歴史見ていたように言つ
もう二度と歴史にしない銃と剣

嫁が来て我が家の歴史塗り変える
天安門歴史はまたも蛇行する
ふり向けば白い歴史があるばかり
歴史にはのらぬ夫婦の五十年

栄光の歴史の裏に庶民の血
南大阪川柳会
中川 滋雀報

少年の意気過ちは許される
意気がある内に潮時考える
意気込んでいるのは仲人夫婦だけ
意気消沈仏の花を変えてみる

意気まぐろ若さが悪い世代です
意気消沈自問自答で花を買い
サロンパス貼ってはいるが意気壯ん
切札にならない竹光差している

弘治 和友 光重 佳秋 しげお 正坊 すすみ 紫香 美智子 奇童 夢之助 義嗣 白漢子 十四郎 風云児 敏之 定人 昌子 武庫坊

切札を持つていのでさからわぬ
泣き落としと言う切札を持つてい
切札はまだまだ時期を待つ策士
切札の泪はまだまだ効き目あり

切札が拳の中で汗をかく
与野党に切札がある秋の陣
大きな人になれと仕向けている
試練 氣付いたら仕向けた枝が出た裏目
ここ一番仕向けた枝に乗って居た私

敬老日父母に仕えと仕向けられ
スイッチオン仕向けた朝の独楽回る
知人かまた来て拝むるしやな仏
知人かまた来てと限らない

知った人は一人もいない人の波
お茶いちど飲んだ程度の知人です
嫁がせるためだてたの荷の重さ
漬物と重荷に耐えて味が出る

荷物にはならないように生きようネ
定年に荷ほどきをした身の軽さ
母だから一番重い荷を選ぶ
慰謝料という切札を出してくる

川柳塔まつえ 恒松 叮紅報

雀踊子 文秋 覚然坊 トミ子 寿美 岩信 楓楽 頂留子 勝美 喜風 喜子 善信 柳宏子 智子 新造 滋雀 章久 凡九郎 憲太郎 和子 慶三

多賀子 清志 巡歩 妻美子 寿美子 操子 満江

今にして誰も恨まぬ空財布
豊作の予想外れて空財布
ホステスが財布の底を読んでいた
年金を詰めた財布のフルムーン

重いけど貴禄のない小銭入れ
財布には入れ切れないリクルート
心まで誤算したのか病んでいる
キリギリス秋の誤算は考えぬ

家計簿も嬉しい誤算なら許す
愛一つ誤算の刃受けている
誤算で選挙戦のコンピュター
塞翁が馬風の誤算は考えぬ

誤算とはチンパンジーが鍵を開け
いつまでも憧れている月見草
小賢い人の背中に憧れる
毒草と知らずに蝶が憧れる

憧れて逃げた女の置手紙
憧れの対話が出来た老いの坂
日の沈む向こうの山に憧れる
玄関を菊で飾った秋祭り

与作みな老いて過疎地の秋祭り
秋祭り松茸やつと口に入り
ふるさとが恋しくなった秋祭り
松茸の匂いを刻む秋祭り

秋祭り今年も子ども帰らない
飼ひ馴れた猫で言葉が通じそう
善人と知って捨て猫寄ってくる
減塩もさせて女が猫と住む

美人が猫を抱いたらさまになる
うちの猫無断外泊多くなり
岸和田川柳会 植山 武助報

喜久子 みのる 浪速子 こう けい助 月子

友子 小鹿 雄々 長三 日出子 代仕男 房子 煩悩児 雪子 静恵 与根一 静江 文子 登美也 弘円 舞吉 きみえ 青湖 鶴丸 叮紅

きみ子 友子 小鹿 雄々 長三 日出子 代仕男 房子 煩悩児 雪子 静恵 与根一 静江 文子 登美也 弘円 舞吉 きみえ 青湖 鶴丸 叮紅

きみ子 友子 小鹿 雄々 長三 日出子 代仕男 房子 煩悩児 雪子 静恵 与根一 静江 文子 登美也 弘円 舞吉 きみえ 青湖 鶴丸 叮紅

きみ子 友子 小鹿 雄々 長三 日出子 代仕男 房子 煩悩児 雪子 静恵 与根一 静江 文子 登美也 弘円 舞吉 きみえ 青湖 鶴丸 叮紅

督促状一度二度なら無視してる
記憶では一度は来た気するのだが
もう一度確かめて押す保証印
大空を一度飛びたいアヒルの子
秋風に空の財布をのぞかれる
年金の暮らしに合った財布買った
弁解をしない男を信じよう
自分史に弁解ばかり書いてる
弁解はすまい涙が落ちるから
弁解を上司は温い目で押さへ
少年の目に弁解が棲んでいる

高槻川柳サークル卯の花

河瀬芳子報

迂闊でした何時でも母が頭下げ
迂闊さを笑っておれぬ認め印
誓官の家へしのんで来た迂闊
根性の無さを唾うぬ影法師
根性があるといわれて手が抜けず
根性が指の先まで弓を引く
根性でビエロは鼻を丸くする
根性を男結びにしておこう
根性や笑いの裏には泣きがある
持てるだけ担い朝市荷を上げ
重責を担ってからの失語症
ご婦人の期待を担うおタカさん
裏街を金魚担いで揺れている
重責と嫉妬を担う回り椅子
未練を担うそんな女になりました
目につかぬタラップおる未決囚
若さとはいいな担える肩がある

丹吉 希久志 狸村 甘平 勝晴 通彦 ひで 一弥 富志子 天笑 初太郎 房子 よ志子 紫香 恵美子 年代 稲秋 佳お 美智子 白溪子 静江 武庫坊 諷云児 磯 暢子 和友

タラップの別れを背なで泣いている
タラップをのぼる別れはスマートに
タラップを降りても誰もついてこず
ビエロみたいに首相タラップ降りて来る
うらめしい敬老会の招待状
気負わずに行こう余生のマイペース
ツインビル萩の名月邪魔にする
巨人勝っておかしくもないスポーツ欄
怒らせぬ程度に憎いことも言い
自分大好き身勝手に出来てます
百歳の秘話を聞けば笑うだけ
スーパリーのチラシで決めるお献立て
母ひとり監回しに慣れてくる
万巻の蔵書があつて惚けている
マッチでつける煙草余裕のあるかたち
松茸が一切れ付いた法事膳
象使い時折象に狙われる
道作のための道路を掘っている

翠洋会(長弓寺知行)

中西兼治郎報

マンションにテレビの画像奪われる
裏表行方別れて泣く茶室
群れ雁の内に一羽の奴雁あり
昔むかしの悲話が聞える長弓寺
船足の早さ夕陽を追いかける
お初天神戦後が消えた常夜燈
竹の精茶室に変身茶と遊ぶ
無駄なものもお造りになる造化神
出会いくつ茶室の先にあつたまり
ここの鳥初孫運んでくれました
渡り鳥海の向うに何を見る

正志 正子 栄子 萬的 みさお 春風 半蔵門 英子 凡九郎 杜的 栄 文子 正坊 豊次 圭坊 作二郎 兼治郎 恭昌 恭昌 佳秋 正雄 英一 良江 宏子 綾子 光子

決めかねる胸に鋭く百舌の声
伝統の茶室の里も人不足
人の世のくらしを鳥の目が笑う

駒つなぎ川柳会

里

小路報

ストレスはいささかもない日焼け顔
日焼けした毛ずねが踊る星月夜
ボケットの蟬が鳴いている日焼けの子
土用干し母の形見が喋り出す
しし干して近所へ恥すかしい
孤老の干す物は下着の外はなし
無事な声聞いたトタンに叱る母
家に居ることが無事とは限らない
ふる里は無事です真つ赤な烏瓜
悪憎む勇氣非力を省みず
負けてやる事も勇氣の一つだろう
返品に行くのはいつもお母さん
キャッツフードたまには鼠欲しくなる
手の届く筈やないから欲しまんネ
国策を案山子に笑う干拓地
甲羅干すギヤル青春をむき出しに
無事な日が続いて羽が萎えてくる
無事祈る母にうなずく地蔵さま
水たまり避けて歩いている勇氣
勇氣ある男強がりなど言わぬ
良い事をするにもやはり力ある勇氣
物欲しい顔は見せないカツムリ
やさしさが欲しい兎の目が赤い
日焼けして女騙せぬ顔になり
干草を敷けば少女は陽に匂う
干しイカのはがきで誘う海の宿

みつ子 登志実 鬼遊 恒明 章久 素灯 悟郎 眉水 覚然坊 頂留子 冬葉 萬的 射月芳 雀踊子 凡子 金太郎 勝美 比沙胡 楓一 重人 柳宏子 庸佑 千代三 美幸 翠公 章 壯之助

難民船みな無事に着きしかめ面
勇氣ある男恐さも知つてゐる
勇氣ある行動保険掛けてある
一雨が欲しい畑の夏野菜

川柳大阪

中原比呂志報

インスタント朝のスタート切るコーヒー
正之 年金の行方気にする市場籠
鉄心 風車恨み忘れることにする
重人 行間を埋める一行嘘を入れ
与呂志 檜山に何時か行くだろひとり旅
洛 借りのある暮しが張りでいる達者
雅果 わが道を行く耳栓をしつかりと
本藤棒 行変えてやつと本音で書く手紙
希久志 行先は第一秘書が知つてゐる
一歩 切れたのじやないよホント切られたの
美津留 欧米をまね年金の労組でき
凡九郎 退社ベル窓際族の行終る
笑風 便利さにカードを恨む衝動買い
亮太 酌み交わす猪口に友情聞いてみる
柳弘 織物になるとは知らず糸を吐き
しげお 織物に秘めた日本の美しさ
天平 大臣の椅子とりゲーム納まった
哲流 ああ無情善意の夢がもどらない
太志 夢に見た新車が僕の宝物
一志 初夢の大金持ちが逆になり
鈍泉 宝くじ夢ははかないシャボン玉
比呂志 地球病む病源体はヒトである

川柳ねやがわ

高田 博泉報

度 文秋 浩一郎 笛生

正之 金太 鉄心 重人 与呂志 洛 雅果 本藤棒 希久志 一歩 美津留 凡九郎 笑風 亮太 柳弘 しげお 天平 司 哲流 太志 一志 鈍泉 比呂志

青春を燃やした妻で裏切れぬ
竹藪に二億余円を置く手品
紅もつけず来る相談の本気らし
本日は晴天友と輪をつくる
ストレスのない単身を怪しまれ
老いらくの恋を勘勘聴かされる
相談の出来ぬ愛あり鬼あざみ
実力を秘めた控え目とは知らず
父さんの手品みんなに飽くばる
マジシャンの引き立て役につかわれる
日めくりの妻の小さな嘘計す
ふたりならどうにか行ける肝だめし
水道の水へストレス散らしてる
父の日へフリータイムのプレゼント
嫁ふたりそれぞれ違う風あたり
慰める役に涙が邪魔をする
手品師の指は閻魔に切られます
岩一つふたりで登る御嶽山
ストレスがたまるとこぶら返りする
まず姑に相談せよと里の親
ストレスを晴らす馴染みの縄のれん
マジックの場手の上で拍手聞き
何もかも嫁に相談して平和
ストレスのたまつた孫はよく叫び
休日の山にストレス置いてくる
踏切りへ手をつなぎ合う古い二人
雌雄鑑別手品のような指さばき
猫を飼う相談大に邪魔される
ストレスが大食漢にしてしまひ
一人芝居だったとコンパクト閉じる

速水 あやめ 光子 冬葉 まさお シマ子 庸佑 度 時弘 良三 かすみ 菜月 藍子 なつめ 雅文 権太 三郎 春子 波留吉 白水 紀代 玲子 節子 時子 一子 一笑 増造 吉之助

吉之助 増造 一笑 時子 節子 玲子 紀代 白水 波留吉 春子 三郎 権太 雅文 藍子 菜月 良三 時弘 庸佑 シマ子 まさお 冬葉 光子 速水

川柳泉尾

吉川

寿美報

呪文唱える登山ナイフを買う日迄
巣作りの上手なお嫁さんを待つ
それからは妻の独壇場になる
緋毛せんへ女性脱皮ところさず
世直しは女性に任せとたかさん
たかが女性されど女性には恐いもの
イニシアチブ男が少し焦り出す
この暑さ猫が尻尾で返事する
尾鰭いっぱいつけて帰ってきた話
野に生れ野に消えてゆく枯尾花
機は熟し神も仏も味方する
腹郁と個性が熟す五周年
火や水をくぐり抜けて得た円熟味
垣根こえ不仲知らずに熟柿落ち
秋刀魚の尾三パーセントにもの申す
真実に生きて夫婦共熟し
逝きはつたそれから出て来る艶話
同窓会それから愛が芽生え出し
それからの与作は電車に乗っている
それからの日記は白いままである
それからの余韻残して幕になる
入選はみんなが望むみな天狗
高望みしなかつたのに独り居る
念ずればおみくじ優し吉と出る
一握の望みを抱いた星の砂
旅に出る絵はがきの富士望むべく
成功を望み何かを忘れかけ
もつ少しさづくばらんに話したい
さらさらと望みこぼれて寝るとする

藻介 智子 景子 シメ子 マリ子 途子 三千代 伴子 淑子 美代子 克行 満洲子 靖子 敦子 和子 白水 葉子 弘子 昭子 はつ子 義一 洋子 トミ子 あさこ 美津子 シマ子 寿美子 美子

尾を広げみごとくじやくは見栄をはる

川柳はびきの

塩満

美南子

見回して反対の手を低く挙げ

青年のように五十路のマーメイド

平成元年とても元氣な女郎花

はずむ手に留守番電話そつけない

信州の星空仰ぐ露天風呂

夜逃げする折もなかった二人老い

いさかいのあと空洞を持て余し

手と足がからみ洗濯秋深し

伝言板丸い字ばかり遊んでる

背中の子起こして去った選挙カー

弥次喜多の夫婦もいつかは一人旅

肩組んで女と男傘一つ

キャンパスで実を結ばせた恋の花

十五夜は雨のいぬ間に顔を出す

美容院帰りは黒い髪で出る

名月が恨みに思う長い雨

珈琲がにがい話はよしまししょう

次の世も予約している二人です

豊年と知つてる雀がはたつて

定退で粗大ゴミへの仲間入り

書状箱昔に出会ふ妻籠宿

有頂天足を取られた水溜り

方言の違ふ新婚口喧嘩

指人形五人家族で遊んでる

嘘一つかくす乳房が痛み出す

遠い日の指切り崩れ鱗雲

中の島二人ずつ見る丸い月

足の指何時まで靴に馴らされる

影がまた一つになった月明り

朝シャンの黒髪が乗る朝の駅

川柳高知

川竹

松風報

秒針に命あづけた日の徒食

格子戸をたたく風にも秋の彩

太陽の有り難き知る長い雨

太陽が雲の切れ目で笑いかけ

太陽の恵み弾んでいる布団

朝の陽へ方位確かむ宿浴衣

空想の中で契りが深くなる

空想のままで終ったハネムーン

空想で見てはならない花が見え

空想の中で美人を弄び

科学誌で空想怖い未来図

不器用な妻で指先のカットパン

穂田

豊作報

見栄張って上げ底夫婦笑われる

どじばかり踏む母さんで見ておれぬ

見る程に手入れの違ひ作の出来

天国へ行く矢印が見当らぬ

見る力だけが頼りで世に生きる

耳しいも見える楽しで難い難さ

見るだけで声の入らぬ難聴者

見る程の品ではないかと自慢顔

聴友と口を見ながら話す

楯振るう兄に亡夫の姿見る

我も母見るに忍びぬ記事に泣く

月末は会報来たかとポスト見る

遠くから誰か見えねとお辞儀する

吐来

敏

竹萌

千恵子

一求

春童

和広

菊野

功

節子

朱坊

松風

節子

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

松風

二日酔い妻を病氣にして休み

打ち込める職あり病氣退散

病院と御縁のうすい粗食箸

おっぱい川柳会

松村迷観子報

待っていた車話を積みこし

偏見を捨てれば丸い輪が出来る

盆休み仕事折りが回つて来

思い出が時折り老いに灯を点し

野良仕事明日は休める空模様

年毎に一〇〇歳の顔若くなり

かあちゃんが見白にして家平和

独り居の窓を明ければ虫しぐれ

触れた手にときめきがある若さもち

扇風機秋風がきて忘れられ

盆休み読経の声もとぎれがち

浴衣着て女らしさを確かめる

愛らしいから尚更絆深まって

あれこれとたまの休みに使われる

主治医とは神様であり悪魔なり

いさり火川柳会

尾崎三代治報

大根も器量の良さが競り上がる

大根の白さが秋の目にしみる

大根役者大根なりの味を出すし

ちとからい大根おろし食すすめ

涙壺溢れ泣けないときもある

うれしくてならぬ涙がわいてくる

失恋のからすも涙流すかな

人生はなみだ笑いのドラマです

珍顔

柳香

富子

スミエ

ひかり

よし

迷香

マサエ

チカエ

明人

白柳子

放任

吟笑

いさむ

かおり

伽名子

迷貫

迷観子

智恵子

三代治

豊子

三重子

伊都子

由多香

孝人

武士

12 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 お よ び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 1 時から 無策・重い・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩 3 分 〒661 尼崎市南清水11番 1 号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手 3 枚
堺川柳会	3 日(日)午後 1 時から 合図・危ない・案外・阿呆	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 塔 ま つ え	9 日(土)午後1時半から 中流・ダンス・宝くじ	松江市和多見町 慈雲寺番神堂 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	10日(日)午後1時から 友 達 ・ 扉 ・ 訥 弁	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
八尾市民 川 柳 会	10日(日)午後 6 時から 凍る・忘れる・越す・来年	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
西宮北口 川 柳 会	11日(月)午後 1 時から 疲れる・街・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩 5 分 〒663 西宮市高木東町 9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手 4 枚
南 海 川 柳 会	15日(金)午後 6 時から 範囲・説明・各地・愛用	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	17日(日)午後 1 時から 割箸・酒・番組・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 6-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後 1 時から 金・人形・黒い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩 5 分 〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番 5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(火)午後 6 時から 不思議・無理・ゆるい・ルール	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
富 柳 会	21日(木)午後 1 時から 本 気 ・ 本 屋 ・ 保 険	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町 4-1 池 森子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	22日(金)午後 1 時から 口実・騙す・スタイル・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩 5 分 〒569 高槻市富田町1-7-7-905 福盛京童 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚 各題 2 句
川 柳 東 大 阪	23日(土)午後 6 時から 橋・味方・甘い・忠臣蔵	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西 5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
※駒つなぎ川柳会は今月お休みです。		

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円 (62円切手 5 枚)、各題 3 句以内
原稿送り先 (締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)
〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

川柳塔碑開眼式に参列して

田中正坊



川柳塔社同人と川柳愛好家の浄財によって高野山奥の院大靈園に建立された「川柳塔」碑の除幕・開眼式が秋晴れの十一月十二日、西尾栗主幹はじめ同人・誌友有志六十五名が参列して挙行されました。

式は正午過ぎ、西田柳宏子氏の司会で開かれ、栗主幹が「あかあかともみに映える清々しい本日茲に我が国最高の聖地であります高野山に於きまして全国の川柳塔同人並びに川柳愛好家の御浄財をもつてかねて願望しておりました恩師麻生路郎の『川柳は人間陶冶の詩である』という語録を後の世に伝える石標を建てると共に私達が死んでも尚柳号で呼び合い永遠に柳魂を温め愉しく川柳を語り合うことの出来る川柳塔の碑の開眼式を挙行出来ましたことを皆様共々お喜び申上げる次第でございます（後略）」と式辞を述べた後、薫風・紫香両副主幹らによって除幕されると、白い御影石に社章と川柳塔の文字がくつきりと刻まれた碑が陽光に照り映えました。

次いでこの靈域を寄贈された内海幸生氏に栗主幹から感謝状と記念品が贈呈され、僧侶の読経の中、靈位が安置され、参列者一同が順番に焼香して式典を終わりました。当日は中島小石さんも、前主幹の故生々庵氏の初句帖を持って参加されました。

この後、一行は珠数屋四郎兵衛方で会食して解散しましたが、奥の院などに参詣して山内を散策した人もありました。

なお、毎年八月のお盆に大靈園合同慰霊祭が真言宗事務総長の親修のもとに行われることとなっており、その年の物故者の柳号と没年月日を金剛峯寺に納めてある「俱会一処」の過去帖に明記して追善法要に参加すること、を川柳塔社の年中行事とすることが、栗主幹の式辞の中で述べられました。

次に当日の献句を紹介します。

柳魂のこだま高野は秋深し
ひたむきに生きて急がぬ俱会一処
永遠に絆を結ぶ川柳塔
路郎師を知らずあやかる川柳塔
川柳の縁で眠る俱会一処
天国へゆくのも楽し柳友が待つ
辿り来てここがよるべの詩の塔
ふれあえば人みなやさし川柳塔
御仏と師に導かれ永久の句座
安らかに眠る高野に空は晴れ
靈山の蓮の台で句座開き
川柳塔来世もたのし奥高野
とこしえの柳縁土もあたたかし
流れ星忘れることはむずかし

紫香
太茂津
武庫坊
年代
保州
登志代
千秀
朱夏
千寿子
よし津
紀美女
君子
みつ子
いわゑ

N H K 学 園

川 柳 近 畿 大 会

日 時 平成2年2月18日(日) 午後1時

会 場 河内長野市 市民センター・

ノバティホール

(近鉄「河内長野」駅前)ノバティ
長野南館3F)

講 演 「わたしが手本にしている句」

橘高 薫風

宿題と選者 (各題2句)

- | | |
|--------|-------|
| ①「近 い」 | 板尾 岳人 |
| ②「食べる」 | 中田たつお |
| ③「坂」 | 西尾 朧 |

席題と選者 (各題2句)

- | | |
|--------|-------|
| ① 当日出題 | 堀口 北斗 |
| ② 同 | 亀山 恭太 |

リレーミニ講演「よい句の条件」

◇宿題事前投句締切 1月22日(月)

◇投句先

〒186-01 国立市富士見台2-36

N H K 学園川柳近畿大会事務局

◇投句料 1600円 (入選作品集代を含む)

＜参加要領＞

◇大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の宛先を書いた返信用ハガキを同封して下さい

◇事前投句は、普通の便箋、またはこれと同じ大きさの用紙2枚を、いずれも真中にタテの線を引き、1枚目の右半分に郵便番号、住所氏名(ふりがな)電話番号、NHK学園川柳講座受講者の方は受講番号、大会への出欠を書き、1枚目の左半分に宿題①の作品、2枚目の右半分に宿題②の作品、左半分に宿題③の作品を、それぞれ2句記入して下さい。



川柳塔碑の正面。向かって右側の
靈標には路郎語録が刻まれている。



川柳塔碑の裏面。栗主幹による塔
建立の趣旨を刻んだ碑文がある。

柳界展望

集録一敏・武庫坊

る 佐藤 藤子

この一杯僕の人生変える
かも 堀端 三男

★東大阪市文化祭参加・市
民川柳大会が10月29日、市
立社会教育センターで83人
が参加して開かれ、次の本
社同人が秀吟賞を獲得した。

てんびんのくらしが残る
父の肩 吐田 公一

悠久の時へにんげん点と
なる 西山 幸

偽紳士人間臭いから救す
野村太茂津

★第44回尼崎市長文芸祭川柳
部門第2席に西口いわゑさ
ん(西宮市・同人)の次の
作品が入賞した。

矢面にたつて男の顔にな
る

★第29回和歌山俳句・川柳
・短歌大会(10月28日)の
川柳部門で久保正敏氏(唐
津市・同人)が観光協会長
賞を獲得した。

★ふれあいの祭典・ひよう
ご89川柳発表大会が10月
29日、西宮市なるお文化ホ
ールで開かれ、表彰式で文

部大臣奨励賞が林荒介氏ら
に授与された。

★寝屋川市民川柳大会は11
月3日、市立総合センター
で開かれ、次の同人両氏が
秀句賞に選ばれた。

嫁が来てのん気にさせて
もろてます 宮崎シマ子

石一つ軽い命の名を残す
稲葉 冬葉

★川柳カレンダー第1回全
国川柳大会に次の同人5氏
が佳作A・Bに選ばれた。

御仏の視線の先の蟻地獄
永田 俊子

シナリオを又変えさせる
山本 玉恵

新同人紹介

西 尾 美与子
— 薫風・紫香・萬的推薦

秋 元 てる
— 薫風・はつ絵・みつ子推薦

山 崎 君子
— 薫風・智子・はつ絵・みつ子推薦

岸 本 木魚
— 紫香・太茂津推薦

岩 崎 瑞穂
— 紫香・太茂津・与呂志推薦

西 口 忠雄
— 紫香・太茂津・与呂志推薦

★和歌山県第31回文芸まつり
りで同人5氏が第1位の知事賞はじめ第5位までを占めて注目された。

善人も被ると怖い鬼の面

寺田 裕美

サンマ一匹男の部屋で焼き上がる 牛尾 緑良

音のない時刻表から風の音 上杉 信秋

青年の樹は挑戦を忘れない 福井 桂香

妥協には遠い一本道がある 田中 輝子

★本誌の表紙でおなじみの直原玉青先生（日本南画院理事長）指導の青玲社は、

10月27日から同29日まで大阪美術倶楽部で第28回青玲社日本画展を開催。玉青先生

の作品のほか中島小石・岸本豊平次両氏（本社同人）などの作品多数が展示された。

★ふあうすと川柳社の総合事務所が左記に移転した。

〒650神戸市中央区加納町3丁目11の2（岡田ビル3F）

電078・2511453

★鳥取県没句川柳供養大会が12月10日午前10時から鳥取共済5階ホールで開かれる。兼題は「敗者復活吟」（今年の没句）と、あの世・

刺す・男泣き・許す・ねば

る・毒・ほんやり・恋、各2句。参加費2000円、

欠席投句は10000円（切手可）を添え、12月5日までに鳥取市東大路64・両川

洋々宛。

▽出版版△

★「川柳泉尾」の鈴木三千代氏が川柳小話集「ねんねこ」（A5判・160頁）を刊行

★永田曉風著「風の貌」刊行。希望者は郵券260円を添え宝塚市小林5-8-24へ

▽同人消息△

■11月3日（文化の日）に里小路氏（寝屋川市・本社常任理事）が寝屋川市文化連盟から表彰された。

■谷垣史好氏（松原市・本社常任理事）は11月1日退院。自宅で療養中。

■病氣療養中の斉藤三十四氏（東大阪市・同人）から

近況通信で次の句が寄せられた。

・高血圧脳軟化への道いそぐ

・CTでは十三回も写される

・白内障 手術でなおると保証され

■NHK学園「川柳春秋」15号の「一人50句」に八木千代氏（米子市・参事）が

「椿守」と題して掲載、また、同号の「川柳・初心のころ」に奥谷弘朗氏（倉吉市・参事）が「川柳こそ我が人生」と題して執筆

▼計報▲

■吉岡美房氏（藤井寺市・常任理事）の尊父、義一氏は10月28日逝去。告別式が29日行われ、栗・薫風・花梢・吸江・鬼遊・岳人・重人・吐来・敏氏らが参列。

■新谷忠昭氏（和歌山県・同人）は去る9月に逝去。

『銀河系』欄について

河内 天笑



平成二年一月号から橋高薫風氏選の「愛染帖」を「銀河系」と改め、私が担当することとなりました。

たくさんの方々との対話できるよろこびと責任を感じています。一層の精進をして参りたいと思います。どうかご支援ください。選句に際し、投句者のお顔、お年、また、どんな立場におられる方なのかも知っておきたいのです。スナップ写真をお送りください。

私の柳歴

昭和9年9月28日生 川柳歴23年
川柳塔社常任理事 堺川柳会会長
高島屋ローズカレッジ川柳教室講師

高橋 操

「栗・岳人・武助・狸村推薦」

本社12月句会

日時 12月7日(木) 午後6時
会場 メンズファッションセンター3階

中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

兼題 「映画」

「ケーキ」

「明るい」

「納める」

黒川 紫香

西山 幸選

板尾 岳選

阿萬 的選

西尾 栗選

席題 2題 当日発表 各題2句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に1葉1句。
各葉ごとに裏面に必ず氏名明記。
投句料310円(62円切手5枚)同封のこと。

本社1月句会 8日(月)

兼題 「評判」「遠い」
「開く」「夢」

川柳塔社

『夜市川柳』募集(3句)

題選者 締切

第7回 「打つ」 小出 智子 12月末

第8回 「職」 高杉 鬼遊 1月末

第9回 「洗う」 森中恵美子 2月末

第10回 「影」 中尾 藻介 3月末

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2

河内天笑方
堺川柳会

2月号発表表(12月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選

水煙抄(10句)黒川 紫香選

銀河系(3句)河内 天笑選

茴香の花(3句・女性)八木千代選

吟題 「針」 佐藤 藤子選

課題 「割る」 里 小路選

敬語 奥谷 弘朗選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

3月号発表表(1月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選

水煙抄(10句)黒川 紫香選

銀河系(3句)河内 天笑選

茴香の花(3句・女性)八木千代選

吟題 「緑」 河内 月子選

課題 「耳」 天正 千梢選

「入る」 吉川 寿美選

★銀河系・茴香の花・課題吟の投句は柳箋

使用のこと。どなたでも投句できます。

定価 六百元(送料51円)

半年分三千八百円(送料共)

一年分七千五百円(送料共)

平成元年十一月二十五日印刷

平成元年十二月一日発行

編集兼 発行人 西尾 蔵

印刷所 藤原 童心 社

〒545 大阪市阿倍野区三好町一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 電話(三六九)六九一四番

振替口座大阪8-13336八番

川柳塔社

編集後記

☆私達の先生である麻生路郎師の句集「旅人」の序文にこんなことが書いてある。「エスベラントのため一生を捧げたザメントのホフ博士は偉らかった。ロシア文学の英訳に一生を捧げたマグリット夫人は偉らかった。糞虫の研究に一生を捧げたアンリー・ファブルは偉らかった。何れも自分の夢を実現させた人達である。」

川柳の社会化運動と一冊のこの句集、私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれてはいない。せめてそれを力ぐさに歩き続けよう」と。

☆そして、そのはしがきの中に「句はその人のこころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」とも書かれている。まことに味わうべき言葉であると思った。☆その頃、『ふあうすと』

の主幹梶元紋太さんの句文集『わだち』が刊行されている。その自序の中に「私は自分が川柳を作り、この世に生れて来た様な気がする」とA君に話したと：中略：自分はよほど川柳に熱心だったに違いない。それがよいことか悪いことかは知らないが、今の私は只感謝あるのみである。そのために一生を棒に振ったなど嘘にも言いたくない。私は常に幸福に恵まれて来た。莫大な恵みであった。」

☆それぞれの先生方は、川柳一本に人生を捧げて、一つも悔いるところがなかった。私達も、早くそんな境地にたどり着きたいものである。(萬)

▼近くの市場が新装開店した。ガードマンが出て交通整理をするほど、連日、大盛況である。永い間、火の消えた様な存在だっただけに、入場制限までしなければならぬ繁盛ぶりは意外というほかない。これは改

装だけが原因でない。安いということが客足を引きつけたに外ならない。生産者コストを知らない客にとつては、他店との比較による評価しか方法がない。僅かばかりの安さを追って主婦は東奔西走する。折角、安い物を買った気分を損ねるのが消費税である。

▼高齢化社会に備えるとは言え、国庫にも満足に入らない税金をことあるごとにむしりとる矛盾が何故ゆるされるのだろうか。三%を僅かというなかれ、アルミ貨一枚で、広島市水道局の地図情報システムの基本設計が落札されることもあるのだ。防衛費の対GNP一%と同じように、安易に考えてもらっては困る。何故安易かと言うと、消費税問題で政権危うしと知るや、見直し論を強調、すべて自党のために外ならない。

▼政治をバカにしては政治が育たないと言うが、折込み広告を手にする主婦たち

のいじらしさを思ったことがあるだろうか。ゴルフ場ばかりどんどん出来て、億近い価格の家が何万何十万軒建つても何の足しにもならない。せめて外国なみの安い牛肉をえるように出来ないものなのか。(き)

★「高齢化社会危機論」というのが、政府筋から盛んにPRされている。「今は五・九人で一人の老人を養っているが、三十年後には二人で一人の割合になる」というのである。これでは若い人の負担がたいへんだし、金もかかるから消費税も不可欠」という論理だ。なるほど生産年齢人口(15～64歳)と高齢者(65歳以上)の比率が、二〇二〇年には一対二・五となるのは推計的に本当だろう。

★しかし、老人でも働いている人もおれば、若くても働いていない者もいるから現実の扶養・被扶養の関係をみるなら、年齢ではなく労働力人口を基礎にしなければ正しくない。こうして計算すると、就業者一人が自分もふくめて扶養する人数は、現在も二十一世紀初めも二人強で、負担は今とほとんど変わらない、というのが多くの学者の指摘である。

★それなら何もビクビクすることはないし、世の高齢者も肩身の狭い思いをすることはサラサラない。こんな目に見えた大きな嘘がまかり通っているところに、政治のおそろしさがある。国内的にも、また国際的にも何かと事の多かつた平成最初の年であり、一九八〇年代最後の年でもあった今年も、やがて暮れようとしている。みなさま、どうぞ佳き新年を。(正)

▽お詫び 10・11月号掲載大阪文化祭川柳大会の兼題「頼む」定金冬二選が脱落10月号の東大阪市民川柳大会兼題「詩」は「時」の誤植、本社11月句会の出句数は2句以内の誤りでした。

KIRIN
 21世紀へ乾杯

本格派。

旨さの辛口。

アルコール度数高め
 キリッとしまるドライ。

キリンビール株式会社

キリンドライ

標準の小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。

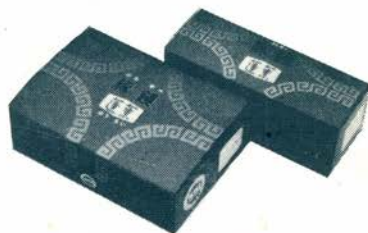


ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ



ほうらい



TEL641-0551